



## 神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

出来事の真の見方をマリアに学んでいく

「羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。」(2・17) 本日新成人の祝福式があります。羊飼いが幼子イエスのことを人々に知らせたように、自分の信仰を人々に知らせる人になってもらいたいと思います。

まずは新年明けましておめでとうございます。今年もよい年でありますように。神の母マリアの祭日のミサを通して一年を始めることで、神の計画を静かに思い巡らすマリアの姿を今年一年の鏡としましょう。年賀状をくださった方もおられると思います。この場をもって、お一人お一人へのあいさつの代わりとさせていただきます。

福音朗読に戻りましょう。羊飼いたちは飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけ出しました。単に幼子を見つけ出したわけではありません。幼子を見つけるだけなら、毎晩羊の見張りをしながら夜を明かす彼らにとって何も難しいことではありません。そうではなく、飼い葉桶に眠る乳飲み子の中に、「救い主」「主メシア」を見つけ出したのです。

どういう意味でしょうか。羊飼いたちは天使によって出来事を知らされました。天使が語ったことは神の救いの計画と、それが今や実現したことを示す「しるし」でした。羊飼いがマリアとヨセフを訪ねてみると、その両方を確認できたので、人々に「天使が話してくれたこと」を知らせたのです。出来事の向こうにあるものを見る目が、必要でした。

もちろん、羊飼いの話を聞いた人が皆、「神の救いの計画」と「計画が今や実現したというしるし」と、両方を理解できるとは限りません。私は田平教会にいて旅行者の中にロザリオを首から提げてネックレスにしている人を見ました。「ジャラジャラ重たいだろうに。ご苦労様」と思うと同時に、「その身に着けているものが何か、わかりますか?」と話しかけたくなります。祈る道具としてのロザリオが、彼らには見えていないのです。

2019年は皆さんが、教皇フランシスコを直接目で見、あるいはテレビで姿を拝見した年になりました。2020年は私たちの信じているキリスト教に話題を結びつけるまたとない機会です。二度と無い機会かも知れません。神様は、長い教会の歴史の中で、もう一度、小さな人々、貧しい人々に手を差し伸べるイエス・キリスト、神の子みずからが貧しくなって人々に寄り添ってくれたことを示したかったのです。

今、私たちに与えられた教皇は、刑務所に服役している人を聖木曜日の典礼で足を洗ってあげたり、路上で生活している人のお世話を担当司教と衣服を交換して変装し、自ら食べ物を配ってあげたりするお方なのです。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ 25・40) この世界に生まれたままのイエスを、現れたときにおこなっていたことそのままを、フランシスコ教皇様は実践してくださっています。

新成人の皆さんにも、周りの人に自分の信じていることを説明してあげる人になって欲しい。「飾り付けているクリスマス飾りの意味がお分かりですか？馬小屋に眠る幼子イエスが、これからどんなことをするかお分かりですか？」あなたの身の回りには、キリスト教の信仰に繋がることをイベントとして単に楽しんでいる人がたくさんいるはずです。その人たちに、「その意味を、教えましょうか？」と近づいてください。

きっと人々は、皆さんが話すことを不思議に思うでしょう。けれども何人かに一人は、出来事の向こうにある意味に気づいてくれるかも知れません。新成人の皆さんが20年前に受けた命、キリスト教の信仰は、出来事の向こうに神の働きがあるのです。目に見える命だけでは、命の大切さを説明し尽くせません。「神が与えてくださった命だから大切なのですよ」と、見える命の向こうにあるものを話してあげる人になってください。説明に行き詰まったら、遠慮無く私を訪ねてください。私の所にその人を連れてきてください。

今日、新成人を迎える皆さん、神の母聖マリアがこの門出を祝ってください。マリアがこう語りかけてくれます。「私は、あなたの母です。肉親の母ではないかも知れませんが、出来事の向こうにあるものを説明するお手伝いのできる母です。私を通してイエスに祈ってください。言いエスが出来事の本当の意味と価値を教えてくださいます」そう言ってこの門出の日を祝ってください。

マリアを通してイエスに祈る人であってください。世の中の出来事は、イエスという光に照らさなければ理解できないものがたくさんあります。悩むとき、目の前のことだけにとらわれずに答えを探す導きを、マリアはきっと助けてくださいます。これからも、田平教会と繋がって、神の母聖マリアと繋がって、日々生きることを期待しています。

主の公現(マタイ 2:1-12)



## 主の公現 (マタイ 2:1-12)

私たちは別の道を通して生きる者

主の公現の祭日を迎えました。占星術の学者たちは最終的に、「夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った」(2・12) のでした。別の道、ヘロデにあいさつして帰るこの世の道ではなく、礼拝したイエスに導かれて帰る新しい道を彼らは選んだのです。

田平教会の今年の年間テーマを、「今年、信仰の分かち合いができるキリスト者に育ちましょう」としました。昨年教皇様を間近に見た私たちは、積極的に自分も教皇様と同じ道を歩くカトリック信者であり、教皇様が大切に考えていること、特に命を守ることや弱い立場にある人への理解は、同じ考えを持っていきますと声を上げる年にしたいと思っています。聖書の分かち合いは大変かも知れませんが、教皇フランシスコと同じ信仰を持っていると声を上げることは今年の内には可能なはずです。

去年 2019 年は、一昨年に献堂百周年を祝った後、「聖堂を百年守ってきた」その姿勢から一步前に出て、教会に生かされている自分を証しする、教会に生かされる生活に関心を持ってもらうよう働きかけてみましょうというテーマでした。田平教会のために、一步前に出て何かお手伝いして下さったと思います。今年、信仰を証しする取り組みをさらに積み上げましょう。

1月2日、帰省された方々の半日黙想会を行いました。教皇フランシスコのことを少しでも知って、今年の年間テーマを実現する手助けになればと思って話してみました。実はまだよくこなれていない状態で話したのですが、3月22日の黙想会ではもっとすんなり話に耳を傾けられるようになってきていると思います。ついでになりますが、田平の黙想会の直前の週に、何と上神崎教会から黙想会の説教師を頼まれまして、ここだけの話、上神崎で十分練習を積んで、それから田平で話すことができるなあと喜んでおります。内緒ですよ。

さて、1月2日の黙想会が終わってから、嬉野の温泉に浸かりに行こうと思ひまして、午後から車を走らせました。江迎の高岩駅の線路の下をくぐったときに、何やら異変を感じまして、くぐったすぐ先にあるアパートの敷地でとっさにUターンして、また県道に上がってきました。くぐる直前、右の案内板には「右折禁止」左の案内板には直線と左折のみの案内があり、これまであったはずの「7時から9時までと16時から19時まで右折禁止」という案内が見当たらなかったのです。

さてはまんまと罠に引っかかったと思い、とっさに線路の下のアパートの敷地内でUターンしたわけです。県道に上がってみると、後ろにパトカーが見えるではありませんか。これは捕まった、と思いつつ斜め前のセブン・イレブンに避難したところ、私の直後にいたパトカーはまっすぐ江迎署に向かい、事なきを得ました。この日私は昨年までの高架下を右折して佐々に向かう道ではなく、「別の道を通して」無事嬉野までたどり着いた。そんな新年の幕開けでした。少なくとも私が通ったと

きは全面右折禁止になっていました。ご用心ください。

お巡りさんを避けるための「別の道」はついでの話です。私たちが真面目に考えるのは占星術の学者たちが選んだ「別の道」です。彼らは「別の道があるだろう」ということは考えてはいたと思います。夜空に輝く星を頼りにこの世界の歩みを占っていたのですから、この世の王が支配する人間の暮らしだけがすべてではないだろう。きっと正しい王が人類を治め、導く道があるはずだ。それは考えていたと思います。

しかし実際にはこの世の王の支配は逃れられない現実でした。ユダヤの国に入れば、ユダヤを支配しているヘロデにあいさつをしてからでなければ彼らは安全が保証されません。どこに行っても、どこにいても正しい王が民を治める時代がいつか来るに違いない。学者たちは幼子を見つけたときに、新しい時代の到来を確信したのです。

この世の権力者に振り回されるのではなく、幼子イエスを通して正義と愛と平和の国を期待できる。占星術の学者たちは確信して帰りました。新しい道が開けた彼らは、古い道を通して帰りませんでした。つまりこの世の支配者にあいさつして帰る古い生き方を捨てて、正しい王に導かれて生きる新しい道に従って帰ったのです。

私たちはどうでしょうか。今やイエス・キリストに導かれて生きる新しい道が示されました。幼子イエスは口を開いてあれこれ指示しませんが、幼子イエスに従って生きる道は、イエスの前に跪くとき、必ず示されます。なぜならここにおられる幼子は、私たちのいちばんそば近くにいてくださるために、幼子の姿を取ったからです。イエスが、私たちのいちばんそば近くにおられる。そのことを信じるなら、私たちは新しい道を通して生きていくことができます。

もしかしたら、私たちはこれまでの生き方をなかなか手放せないかも知れません。これまでの生き方で成功したとか、この世のルールでそれなりに生きることができていると考えるなら、これまでの生き方に執着するかも知れません。イエスがいちばんそば近くにいて、私たちがどちらか選ばないといけないときに、「イエス様はどちらを望みますか？」と問いながら決断することに慣れないかも知れません。

ここで占星術の学者たちを見倣いましょう。彼らは自分たちの贈り物をイエスに差し出しました。もしかしたら、命の次に大切なものだったかも知れません。それをイエスの前に置いたとき、イエスに導かれて生きる新しい道、別の道が開かれたのです。ですから私たちも、私たちが命の次に大切と思っているものをイエスに差し出すなら、イエスの導きを受けて生きる新しい道が見えてくるのではないのでしょうか。

教皇フランシスコは、イエスに導かれて生きる姿を、国民の0.1%しかカトリック信者のいない国で証ししてくださいました。別の道を通して生きること、経済最優先の道とか、何とかミクスとか、私たちはもしかしたら踊らされているのかも知れません。99.9%の人が選んでいない道ですが、私たちはこれからも、別の道を通して生きる者なのです。



## 主の洗礼 (マタイ 3:13-17)

神の「愛する子」の時代が始まった

主の洗礼の祝日を迎えました。洗礼者ヨハネは最後の預言者で、イエスは新しい時代の到来です。時代の変わり目にあって、イエスが言われた「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」(3・15)を実践するイエスに、私たちの模範を見つけることにしましょう。

先週あれだけ言っていたのに、いまだに高岩駅の線路下を右折してぐる車が後を絶ちません。土曜日にバイクで「かめや釣具」まで遠出をしました。帰りに江迎中学校近くにあるデイリーで様子を見てみると、右折して川沿いの交差点まで軽自動車がやって来ました。

「500m先、峠を登る手前に、取り締まりをしている警察がいるのがなあ」と思いつつ、私の250ccのバイクで高架下の一時停止から坂道発進するのは無理と判断して、近道を避けました。高岩駅までやってくると、また別の車が右折をしようとして後続の足止めをしているではありませんか。私は合図をして、「右折、ダメよ～ダメダメ」と伝えてみたのですが、伝わらなかったようです。

福音朗読に入りましょう。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けるのですが、罪のないイエスが悔い改めの洗礼を受けるのがなぜ「正しいことをすべて行う」ことになるのか、その理屈がいまいち理解できていませんでした。参考になっている解説書を読み返し、毎年読んでいたのですが、今年読んでみてようやく理解できました。

ヨハネの時代である今は、彼から悔い改めの洗礼を受けることが人の取るべき態度です。悔い改めの洗礼は、洗礼者ヨハネで最後となる預言の時代に、神がイスラエルの民に望んでいることでした。それでイエスも父なる神が当時の時代望まれていたことに従われ、群衆の一人となって悔い改めの洗礼を願い出たわけですね。ようやく私も、「なぜ」という疑問から解放されました。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3・17)。イエスが当時のイスラエルの民に神から求められていたことを選び取ったとき、天からこの声が聞こえました。イエスに倣うとき、私たちもまた父なる神から「わたしの愛する子」「わたしの心に適う者」とされるのではないのでしょうか。今、私たちに求められていることを考えて、どのようにしたらイエスに倣う道をたどれるのか探りましょう。

私は、やはり教皇フランシスコの歩みが、現代の教会に神から求められている姿を現しているのではないかと考えています。その中で一つ取り上げるとすれば、教皇フランシスコが2015年を「いつくしみの特別聖年」と定め、そのために示された文書(大勅書)「イエス・キリスト、神のいつくしみのみ顔」にあらためて耳を傾けるのが良いと思っています。詳しくは3月の黙想会で取り上げたいですが、この大勅書の15番に、次のように書かれています。

「この聖年の間に経験すべきなのは、自分とはまったく異なる周縁で

の生活——現代世界がしばしばその劇的な状態を引き起こしています——を送るすべての人に心を開くことです。今日の世界には、どれだけ不安定で苦しい状況があることでしょうか。どれだけの傷が、もう声を上げることのできない多くの人の肉体に刻まれていることでしょうか。」

「それは、豊かな人の無関心によって彼らの叫びが小さくかき消され、それ以上声が出せなくなってしまったからなのです。この聖年の間に、教会はこれまでも増してこの傷の手当てをし、慰めの油を塗り、いつくしみの包帯を巻き、連帯としかるべき気遣いをもって世話をするよう呼びかけられることになります。」

「侮辱を与えることになる無関心、心を麻痺させて新しいことを求めさせないようにする惰性、破壊をもたらす白けた態度、そうしたものに陥らないようにしなければなりません。世界の悲惨さと、これほど多くの尊厳を奪われた兄弟姉妹の傷をよく見るために、目を開きましょう。

(以下省略)」

実は教皇フランシスコは、次の教皇様を選挙するコンクラーベに招集されたとき、総会の席ですべての枢機卿様が5分間の演説をする間に、「教会はそれ自体から出て、周縁へと向かうことを求められている」と発言しました。少し引用します。

「教会はそれ自体から出て、周縁へと向かうことを求められている。それは地理的というだけでなく、実存的な意味での周縁、罪の不可解、苦難、不公平、宗教の軽視と欠如といった周縁、思想の周縁、あらゆる種類の惨めさという周縁に向かえということでもある。それを行わないとき、教会は『自分のことばかり話をする病んだ状態』になる。腰が曲がったままになった女性(ルカ 13・11)のことが思い浮かぶ」。

現代の教会、現代のキリスト者に求められていることは、「周縁」へと向かうこと、「周縁」にいる人々にいつくしみを示すことだと断言しておられたのです。

「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」私たちがイエスに倣い、行動する大きな目標がここに示されています。「周縁」にいる人々にいつくしみを示すことです。そうすることで私たちは、イエスのように御父から「わたしの愛する子」「わたしの心に適う者」と呼んでいただけるようになります。

周縁にいる人々。私にとって、いちばん遠く、最も疎遠になっている人は誰でしょうか。あるいは教会を避け、教会から最も遠ざかっている人は誰でしょうか。その人に教会がどのように動けば、いつくしみの手を差し伸べることができるでしょうか。私は何ができるでしょうか。

教会は、「キリストの花嫁」と呼ばれます。「花嫁」にふさわしいのは、厳格さを振りかざすよりも、むしろいつくしみで包むことです。きっとできることが見つかると思います。置かれた中でできることを果たして、私たちも父である神から「わたしの愛する子」「わたしの心に適う者」と呼ばれるキリスト者に変わりましょう。黙想会はその良いきっかけを与えるでしょう。



## 年間第2主日 (ヨハネ 1:29-34)

イエスが交わりに招き、証言者としてくださる

「わたしはこの方を知らなかった。しかし(中略)わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」(1・33,34) 洗礼者ヨハネがイエスを「知る」に至った出来事に中田神父は注目してみました。洗礼者ヨハネはイエスが目の前に現れてもイエスを知ることができなかったのです。何が起って、彼はイエスを知ることができたのでしょうか。

誰も興味ないかも知れませんが、司祭団のマラソンが1月28日(火)に予定されていまして、2週間前になったので怪我だけしないようにと教会の周辺をジョギングし始めました。タイムは二の次です。中田神父には司祭団マラソン大会とは別の構想があつて、マラソン大会で怪我をするわけにはいかないのです。

別の構想というのは、田平教会を出発点にして、2泊3日で今村教会までできるだけ歩いて巡礼しようというものです。今年実現できるかわかりませんが、ある部分は電車のお世話になって、田平教会と今村教会、建物の関連だけではなく、人と人とのつながりができればいいなと思っています。100年前は、車も走ってなかったことを考えると、鉄川与助は、ひょっとしたら歩いて今村と田平を行き来したかも知れない。そう思うと夢があると思いませんか？

福音に入りたいと思いますが、洗礼者ヨハネはイエスの姿を見てもイエスを知らなかったのですが、何かがあつてイエスが神の子であると知り、証ししたのでした。私は洗礼者ヨハネが、イエスの御父と聖霊との交わりに、招き入れられたとき、イエスが神の子であると知ったのだと考えました。

洗礼者ヨハネは、自分を遣わした方から「“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である」(1・33)と言われていました。イエスが洗礼を受けた後に、前もって聞いていた出来事を体験しました。

「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。」(1・32)父と子と聖霊の交わりに、洗礼者ヨハネも招かれて、神との交わりを体験したとき、イエスが神の子であると知ったのです。イエスの姿を見た時よりもむしろ、イエスとの交わりを体験したときに、イエスを知ることができたのです。

イエスの姿を見たときよりも、イエスとの交わりを体験したときを大切に考えるなら、同じ体験は私たちも可能になります。幸いに私はすぐ身近なところでちょうど当てはまる体験をしました。その時私も、イエスは神の子であると知ることができました。今日ここで、借り物の話ではなく、確信を持ってイエスがそばにいてくれたことを証ししたいと思います。

十日ほど前、手術を控えた方を見舞って、お祈りして欲しいという

依頼を受けました。家族の話聞いて、病者の塗油と聖体拝領の準備をしていくことにしました。病者の塗油を授けるとき、聖書の言葉を朗読して、病者の油を塗って、聖体拝領を授けます。通常は、すべて儀式書に定められた式文に沿って行います。

ところで私は、今回の病者の塗油に際して朗読する聖書の箇所を、違う朗読箇所を考えていました。それは、シモン・ペトロの姑が熱を出していたときに、イエスが熱を去らせてくださり、姑は一同をもてなしたというマルコ福音書の物語でした。病人訪問まで一週間あったので、当日までには該当箇所を探しておこうと考えていたのです。

ところが、病院に向かう水曜日の朝のミサのことです。その日指定されていた箇所は、何とシモンの姑の熱をイエスが去らせてくださった箇所だったのです。「あなたが必要としていることを私は知っている。」イエスにそう言われているような気がしました。

私はイエス・キリストをこの目で見たことはありませんが、イエスは私をご自身の三位一体の交わりに招いてくださり、「イエスは神の子である」と知ることができたのです。司祭として27年務め、この務めを通してイエス・キリストを語ることはできます。揺るぎない確信がなくとも、長年同じことを果たしてきたので語ることはできます。そんな私にイエスは圧倒的な方法でご自身を示してくださり、自信を確信に変えてくださったのです。

洗礼者ヨハネは、自分を遣わした方が先に示した光景を見せてくださることは信じていたでしょう。けれどもイエスが目の前に現れても、まだイエスを知るに至らなかったのです。けれどもイエスのほうから洗礼者ヨハネを招いて、三位一体の交わりに触れさせてくださったのです。「あなたが必要としていた光景を見せてあげよう。」ここに至ってようやく洗礼者ヨハネはイエスが神の子であると知り、証をしたのです。

日本の諺では「百聞は一見にしかず」と言いますが、イエスを「知る」ということは、人間が百回聞くよりも、人間が一回見るよりも、イエスとの交わりに招かれることが大切なのです。イエスを知るということは人間の能力を超える出来事を知ることですから、イエスのほうから三位一体の交わりに招かれる必要があるのです。

イエスは、ご自身を知り、愛し、人々に証しするために、私たちに招いてくださいます。洗礼者ヨハネさえ、イエスが目の前に立ってもイエスを知ることはできませんでした。イエスが三位一体の交わりに招いてくださって、イエスを知ることができたのです。

私たちも同じです。イエスが三位一体の交わりに私たちに招いてくださいます。私たちはイエスの交わりに招かれて、イエスを知り、イエスを愛し、人々にイエスを証しすることができるようになります。イエスが招く三位一体の交わりは、ミサを通して、洗礼者ヨハネの時よりも身近に与えられています。このミサの中で、私たちもイエスを知り、証しする者となれますように。





## 年間第3主日(神のことばの主日)(マタイ 4:12-23)

神のことばは闇を照らす光

教皇フランシスコは、自発教令の形式による使徒的書簡『Aperuit illis』を、2019年9月30日(聖ヒエロニモ司祭の記念日)に公布して、年間第三主日を「神のことばの主日」と名付け、「神のことばを祝い、学び、広めることにささげる」ことを宣言されました。自発教令の一部を引用します。

「それぞれの共同体は、ある程度の荘厳さをもってこの主日を特徴づけるための、自分たちにふさわしい方法を見つけていくことでしょう。しかし大切なことは、神のことばの規範としての価値に会衆の注意を向けさせるために、聖書のことばがミサにおいて賛美されることです。

この日曜日には、主のことばを告げ知らせることを際立たせ、説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調するのが、とくにふさわしいといえるでしょう。

司教たちは、典礼における神のことばの告知の重要性を明らかにするために、朗読奉仕者の選任式、あるいは朗読者を任命するための類似した式を執り行うことができるでしょう。

この点について、みことばの真正な朗読者となるために必要な養成を信者に提供するために、新たな試みがなされるべきです。このことは、すでに祭壇奉仕者あるいは聖体拝領のための臨時の奉仕者の場合には行われています。

司牧者たちは、聖書をどのように読み、味わい、そして日常的にどのように聖書とともに祈るかを学ぶ重要性を示す手段として、聖書あるいは聖書の中の一つの書物を全会衆に与える方法を見つけることもできます。とくに、『霊的読書(レクツィオ・ディヴィナ)』の実践を通して、そうすることができます。」

いくつか、大事だと思われる点を抜き出しますと、「聖書のことばがミサにおいて賛美される」そのような工夫をすること、「主のことばを告げ知らせることを際立たせ」「説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調する」具体的な取り組み、そして「霊的読書(レクツィオ・ディヴィナ)』の実践」この四点がさしあたり必要です。

一つ目、「聖書のことばがミサにおいて賛美される」これについては、「朗読用聖書」を祭壇に立てかけて、そこから聖書を説教台に運び、可能な限り恭しく朗読することを心がけました。年間第三主日に、忘れていなければ続けてみたいと思います。

二つ目、「主のことばを告げ知らせることを際立たせる」この点については、いつもは毎週用意されている「聖書と典礼」を使用している信徒の朗読者も「朗読用聖書」をできるだけ使用し、信徒席から運んでいくようにすると良いと思います。

三つ目、「説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調する」たった今、ふさわしくたたえるための具体的な取り組みを説明

しています。神のことばに対する最大の敬意を表すために、繰り上げのミサと9時のミサでは朗読聖書に献香をしてみました。

そして最後、四つ目として「『靈的読書(レクツィオ・ディヴィナ)』の実践」です。私たち長崎教区の教会は、「聖書愛読」という取り組みを続けています。この取り組みをさらに磨いていくことが、「靈的読書(レクツィオ・ディヴィナ)」につながっていくと思います。

最後の靈的読書について、もう少し話しておきます。聖書を読むことで、私たちが導きを得ていると感じる。靈的読書はここまで私たちを運んでいきます。

例えば今週の福音朗読、「四人の漁師を弟子にする」という場面が選ばれていますが、朗読が、私たちをその場に立ち会っている登場人物の一人と感じさせるほど、気持ちを込めて読み返してみましょ。ここから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。」(4・21-22)

ヤコブとヨハネの立場に立って、もう一度読み返してみます。なぜ二人は、すぐに、舟と父親とを残してイエスに従ったのでしょうか。自分なりの答えにたどり着くまで、ゆっくり読んでみたり、二度三度読んでみたりしてください。

また、舟の乗組員と父親の立場に立ってみましょ。なぜ父親は、息子二人を止めなかったのでしょうか。反対もせずを送り出したのでしょうか。皆さんなりの答えが見つかるまで、繰り返し読み返す。すると、「聖書を読むことで、私たちが導きを得ていると感じる」この意味が分かってくると思うのです。

私たちはだれもが父親であったり母親であったり、息子や娘であったりするわけです。息子が舟と父を残して出て行く。なぜ止めないのかなぜ反対しないのか。その答えが父親にも息子にも見えた時、私たちは今週の朗読から導きを得ているのであり、その時こそ「靈的読書(レクツィオ・ディヴィナ)」を体験しているのです。

これから私たちは年間第三主日を「神のことばの主日」として繰り返し迎えます。この主日が、日々の生活に神のことばを取り入れるきっかけとなりますように。日々、神のことばに導かれている実感を得られるきっかけとなりますように。「暗闇に住む民の大きな光、死の陰の地に住む者の光」であるイエスに、続けて照らしと恵みを願いましょ。



## 主の奉獻 (ルカ 2:22-40)

神殿に詣でることシメオンと同じ恩恵に浴する

主の奉獻の祝日です。この祝日は本来「日付で祝う祝日」です。今年の日曜日に当たったので「主の奉獻」の朗読箇所に沿って説教をしています。ちなみに前回2月2日が日曜日だったのは2014年、その前になると2003年までさかのぼることになります。

マラソン大会から無事に戻ってきました。練習不足で、去年よりも3分遅いタイムでした。しかも前日月曜日の過ごし方が悪かった。司祭たちは各地区月曜日の晩に「月曜会」（集まっての食事会）をしているのですが、日曜日上五島入りした私は、鯛ノ浦教会の主任神父様から「久しぶりに上五島の月曜会に来ませんか？」とお誘いを受けました。

それで月曜日の夜、上五島地区の司祭団と一緒に飲んで飲み食いしたわけです。話題はもっぱら、翌日の天気のことでした。皆さんもご存知の通り、月曜日は大嵐でした。「明日、土井ノ浦から福江に船は出るだろうか？」「今日この天気ですよ？出るわけじゃないじゃないですか。ウェザーニュースだってほら、波は4mですから。安心して飲みましょう！」こんな感じで調子に乗って焼酎のロックを飲んだわけです。

翌、火曜日の朝に鯛ノ浦教会の共同ミサに参加しました。前の日の嵐がうそのように静かになり、仕方なく、重い足取りで土井ノ浦港から福江港に移動し、堂崎天主堂をスタートして10キロ走ってきました。成績はぱっとしませんでしたが、切り替えて、今村教会までの120キロ「徒歩をメインにした巡礼」のトレーニングを積もうと思っています。

ついでですが、料理のレパートリーが増えました。この前煮込みハンバーグを食べました。ハンバーグは貰い物ですが、生涯一度も作ったことがない物まで手がけるようになりました。昔、「料理の鉄人」という番組がありまして、その中で「四川料理の鉄人・陳建一」という料理人が出ておりました。私も料理の幅が広がってきたので「田平の陳建一ならぬ陳輝次」とうそぶいてみようかと思っています。

福音朗読に入りましょう。マリアとヨセフが幼子イエスを神殿に奉獻するためにやって来ましたが、マリアとヨセフの両親はすっかり背後に隠れ、抱かれてやって来たはずの幼子イエスに光が当たるように描かれています。シメオンの預言の場面でも、マリアはただじっと聞いているだけです。ここでは神殿でイエスに出会うと、人はどのように変わるのか、変えられていくのかを学ぶことにしましょう。

まずシメオンが神殿で待ち構えていました。彼は幼子イエスを腕に抱き、神をたたえます。「この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」(2・25)夜昼神殿で祈りを捧げていた人は、「神をたたえる人」に変わりました。「メシアを待ち望む人」から、「メシアに会い、その喜びを感謝してたたえる人」に変えられたのです。

次に、女預言者アンナに出会いました。彼女もまた幼子イエスを見

て「神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した」(2・38)とあります。彼女は神をたたえる人に加えて人びとに幼子のことを語る人になりました。彼女もまた、「夜も昼も神に仕える人」から、「神をたたえ、告げ知らせる人」に変えられたのです。

シメオンとアンナは、幼子イエスに出会って変えられました。神殿で出会ったことは強調して良いと思います。神殿は人が神と出会う場所のはずですから、聖霊からお告げを受けていたシメオンは、直接イエスを見るまでもなくメシアの到来を賛美し、告げ知らせる人になっても良さそうなものです。けれども神は、当時の神殿で、奉献されるためにやって来たイエスと出会うことを計画しておられたのです。

この出来事を私たちに当てはめてみましょう。私はこれを、「日曜日、主の祭壇でイエスと出会い、私たちも変えられましょう」と当てはめたいと思います。シメオンもアンナも、当時の神殿が大切な場所だったので神殿でメシアを待っていたのですが、これからはイエスを囲んで集まる場所が「新しい神殿」に変わります。そこでイエスに出会い、変えられて、神をたたえ、宣教者とされていくのです。

私たちも、日曜日にこの聖堂でイエスを囲み、イエスに触れることで変えられていきます。祈りに熱心で、信仰あつく暮らすことは、家庭祭壇で祈る人にも可能です。ですがそれだけでしたら、イエスに変えられることは難しいのです。私たちが日曜日ごとにこの田平教会に来て、主の祭壇を囲むことが、救い主がおいでになった私たちには必要なことなのです。

シメオンの神を賛美する姿は、天と地をつなぐ姿です。アンナが人びとに幼子のことを語る姿は、地上のすべてを一つに結ぶ姿です。シメオンに天と地をつなぐ力があつたのではありません。アンナに地上のすべてを一つに結ぶ力があつたのではありません。イエス・キリストに触れたことで、変えられたのです。

私たちも同じです。聖体の秘跡に実際においでになるイエス・キリスト、このキリストに触れることで、私たちも変えられます。祈りはするけれども聖書の朗読を頼まれたら尻込みする人。あなたも、イエス・キリストに変えられて神のことばを賛美する人になることができます。

信心業には定期的に参加して、教会を離れることはしないけれども、教会の役員には向いていません。あなたも、誇りを持って自分の信仰を田平教会が前進するために役立てる人に変わることができます。イエス・キリストに触れる、それも日曜日に教会に来てイエスに触れることで、変えてもらえるのです。

最後に、3月20日の司祭叙階式に触れて終わりたいと思います。今年は助祭が一人と司祭が一人叙階される予定です。神の家で、イエスに直接触れて、イエスの身分で働く人に変えられる瞬間です。「わたしはこの目であなたの救いを見た」(2・30)シメオンの言葉を私もこれまで数十回浦上教会で目撃しました。私たちの田平教会も、この目で神の救いのわざを見るかけがえのない場所なのです。



## 年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

最適解を見つけることができる年齢になった

「あなたがたは地の塩である。」(5・13) 「あなたがたは世の光である。」(5・14) 生活を豊かにする物を引き合いにして、キリスト者は世にあって「塩」や「光」であることを表していく必要があります。私たちに求められていることと、私たちが避けるべきこと、両方について考えてみましょう。

全国版のカトリック新聞に、2月11日「世界病者の日」の教皇メッセージが掲載されていました。病者の置かれている弱い立場に、教皇様は深く思いを寄せておられます。病を得たことで、より一層イエスの「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11・28) このみことばに招かれていると語ります。

また、病者に寄り添う人にも「寄り添うことの大切さ」を語りかけます。キリスト者の果たすべき七つ身体的な慈善のわざとして、「飢えている人に食べさせること、渴いている人に飲み物を与えること、着る物を持たない人に衣服を与えること、宿のない人に宿を提供すること、病者を訪問すること、受刑者を訪問すること、死者を埋葬すること」というものがあります。私たち一人ひとり、また教会も、病者にとっての「宿」となるべきだと呼びかけています。

いつも、教皇様が発するメッセージは、身近な人にとっての「光」となる言葉です。教皇様の影響力があって、一つひとつの言葉はより輝くわけですが、教皇様の「光」のような言葉、その力の源は、間違いなくイエス様です。イエス様という「光」を、教皇様という立場で私たちに示してくださっているのです。

そうであるなら、私たちも考える必要があります。「あなたがたは世の光である。」私の中に、そのような光り輝くものがあるだろうか。教皇様から学べることは、自分の中におられるイエス・キリストをうまく示してあげるなら、私たちも光り輝く言葉、珠玉の言葉が語れるということです。

私の母方の祖母は、日曜日のミサには一山越えて来ていました。佐々から、江迎に来る山越えのような道でした。吉井町経由のように平坦なバス通りもありましたが、近道の山越えで必ず来ていました。何度か祖母と一緒にミサに来ました。祖母は、「山を越えて教会に行くのは辛いに違いない。しかし、歩く調子に合わせて『天にまします』を唱えれば、とても簡単に山を越えることができる。」繰り返しそう言っていました。

小学校も最後まで通えなかった時代でした。カタカナしか読めませんでした。そんな祖母でも、私に生涯残る教えを残してくれたのです。祖母は孫に「困難を乗り越える時に主の祈りを唱える」と教えることで、心の中におられる「イエス・キリスト」を光り輝かせてくださったのでした。

最近は私も料理に非常に興味があります。男性の料理教室もはやっているそうです。本日、前のほうに座っている 60 歳になられて健康を祈願する参加者も、料理をなさることもあるでしょう。その中で、「塩」をうまく料理に活かすコツもたくさんご存知だと思います。

「塩」はほんのわずかの量で料理を活かしたりダメにしたりします。「砂糖」はもしも量が多くてもまだ許せますが、塩が多すぎるのはもう食べられないと思うのです。本当に「塩」は、わずかの量で味を決めたり、長く保存することができたりするのです。

「あなたがたは地の塩である。」健康を願う本日の参加者も、社会の中にあって「塩」の働きをします。私たちが気の利いた「塩」というよりも、私たちの中にある「イエス・キリスト」という塩をお一人お一人うまく対人関係や社会活動の中で活かしていくわけです。

「塩気が足りない」「塩味がきつすぎる」もしそのようなことがあるなら、それはお一人お一人の中のイエス・キリストを引き出すときに、どこか手順に問題があった可能性があります。非常に有名な方を例えに、絶妙な「地の塩」としての働きを紹介します。

今は上皇后様となられた美智子様は、正田家に生まれ、熱心なカトリック信者でした。皇室に入られたので、ご自身の経歴を大上段に振りかざすと大問題になります。ですが上皇后様は、かつて訪問先でピアノを前に、「一曲演奏なさいませんか？」と勧められ、初めは丁重にお断りしたのですが、是非にと勧められたので「それでは・・・」と仰って「アヴェ・マリア」を演奏なさったというのは有名な話です。

上皇后様は、たくさんの曲を即興で演奏することが可能だったでしょう。けれどももその中で、あえて「アヴェ・マリア」を演奏なさった。控え目に、ご自身の深い奥底に流れていたカトリックの信仰、心の中の「イエス・キリスト」を、絶妙な加減で示されたわけです。

このような「地の塩」としての姿は、ご挨拶の結びに「祈ります」と添えられたことでも知られています。皇室は決して「祈ります」とは言わないのです。それが、上皇后様が皇室に入られてから、上皇様も含めて「祈ります」と仰るようになりました。

「地の塩」「世の光」私たちの中のイエス・キリストを指し示すのに、絶妙な加減とか、部屋全体を照らす最も適した場所を見つけ出すには、歳月を重ね、たくさんの経験を積むことがどうしても必要です。今日お集まりの、健康祈願祭のミサ対象者の方々は、まさにうってつけの人材です。これから、皆さんの中の「イエス・キリスト」を世に示す「地の塩」「世の光」としての活躍を期待します。そして皆様のために、続けてこのミサの中でお祈り致します。



## 年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

わたしが来たのはあなたを完成させるため

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ

てはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」(5・17) 今日、中学2年生5人が紐差教会で堅信の秘跡を受けます。福音の学びを、堅信を受ける中学生たちへの励ましの言葉につなげたいと思います。

最初に引用した5章17節の箇所は、今回は短い形の朗読を選びましたので朗読されませんでした。けれどもここが、今週の朗読全体の要になっていると思ったので、説明をしたいと思います。「わたしが来たのは」とマタイ福音書の中でイエスが念を押す時、それは当時のユダヤ人たちの誤解を解くために語り始める場合です。四回登場します。一つは今週の朗読箇所5章17節です。次に9章13節「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」三つ目は10章34節「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っ

てはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」最後は20章28節「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」どれも、当時の宗教指導者たちの考えを正すため、イエスが来た目的を理解させるためでした。

5章17節「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ

てはならない。廃止するためではなく、完成するためである」もこの流れに沿って考える必要があります。宗教指導者たちは「この人は律法をないがしろにする不信仰者だ」と攻撃する材料になり得ますし、マタイ福音書が読まれていた初代教会の信者たちの中には「イエスの言葉によって律法は廃棄された」と受け取った人々もいました。これら両方の誤解を解く必要があったのです。

イエスは律法を完成するために来ました。人々にとって重荷とさえ感じていた律法は、命を吹き込まれて神の人間に対する思いやりを感じるものに生まれ変わらせる必要があったのです。バラバラで、どれ一つとっても喜びを感じられなかった律法は、「神への愛」と「隣人への愛」という一本の糸に結ばれて命が吹き込まれたのです。神は律法を通して、人間への溢れる愛を示そうとされた。イエスはそれを示したかったのです。

田平教会はレンガ造りの教会です。中田神父は偶然にもレンガ造りの教会に幼い時から親しんで育ちました。生まれ故郷の鯛ノ浦教会、今は旧聖堂となった教会堂は、正面が田平教会と同じ一つの塔の付いた構えをしていました。ただ幼かった私は、友達と一緒にこのレンガの塔のどこまで野球のボールを当てることができるか競ったりして、壁代わりにしていたのです。

上五島にはもう一つ青砂ヶ浦教会というレンガ造りの教会があります。親戚周りをする関係でこちらにも時々お邪魔して、同じようにボー

ル遊びをしていたら、知らないおじさんからこっぴどく叱られました。「なして怒るとやろうか？」そう思ったのでした。時が経ち、私は中学校から小神学校に入り、堅信の秘跡を受けました。堅信を受けてから故郷の鯛ノ浦教会のレンガの教会、青砂ヶ浦の教会を見た時に、「あっ！」と思ったのです。「このレンガの教会を造った人たちは、どんな思いをして造っただろうか。私はその教会の壁をボール投げの壁代わりにして、叱られて当然だ。」

小学生の私にとって、レンガ造りの教会に、どんな苦勞が詰まっているか、知るよしもありませんでした。けれども堅信の秘跡を受けたことで、二つの教会のレンガの教会は、神様を敬う心という一本の糸で繋がったのでした。堅信の秘跡が注いでくれる「神への畏敬の念」が、レンガ造りの教会の見えない苦勞や汗を、理解させてくれたのです。

イエスは律法を完成するために来ました。しかし律法を完成させるだけであれば、神の独り子がおいでにならなくても良かったかも知れません。御父の計画は、イエスによって律法に命を吹き込むにとどまらず、この律法はイエスご自身の生き方の中で完成したと示すことだったので。神が人を愛しているから、律法があるのだよと伝えるだけでなく、神が人を愛しているから、必要とあれば人間のために神は独り子を十字架の上で献げることもためらわない。十字架のいけにえによって掟は完成したと示すのです。

私たちは堅信の秘跡を受けています。今日新しく5人が堅信の秘跡を受けます。天主の十戒も教会の掟も、守るべき祝日も知っています。イエスは堅信を受けた人に、「あなたはそこまで十分完成した」と仰るのでしょうか。私は違うと思います。掟を忠実に守るだけでなく、神の掟のために、ときには命を張ることも必要になるのです。「命に手をかけてはいけない。私はこの命を、生涯かけて守る。」こんな勇気を、イエスは堅信を受けた人皆に求めるのです。

教皇フランシスコは「すべての命を守るために」日本においでになりました。堅信の秘跡を受けた今こそ、「自分も、すべての命を守る。そのためには必要だったら命を張って守る」そんな決意を持って欲しいと思います。イエスは十字架の上で、すべての律法を完成させてくださいました。堅信を受ける皆さんをも、イエスは十字架上から招き、完成させてくださいます。完成されたキリスト者に近づくため、今日の堅信の秘跡を大きな希望をもって受けることにしましょう。





## 年間第7主日 (マタイ 5:38-48)

あなたの顔はイエスの模範を写し取っているか

「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(5・44) 今週の福音朗読箇所は先週の朗読と連続していますし、関連付けて考える必要がありそうです。

先週の朗読箇所では「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」

(5・17) と言っておられます。律法を捨て去るのではなく、律法に命を吹き込みました。今週の招きも、「天の父の子となるため」(5・45) 「完全な者」(5・48) となるため、私たちの取り組みに命の息を吹き込みます。

先週ヨハネ・ボスコ夫津木昇神父様の葬儀ミサに参列してきました。田平教会の役員も連れて行きました。私たちの教会からの弔電も披露されました。今日のミサは、夫津木神父様の追悼の気持ちを持っておささげしております。

聖パウロ会の司祭でしたので、聖パウロ会日本管区長の澤田豊成師が葬儀ミサを司式しました。彼と中田神父とは大神学院時代四年間机を並べて学んだ仲です。「へえ～。もう管区長になったんだ」と素直に思いました。立派に務めを果たす姿を見て、誇らしくもありました。

葬儀ミサで、ご遺体のそばに置かれた遺影はとても印象的でした。喜びに満ちあふれた顔でした。今日のミサのために、少しカードをもらってきました。コピーも用意しました。ご覧になったらよく分かると思います。私はこのお写真がたくさんを語っていると思っました。きっと、すべての苦勞を苦勞と思わず、喜び一杯の司祭生活、修道生活だったのだらうと感じたのです。

福岡では最後は老司教会を任せられていました。ローマで学び、司祭に叙階され、イギリスのロンドンに留学と、華々しい経歴の持ち主でしたが、それを見せびらかすことなく、気さくな司祭として慕われていたのでした。

老司教会の信徒会長がお別れの言葉で一つの思い出を語ってくれました。夫津木神父様みずから司祭館の屋根に登ってペンキ塗りをしたことがあったそうです。職人を雇えばよいのに、喜んで自分から飛び込んでいく。あの人なっっこいお顔を二度と拝見できないと思うと胸が張り裂けそうだと仰っていました。

管区長の澤田神父様はあいさつの中でこう言っていました。「夫津木神父様は都合二回管区長の重責を担ってくださいました。いずれの時も、聖パウロ会が困難の中にあっした時でした。人間的には引き受けたくない時期に管区長職を要請されましたが、それを寛大に引き受けてくださったのです。」私には、澤田神父様の苦勞が話の向こうに透けて見える感じがしました。

管区長職は、権限を与えられた身分ですから、管区長でしかできない

命令を、聖パウロ会の会員に求めることも可能だと思います。そうしようと思えば、「目には目を、歯には歯を」という処分をだれかに下すことも可能でしょう。けれどもそれでは、「異邦人でさえ、同じことをしているではないか」(5・47)ということになるわけです。

どんな苦境にあっても管区長職を引き受けても、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」この姿勢を貫いて聖パウロ会日本管区を守り抜いてきたのだと想像しました。大変なご苦勞を見せない。これこそイエスが今週の福音で語っておられる高い理想なのです。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(5・48)

中田神父は「完全な者」についてこれまでこう考えていました。「失敗しない人、働きに欠点不足のない人、誰にも隙を見せない人。」しかしイエスはもっと人間味溢れる姿を示してくださったのです。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」(5・45)

「失敗のない教会共同体作り」とか、「欠点不足のない信徒を育てる」とか、「誰にも隙を見せない組織作り」とか、これらがイエスの求める教会の姿ではないようです。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」太陽の暖かさ、ゆっくりしみこむ雨の恵み、そうした取り組みですべてを慈しむ。私がこれまで考えてきた「完全な者となる」方向は、軌道修正が必要だと感じました。

葬儀ミサで頂いてきた夫津木昇神父様のお写真は、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」今週のイエスのみことばを語っているような柔らかなお顔です。

イエスが示そうとする模範であれば、人間にとって不可能なものはなく、聖霊の助けがあれば天の父に倣うことができるでしょう。夫津木神父様が田平教会を見守ってくださると信じ、イエスが示す「完全な者となる」道を、田平教会の信者と共に歩んでいきたいと思いをします。



## 四旬節第1主日 (マタイ 4:1-11)

悪魔は私たちに何もできない

四旬節に入りました。ここは田平教会聖堂ですが、誰もいません。無観客ミサです。新型コロナウイルスで公式のミサが休みになったからです。また本日は、保育園年長さんの初聖体の日でもありました。楽しみに、この日を待っていたはずです。前日には初告解も終えて、準備万端だったのです。申し訳ないことをしたなあと思っています。

でも中田神父は転んでもただでは起きません。この危機を、日本の教会がより力強い教会となるための痛みとして、決して忘れない四旬節第一日曜日になりたいと思っています。そして実際に、より強くイエス・キリストに結ばれる日になると信じております。

四旬節第一の福音朗読はイエスが誘惑を受ける場面です。イエスが誘惑を受けたと仮定して、誘惑に毅然として対処するのは自明の理です。なぜこの物語をマタイが採用したか。それはイエスの毅然とした態度を紹介するためというよりは、私たちに必要なことを教えるために採用したのです。「神に関わって生きる者」が歩むべき道、神の子の道を明らかにするためなのです。

今現在、中田神父は黙想会の材料にしようとしているフランシスコ教皇様の伝記を読み続けています。600頁あまりありますが、読めば読むほどフランシスコ教皇に引きつけられます。今はフランシスコ教皇がブエノスアイレスの司教として働いていた時代のアルゼンチンの政治状況について読んでいます。

フランシスコ教皇様、当時のベルゴリオ司教様は、私たちに想像も付かない状況で教会とアルゼンチンの国民を守り抜こうとしていました。国内ではクーデターが起こり、軍人が政府を掌握しました。教会の指導的立場にある司教様方は、ある人はクーデターを起こした軍人寄りの態度を取り、ある人は徹底的にクーデター行為を非難する側に回ります。そして大多数は、そのどちらにも属さず、息を潜めていました。

クーデターを非難し、軍と徹底的に対立する司教様、司祭たちは、ある日誘拐され、拷問を受け、ある日道端で狙撃され、無残な最期を遂げることもありました。そんな中で、当時のベルゴリオ司教様は、命を狙われている人を必死にかくまい、あるときは国外に脱出させ、あらゆる方法で命を守ろうとしたのです。命の危険にある人々を守るためには、クーデターの首謀者とも交渉しました。ベルゴリオ司教様は徹底して祈りの人であり、優れた政治手腕のある人でもあったのです。

アルゼンチンの政情不安の中でも必死に神の望む道を祈りの内に探し求め、命の危険にある人々を守り抜く姿が、今週の福音朗読にあるイエスの姿と重なりました。イエスはさまざまな誘惑をはねのけます。ベルゴリオ司教様も、クーデター政権側に付く誘惑とか、クーデター政権を糾弾し、華々しく命を散らす誘惑とか、さまざまな誘惑があったはずですが、けれどもそれらすべてを拒否して、地味ではあるけれどもすべて

の命を守るための、祈りに導かれた行動を貫いたのです。

今週と来週の日曜日、実に残念ですが公式のミサを中止するようにと大司教様から通達が出ました。私は昭和の香りのする人間なので、「新型コロナウイルスで命を落としても、ミサをささげるべきではないのか？」と心の中では思いました。なぜ感染者の報告がない長崎で、感染者と格闘している都道府県と横並びの対応で済ませてしまうのか。葛藤を抱えたまま、3月1日を迎えました。

ですがそれは悪魔の巧妙な罠だったのかも知れません。あえて世の流れに逆らい、総理大臣の要請も聞かずに公式のミサを挙行すれば、世間の注目を浴びることになったかも知れません。それこそがしたたかな悪魔の作戦ではないか。考え直したのです。

日曜日、主日であるにもかかわらず、誰も聖堂に集まってミサをささげることができません。ですがこの苦難のときにこそ、悪魔の巧妙な罠に対抗して、神の子の進むべき道を選ばなければならないのです。私たち長崎教区の神の民のほとんどが、ミサに与れない時に何をすべきか知っています。

祈祷書の「ミサに与るを得ざる時の祈り」と、ロザリオ一環を唱える。これは私の祖父母の時代から、脈々と受け継がれてきた伝統です。これなら病気の人、寝たきりの人も、皆が心一つにささげることができます。ミサに誰も参加できない時に、参加できないからこそ一つになれる方法を持っているのです。

ある人たちは、手元に「聖書と典礼」があるかも知れません。ふだん日曜日にミサに参加すると、手元に持っていて実際に朗読している朗読者の声を聞くので、活用できていないかも知れない。今週と来週は、この「聖書と典礼」を大いに活用してください。できるなら、選ばれている箇所を実際の聖書から引いて、家族の中で誰かが読むと良いでしょう。

今、悪魔は私たちを罠に陥れようと狙っています。これほど罠にかかりやすい場面は他にないかも知れません。決して、悪魔の罠に安易にのらないようにしましょう。ミサの食卓を、今週と来週はいただけません。けれども今週と来週がまさに、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(4・4)とのイエスのみことばを味わう時ではないでしょうか。

悪魔の誘惑に立ち向かいましょう。目の前のパンを絶たれても、私たちはみことばの食卓があるから揺るがない。毅然として、公式のミサが中止されている期間を乗り越え、四旬節の償いと犠牲の幕開けと致しましょう。



## 四旬節第2主日 (マタイ 17:1-9)

「聖書と典礼」を紙ゴミにはしてはいけない

二回目の、公式のミサ中止の日曜日を迎えました。四旬節第二主日ですが、第二朗読を引用して説教を始めたいと思います。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」(二テモテ 1・8b) パウロが、テモテに宛てた手紙です。テモテに呼びかけられたこの言葉を、私たちはイエスから私たちに呼びかけられた言葉として受け取りたいのです。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」

教会役員からこんな声をかけられました。「信者のいないミサ、寂しかですね。早く元に戻るといいですね。」本心からこう言ってくれたのだと思います。その役員自身もミサにあずかることができず、辛いのでしょうか。けれどもこの世の中に意味の無い苦しみは無いはずで、苦しみはイエスも常に体験され、苦しみの先に復活の栄光があったのです。

福音朗読は、イエスの姿が変わる場面でした。「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。」(17・2) イエスの輝く姿を見て、息も止まりそうになったでしょう。人はどうしても、目のくらむような場面を近くにとどめておきたくなって、仮小屋を建てましょうと提案してしまいました。これはどんな人にも起こりうる誘惑だと思います。

自分の意見が皆を納得させた時、「私なら、これからもこの集まりをまとめていける」ついそんな考えを起し、立場を越えてしまいたくなります。何かを進言した時それが方向を決めるほど影響を与えたのを見て、私は影響力があるのだとうぬぼれてしまうこともあります。ペトロもこの場を取り仕切っているのは自分だといつ考えてしまったのです。

イエスの姿が変わり、ペトロが場面を仕切っていると思いかけた時、雲の中から声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5) 厳しい叱責ではありませんが、この場面を取り仕切っているのはあくまでもイエスなのだから、イエスに耳を傾けなさい。そういう声だったのです。

私たち今の時代の人間も、出来事を取り仕切っているのは自分たちだと思い違いをする危険はいくらでもあります。2月29日から3月14日まで、長崎教区も公式のミサが中止になりました。大司教様が教区顧問の皆さんと話し合っただけですが、このたびの試練、困難を与えたのは大司教様の通達ではなくて、神様だと思ふのです。

人が用意した試練を乗り越えるのは人の努力ですが、神様が与えた試練を乗り越えるには、神の助けが必要なのです。第二朗読で読まれたとおりです。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを

を忍んでください。」病人訪問をする中で元教師であった方が「戦争中もミサが途絶えたことはありませんでしたのに、このようにミサが中止されるのは90年以上生きて、生まれて初めての事です」と仰っていました。この試練を、「神の力に支えられて乗り越える」という体験を積む貴重な機会にしなければなりません。自分たちの力で乗り越えようとする誘惑を斥けなければなりません。

もう何十年も前から、日曜日のミサのために「聖書と典礼」という冊子が用いられています。私は役員にお願いして、先週と今週の「聖書と典礼」を各家庭に配って欲しいとお願いしました。もし何もしなければ、一部30円くらいする冊子が300枚無駄になることになります。それだけでも損失ですが、同じことが浦上教会、滑石教会、飽の浦教会、紐差教会、ひいては全国の教会で使われることなく廃棄されたらどれだけの損失になるのでしょうか。決して「聖書と典礼」を紙ゴミにしてはならないと思うのです。

幸いと言いましょうか、聖書と典礼を無駄にしてはいけないという思いは、誰から聞いたわけでもありませんでした。自分で思い付いたというわけでもありませんでした。これこそ、雲に覆われたように混乱した私の頭の中で、「四旬節の第一と第二主日の聖書と典礼をどうにかして活用しなさい」という神様の呼びかける声があったのだと思います。

神様が用意した試練は、乗り越える力も神様から来ます。私たちはそのことを忘れて自分の力に頼ってはいけないのです。今回の試練が人間によるものでなく、神様からの試練であれば、試練を意味のある経験にするために、そばにいて助けてくださる神様の力を信じなければなりません。そうでないと人間の力や知恵で乗り切ったと勘違いし、得られるはずの経験や知恵を得られないで終わるかも知れません。

「聖書と典礼」を紙ゴミにしてはいけません。この二週間の試練を無駄にしてはいけません。与えられた試練を意味のあるものにするために、神の力と助けを願い、そこから与えられる取るべき態度を確実に実行して過ごしましょう。

四十日の誘惑を父なる神と共に乗り越えた神の子イエスは救いのわざを成し遂げて復活の栄光に入られました。今回の試練を共にいてくださる神様と乗り越えるなら、私たちも神からの誉を受けるに違いありません。



## 四旬節第3主日 (ヨハネ 4:5-42)

あなたから永遠の命に至る水がわき出る

四旬節第3主日を、田平教会の聖堂ではなく、田平修道院のチャペルで迎えることとなりました。誰がこんなことになっていると想像できたでしょうか。想像を超える試練、それは人間によって与えられた試練ではなく、神様からの試練に違いありません。

3月12日、運転免許証の更新のために平戸警察署に行きました。典礼委員長の長男さんもそこには居ました。2月29日から、教会聖堂でのミサもないし、珍しくひげを伸ばしてみようと思って伸ばしたのですが、免許証の写真のことは考えていませんでした。できあがった免許証はご想像の通りのひげ写真でした。次の運転免許更新のときにはきれいさっぱりの写真で写りたいと思います。

今週の福音朗読箇所は、井戸で、サマリアの女性とイエスが「生きた水」について対話する場面が選ばれました。今、マスク・消毒液・トイレットペーパーなどが手に入りません。新型コロナウイルスの影響で必要だと感じているから探し求めているのですが、きっと影響が収まればすべてが余り物になり、街中に溢れることになると思います。

本当に必要だと思って探し回ったのに、混乱が収まるとなぜ「余り物」になるのでしょうか。それは「その時だけ必要な物」だからではないのでしょうか。しかし、ヤコブの井戸でイエスがサマリアの女性に与えようとしていた「生きた水」は、「その時だけ必要な物」ではなく、「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(4・14) のでした。

長崎教区で公式のミサが中止になって2週間が過ぎました。私たちは十分に、「渇き」を感じています。イエス・キリストをいただくことのできない「渇き」です。聖体拝領が奪われて、どれだけイエス・キリストに養われることが大切なのか、心の底から感じていると思います。

まずは、できることを続けてください。ミサには、「みことばの食卓」と「聖体の食卓」があります。「聖体の食卓」が奪われても、自宅で、「みことばの食卓」を用意することができます。「聖書と典礼」を使ったり、実際の聖書を使ったりして、神のことばが洗礼を受けた人すべてを養ってくださることをより深く体験する機会にしましょう。

せっかくなので、今週の福音朗読箇所から自宅でもできる「尊ばの分かち合い」を紹介したいと思います。まず、朗読箇所を目で読み、次に声に出して読みます。目で読むときも、きっと自分の声が心の中で聞こえながら読んでいると思います。心の声に耳を傾けながら目で読みましょう。二回目の声に出して読むときは、家族がいるなら、家族の集まりの中で代表者が読みましょう。そして、家族みんなが朗読者の声に耳を傾けます。朗読している本人も、声に耳を傾けて読みます。

二回目に声に出して読んだあと、少し静かな時間を作りましょう。心に残った箇所があると思います。もう一度、心に残った箇所を目で読み返します。目に留まった箇所は、何かを呼びかけていると思います。

語りかけてくる声をそのまま、みんなの前で分け合ひましょう。家族の中には、心に残った箇所がほかにあるかも知れません。

それぞれ、違う箇所を分け合ひましょう。分け合ったことが、朗読した物語をもっと身近に感じるきっかけにしてくれるかも知れません。心に残ったことばを、その日の中で何回か思い出し、温めましょう。これできっと、「みことばの食卓」から糧を得て、一日を神様のために、神様と共に過ごせるようになると思います。仕事をしながら一日過ごしても、学校に通いながら一日を過ごしても、「みことばの食卓」から養われた人は、一日を神様のために、神様と共に過ごす人なのです。

今回、中田神父が目で読み、声に出して心に残った箇所は、サマリアの女性が最後にイエスに言った言葉です。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」(4・25)

この女性のことばが私に訴えかけているのは、まず「キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています」つまり、誰を探し求めるべきかを知っているということです。彼女は自信を持って、自分がより頼む相手は「メシア、キリスト」であると知っているのです。

私たちは流行に飛びついたり、周りの人の話に流されたりすることがあります。この女性も、周りに流される生活をしてきたかも知れない。五人の男性と生活したのですから、その時自分が頼れる人に飛びついたのでしょう。けれども本当により頼む相手はこれまでの男性ではなく、「メシア、キリスト」であると知っていたのです。今は生活を神様に感謝できていないけれども、神様に心から感謝し、礼拝できる日を必要としている女性なのだろう。そういうふう思い巡らしました。

サマリアの女性の最後の言葉に私が惹かれた理由がもう一つあります。「その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」と言っています。これは、メシアが一切のことを知らせてくれる日を、ずっと待っていたということでしょう。知りたいこと、ずっとモヤモヤしていることを、すべて明らかにしてくれる。そのメシアと出会える日を、いつどんなときも待ち続けていたのです。

私は、金曜日と土曜日は、次の説教のきっかけが見つからないかなあと思いつつ過ごしています。金曜日には金曜日のすることがあります。それでも、「日曜日の説教の中心線が見つからないかなあ」とずっと考えながら一日過ごしているのです。ですからサマリアの女性の気持ちはよく分かるのです。その、寝ても覚めても待ち望んでいることが、今、彼女の目の前にあるのです。

「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」(4・26) 本心に欲しかったもの、その時だけ必要なものではなく、「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」神のことばが今、与えられました。聖体の食卓から遠くなっている今こそ、「神のことばは生きていて力がある」この体験を積みましょう。そして、今日聞いたことを持ち帰り、知らせることにしましょう。





## 四旬節第4主日 (ヨハネ 9:1-41)

主よ、その方を信じたいのです

「あなたは人の子を信じるか」(9・35) イエスが生まれつき目の不自由な人をいやし、投げかけた言葉です。目の前におられる方が探し求めている方ですが、まだ気づいていません。私たちもこのいやしを受けた人に自分を重ねて、与えられた福音朗読から糧を得ることにしましょう。

今日は皆さんにオヤジギャグではなくて真剣にお祈りをお願いしたいです。田平修道院のシスター久松カヲが、生死の境にあります。このお知らせも刻一刻と変化の中なので、もしかしたら違う報告をしなければならぬかも知れません。この説教を書き終えた時点では、シスターは生死の境にあります。田平修道院の礎となってくださった姉妹ですから、ぜひ皆さんの祈りをお願いいたします。

もう一つのお知らせは、黙想会です。何とか、黙想会を開催できる運びとなりました。同じ日程で浦上教会は黙想会を中止する判断をしたそうです。それぞれの教会が抱えている「事情」がありますから一概には言えませんが、田平教会は黙想会を実施します。実際は、日曜日のミサに参加するよりも長い時間集団で一つの場所にいるのですから、最大限警戒しながら、無事に終えたいなと思っています。説教師の都合で中止になることもあり得たわけですから、ある意味、説教師を外に依頼していなくて良かったです。

福音朗読に戻りましょう。登場する「生まれつき目の不自由な人」は、復活したイエスがトマスとのやりとりで言われた「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ 20・29) ここで言う「見ないのに信じる人は幸いである」まさにそのままの人と言えるでしょう。

「期待を膨らませる」というのは、見ないほうが効果的なのかも知れません。イエスのいやしのわざで目の不自由な人は見えるようになったわけですが、期待が膨らむ過程ではイエスを見ていないのです。むしろ見ないほうが、思いが募り、さらに憧れが増すのかも知れません。

「見ていない」ということが幸いするケースを私たちは少なからず知っています。富士山は登山した人なら分かりますが、世界遺産と言いながら、実際にはたくさんのゴミが目に残るのだそうです。「ベツレヘム」と聞けば、「イエス様が誕生した町だから、キリスト教が盛んだろう」と思うでしょう。

ですが実際にはベツレヘムは「パレスチナ自治政府」の土地であり、聖地巡礼なのにパスポートがなければ入ることができず、まれに入国することすらできないときもあります。ついでに言えば、ベツレヘムではユダヤ教の食事はあまり見ません。私たちが日常食べるバーベキューのような料理が出てきます。イエス様が生まれた当時の、ユダヤ教の土地ではないのです。これからベツレヘムに巡礼する人がもしいるなら、が

っかりさせたかも知れません。

結局、見ないで信じるほうが、余計なことを考えずに受け入れやすいこともあります。そしていざ事実を見たときに、見ないで信じていたことが試されてきます。富士山が美しくないのであれば、見て信じられるような美しさを取り戻すために清掃活動の登山をすればよい。ベツレヘムの領有権争いに幻滅せず、イエスが誕生してくれたことを現実の向こうに見て、感謝すればよい。私たちは見ないで信じることが多いですが、仮に現実を見たとしても、本当に信じる人には何も妨げにはならないのです。

生まれつき目の不自由な人もそうでした。いやしの恵みを受け、イエスという方がファリサイ派の人々から罪人と決めつけられているのを知ります。自分自身もイエスを預言者と認めれば、会堂から追放されることが目に見えています。困難があるにもかかわらず、さらにイエスに近づきたいと思うようになったのです。

「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

(9・36) 視力を回復してもらった人は、恐れを乗り越え、試練がイエスへの信仰を固めてくれました。このいやされた人は、わたしたちがより信仰を増してもらおうためのお手本です。私たちも、恐れや試練を経て、イエスから信仰を増してもらえるのです。

神学校で生活していたとき、神学生みなが同じ気持ちで生活しているわけではないと気づいた瞬間がありました。神学校を隠れ蓑に、勝手な生活をしている学生もいました。嫌気が差して、私自身もやる気を失ったことがありました。

現実はそのようですが、現実の向こうにあるものを希望させる出来事にもときどき触れることがありました。その一つは、今は司教様となった白浜司教様です。先輩は大神学校に進んでから身体を壊し、確か休学したと思います。休学中、浦上教会でお世話になっていたと思いますが、小神学校にも立ち寄ってくれました。

あんなに真面目な、聖人とまで言われていた人が挫折して、また復帰に向けて準備している。それは私にとって大きな励みになりました。現実にはドロドロしていましたが、それでも「召命の道をもう少し信じてみよう」という気になり、歩み続けることになったのだと思います。

信仰生活に嫌気が差すときが誰しもあるかも知れません。その時こそ問い直すのです。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」悲しい思いをしても信じる甲斐がある方でしょうか。裏切られても、信じ続ける価値のある方でしょうか。イエスの答えはこうです。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」(9・37) イエスは、私たちがどん底にいても、寄り添って声をかけてくださる方です。



## 四旬節第5主日 (ヨハネ 11:1-45)

人と人の絆を引き裂く死を神への絆に変える

四旬節第5主日、この時期になっても新型コロナウイルスの終息の見通しは立たず、いよいよ来週には聖週間に入ることになりました。困難なときほど、教会堂に集まったときだけの信仰で終わらず、どこに行っても、どこにいてもカトリック信者。この精神で日々を過ごしたいと思います。

個人的な話ですが、立て続けに大腸検査、胃の内視鏡検査などおもな検査を受けました。胃と、小腸十二指腸には処置の必要な症状はありませんでしたが、大腸は4ヶ所ポリープができていて、そのうちの一つは「腺腫」(アデノーマ)という状態に変化していたそうです。まあ、これから毎年検査を受けて、用心したいと思います。

今週の福音朗読箇所では、「ラザロの死」と、「ラザロの生き返り」に注目したいと思います。特にラザロの生き返りには、イエスがラザロを呼ぶこと、社会との絆を絶たれていたラザロがイエスによって絆を回復していく様子を取り上げたいと思います。

ラザロに関する記述からすると、彼は年齢や病気、特別な命の危険を感じさせる理由は見当たりませんでした。人は必ず死んでこの世に別れを告げますが、特に理由も無く死んだとなれば、家族の悲しみはふだんにも増して大きいわけですから。

ラザロは墓に葬られ、墓の入口には石が置かれています。これは生きていた人とラザロとが切り離されている、引き裂かれていることを示しています。マルタは気丈にイエスをもてなしますが、妹のマリアは引き裂かれた悲しみに、イエスを出迎える力も残っていなかったのでしょう。悲しみの大きき深さがうかがえます。

人と人とが死によって引き裂かれる悲しみに、イエスは向き合ってください。誰もが、何もしてあげられない。この悲しみの中でイエスは希望となってくださいました。墓で人々から離されていたラザロを、イエスは呼び出すのです。「ラザロ、出て来なさい」(11・43)。

この奇跡は、出来事だけを見れば「死者を生き返らせる奇跡」ですが、もっと深い場所では人と人との絆を断ち切る最大の不幸に、希望を与える奇跡でした。イエスだけが、この奇跡を起こすことのできる方です。ですからイエスは、ご自身が希望のないところに希望を与える方であることを、誰にでも分かる形で示してくださいました。

私たちは今、まだ解明されていない病気と闘っています。新型コロナウイルスです。治療法がないために、検査で陽性と診断されれば人々から隔離されることになります。有名な芸能人も、重症化して人工呼吸器を付けて治療を受けています。重症者の中には家族との別れも叶わずに、隔離されたまま死に至る人もいるかも知れません。

しかし全世界の人々が、この病の終息を祈っています。祈りは、人々を分け隔てている新しい病に立ち向かう力になります。今の困難の中

で、私たちが一つになる力は、この世の知恵ではなく、心からの祈りなのではないでしょうか。見えない敵に、何もすることができないと思っているかも知れません。

そうではありません。人と人とを切り離している最大の試練に遭っていますが、イエスに祈ることは繋がりを取り戻す力、絆を確かめるかけがえのない方法です。今こそ、遠く離れている人、ふだん会えることが当たり前と思っている家族のために、祈ってあげてください。

イエス・キリストが分断から私たちを救い出す方です。イエス・キリストに祈ることが、人を分断から救い出し、絆を取り戻す力の源です。この機会に改めて、祈りの力を思い出し、祈る手に力を込めましょう。

受難の主日(マタイ 27:11-54)



## 受難の主日 (マタイ 27:11-54)

「奪われた姿」が栄光と輝きに満ちている

2020年の受難の主日は、すべてを奪われて行う典礼となりました。「すべてを奪われた」と言えば、残念な気持ちになりますが、イエスの受難を黙想することで、「すべてを奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りと確信できるようにしましょう。

イエス様の姿をまず眺めてみましょう。イエスが十字架にかけられると、兵士たちはイエスの服を「くじを引いてその服を分け合い」(27・35)しました。兵士たちはイエスの服を奪ったのですが、イエスは「奪われた」とは言わないでしょう。無理矢理取り上げられたとしても、「与えてくださった」ものなのです。

イエスは「再び大声で叫び」(27・50)息を引き取られました。人々の罪と、不正な裁判で、イエスの命は奪われたのです。けれどもイエスはご自分の命を「奪われた」とユダヤ人たちを非難するのでしょうか。そうではありません。イエスは「命を与えてくださった」のです。

ここから、客観的には「奪われた」と見えることでも、「奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りとなることは可能だと分かります。今年、私たちは修道院で受難の主日を迎えました。シスターたちは客観的には多くを奪われた方々かも知れない。たとえば、季節に合った服、好みの服を着ないで、修道服を着ています。一般の人々から見れば、いろんな服を着るチャンスを奪われていると見えるかも知れません。

ではシスターたちは、季節の服、好みの服を着るチャンスを奪われていると不平不満を持っているのでしょうか。そうではありません。シスター方は、自分で決心して、いろんな服を着る自由を、神におささげしたのです。自由に着ることを、自分から神におささげしている姿が、輝きを放ち、栄光の先取りになっています。

司祭と、奉献生活者は独身を守っています。結婚して、家族ができ、家族とともに暮らすこともすばらしい人生です。きっと一般の人々から見れば、「結婚するチャンスを奪われている。取り上げられている」と見るでしょう。けれども本当にそう思っているのでしょうか。

そうではありません。司祭も、奉献生活者も、準備の段階でよく考えて、「結婚し、家庭を持つ生き方」を神におささげしているのです。結婚することもできた。家族を持つこともできた。この生き方をよく考えて神におささげしている。独身生活もまた、神と人々の前で輝きを放ち、栄光の先取りとなっているのです。

イエスは人々から服を奪われ、命を奪われ、もっと活動できたはずの未来の時間も奪われました。イエスの「奪われた姿」は、悲惨な姿なののでしょうか？決してそうではありません。イエスにとって、自分から与えてくださったものなので輝きを放ち、復活という栄光の先取りになっているのです。



## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

ご自身を与える愛は、はるか昔に準備されていた

聖木曜日、イエスは弟子たちと最後の晚餐を囲み、生涯で最も意味深い弟子たちとの時を過ごしています。今、ミサをささげながら、同じ時間に心を合わせて祈っている田平教会の信徒の皆さんを思い浮かべ、イエスが残された愛の記念を、すべての人と分け合おうとしています。

今年は、イエスが入念に準備をしてからすべてのわざを行われたことを考えたいのですが、弟子たちとのこの最後の食事は、いつ準備をされたのでしょうか。

「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」(マタイ 26・17)。このときすでにイエスは準備が整っていて、すべての指示をその場で与えました。弟子たちは命じられたとおりに動くだけでした。

見た目には、弟子たちに尋ねられる少し前に、準備をしておられたように見えます。事実は、はるか昔に準備が始まっていたのではないのでしょうか。理解するには、最後の晚餐の意味を考える必要があります。

最後の晚餐は、イエスが聖体の秘跡を定めるための食事でした。聖体はもちろん、イエスの御体と御血です。イエスの御体と御血は、いつ準備されたのでしょうか。弟子たちが過越の食事の準備を尋ねたそのときでしょうか。

そうではありません。イエスの御体と御血が準備されたのは、マリアに天使ガブリエルが神のことばを告げに来たときでした。私たちが養われるイエスの御体と御血は、およそ30年も前、見える準備のはるか昔から、準備され、整えられてきたのです。

私たちはミサにあずかったとき、聖体拝領の1時間前から飲食をせず、準備の時間に充てます。だれも、「3時間前から食事を控えて、ミサに備えよう」とは思いません。私たちが養う主が30数年前から私たちの食べ物となるための準備をしてきたのに比べると、私たちの準備はあまりにも少ないと思います。

準備が足りないではありません。イエスがご自身を与えてくださるまでに費やした時間に比べたら、私たちの準備や必要な時間ははるかに少ないので、どれだけ感謝しても感謝しきれないということです。

今年、聖木曜日の典礼が実施されていたとしても、「洗足式は中止してください」という通達が来ていました。この洗足式も、イエスの準備は直前の準備だけではなかったと考えています。洗礼者ヨハネの洗礼を受けたとき、洗っていただく必要の無い方が、悔い改めの洗いの水を受けたのです。「わたしの足など、決して洗わないでください」(13・8)。ペトロのことばが洗礼者ヨハネに重なります。イエスははるか前に、足を洗うほどの深い愛を準備しておられたのです。

イエスは私たちにご自身を食べ物として与えてくださいました。はるか昔から、準備しておられました。イエスの深い愛に、私たちは身を委ねましょう。今はただ、イエスの深い愛に感謝する時です。イエスの愛に洗われ、愛の記念をありがたく受け取る時です。



## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

神はすべてのことから善を引き出される

今日、全世界が、主のご受難を黙想します。単に思い巡らすのではなく、どうしてお亡くなりにならなければならなかったのか、一人ひとり胸に手を置いて考えます。私が犯した罪をイエスは背負って、十字架の上で命をささげてくださったのです。

イエスが人間を救うために万全の準備をしておられたことを今年の聖なる一週間で黙想していますが、イエスがお亡くなりになる準備を着々としておられたと考えるのは、不謹慎なことではないでしょうか。どんな人間でも、いついつ亡くなるために今日抜かりなく準備するなど考えるのは、命を大切にすることにならないと思うのです。

一つだけ、こういう言い方は可能でしょう。「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。」(ヨハネ 10・18) 再び受けるために、準備します。三度にわたる受難の予告さえも、「命を再び受けることもできる」ことを弟子たちに理解させる準備の時間でした。

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」(ヨハネ 12・32) イエスが上げられたのは、人々の歓喜の声によってだったのでしょうか。そうではありません。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」(19・15) 宗教指導者に扇動された群衆の叫びによって、イエスは上げられたのでした。しかしイエスが「地上から上げられる」のは、この方法をおいて他になかったのです。

神はあらゆることから、善を引き出すお方です。「地上から上げられる」本来であればこれは高められること、栄誉を受けることのはずです。それが、十字架にはりつけにされることで、「地上から上げられる」ことになったのです。人々の敵意から、「死と復活」という驚くべきわざを成し遂げたのです。何も見えなくなっ、人類が決定的な背きをイエスにおこなったその時に、神はイエスに栄光をお与えになったのです。

イエス・キリストのことばと行いは、しばしば「分裂」をもたらすもととなりました。「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。」(ルカ 12・51) しかし同時に、イエスは生涯にわたることばと行いによって、救いの計画の完成を準備してこられたのです。

私たちの罪が、イエスを地上から上げてしまいました。十字架の上ではりつけにされていますが、あの十字架は罪を犯した私たちの「手」です。一人の人間の手では、イエスを地上から上げることは決してできません。何千何万という人の手が重なって、イエスを地上から上げたのです。一人ひとりの罪は些細なものかも知れません。しかしその罪が何千何万と重なって、イエスを地上から上げてしまったのです。

私たちは逃げることなく、今はただ、胸を打ち、赦しを願いましょう。主はすべての罪を背負って復活し、私たちを救ってくださいます。



## 復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

あなたは 2020 年のもう一人のマリア

主の復活おめでとうございます。ここには実は誰もいません。まるでそれは、イエスが復活した瞬間のようです。もしイエスが復活して墓から出られたのであれば、今宵のように、誰もいなかったのでしょうか。私はここから、今年の復活徹夜祭の説教を始めたいと思います。

今年の小教区黙想会で、ベルゴリオ枢機卿が教皇フランシスコとして選出される直前に、カリタスの黙想会で語った言葉を思い出しました。彼はカリタスの黙想会参加者に「(問題は)イエスを聖具室に縛りつけていること」だと語り、イエスが戸口に立って呼びかけるヨハネの黙示録の一節を引用して、この話はイエスが中に入れてくれと戸を叩いている話ではなく、内側に閉じ込められているイエスが外に出してくれと言っている話であると思うようになったと述べたのでした(黙示録 30・20)。

まさに、今年の復活徹夜祭はその思いでこの場にいます。私は、イエスを聖櫃に縛り付けるような説教をしてはいけません。イエスが外に出て、大胆に語るような説教をしなければならないのです。その助けになればと思い、一つの思い出話を紹介します。

私は、大神学生時代にあっと驚く神父様に出会いました。その神父様は私と、私の先輩を外に連れ出して、初めて見る物、初めて聞くこと、初めて味わうものを経験させてくださいました。これは宇都宮で本当にあった出来事です。

最初は最高級ランクのステーキをおごってもらいました。そのあと生まれて初めてスナックに連れて行ってもらい、お店の人と歌を歌いました。見るもの聞くものすべてが、あっと驚くものでした。

しかしその神父様自身はそのすべてにまったく流されることなく、連れて行ってくれる前も連れて行ってくれた後も、まったく変わらない神父様でした。今日の福音朗読で例えるなら、番兵に過ぎなかった私は見るもの聞くものすべてに恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになったのでした。

神父様は圧倒的なお姿で教えてくださったのです。「恐れることはない(中略)。あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ(中略)。さあ、出かけて行って弟子たちに告げなさい。」復活したイエス・キリストを知った人は、何にも縛られることなく、まったく自由にキリストを告げ知らせるのである。私はそのことを出会った神父様から教わったのです。

今や、イエスは何にも縛られず、復活してすべての時間、すべての場所、すべての国に福音を告げ知らせます。ミサが中止され、自分の殻に閉じこもっている場合ではありません。あなたも私も、復活したキリストを自分の殻に閉じ込めることなく、「私を出して、告げ知らせに行ってくれ」と叫んでいる復活したキリストのお手伝いをしましょう。このメッセージを聞いたあなたは、2020年にイエスを墓に訪ねたマグダラのマリアともう一人のマリアなのです。





## 復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

信じて、ミサ再開の日を待とう

あらためて主の復活おめでとうございます。イエスが復活の栄光を受けたとき、ご自身が死んで復活すると、誰よりも心の準備をさせてもらったのは弟子たちでした。ここに今年は注目しましょう。

マグダラのマリアは、墓から石が取りのけてあるのを見ましたが、彼女の心は準備ができていませんでした。弟子たちは三度も、イエスの死と復活について予告を受けたので、出来事の向こうにあるものを捉える準備がいくらかできています。しかし完全には捉えきれません。

ヨハネ福音書はもう一人の弟子の様子を「先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」（20・8）と描いています。死と復活の予告がなければ、とてもここまで理解が及ばなかったでしょう。ただ、予告があったとしても、弟子たちの力だけで理解し、信じることができたのかということそうでもないようです。直後にこう書かれています。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」（20・9）

もし、人間の力だけでイエスの復活を捉えることができるのであれば、違う書き方になっていたでしょう。「二人はようやく理解することができた」そういう結び方になったかも知れません。「入って来て、見て、信じた」この直後に「二人はまだ理解していなかったのである」と続けるのには、何か理由があるでしょう。

マタイ・マルコ・ルカ福音書には、三度にわたってイエスの死と復活の予告があります。私たちの感覚からすれば、どんな人間も三度指摘されれば十分理解できるでしょう。それでもペトロともう一人の弟子は、イエスの復活の出来事にたどり着けなかったのです。なぜでしょうか。

それは、「人間の理解を超える出来事は、ただ示されただけでは理解できない」ということなのだと思います。決して理解できないわけではなく、イエスのほうから近づいてくださって初めて、人間の理解を超える出来事にも心と身体が目が開かれるのです。

弟子たちはイエスの死後、完全に希望を失ってしまいました。マグダラのマリアは墓に行きましたが、彼女は終わってしまった出来事にすがりつこうとします。人間の力が及ぶのはここまでなのです。イエスが近づいてくださるとき初めて、復活したイエスが示そうとする未来に、限りある人間の目が開かれていくのです。

私たちも、今年の四旬節、受難の主日と大きな悲しみを背負いました。ミサに参加できず、心の中では死んだも同然でした。しかしここで、過去にしがみついてはいけません。イエスと同じく死んだのであれば、復活したイエスが近づいて、未来に目を向けさせてくださいます。

私たちの死んだも同然の体験は無駄ではないのです。死んだからこそ、未来に目を向けてもらえるのです。全世界の教会が、再び復活するための「霊的な死」を体験しました。イエスは必ず私たちを、復活の希望に招いてくださる。固く信じて、ミサ再開の日を待ちましょう。



## 神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

信じない者ではなく、信じる者になりなさい

復活節第二主日、神のいつくしみの主日を迎えました。緊急事態宣言が全国に広げられましたが、私の印象は、限定的に使用された法律も、最終的には全国民を規制する法律に化けるのか。そういう印象です。感染者数が多い少ないはこの際問題ではないのは分かりますが、全国一律には違うのではないかと、そういう思いが拭いきれません。

さて今週の福音朗読から届けたいメッセージは、神が与えようとするのは、徹底していつくしみなのだということです。復活した主は平和を与え、使命を与え、いつくしみを与えてくださいました。すべてひっくり返して考えると、復活した主は私たちが生きるように、命を与えてくれました。いつくしみのある所に、神が、神の愛が、現れるのです。

朗読では二つの出来事が組み合わされていますが、どちらも「週の初めの日」の出来事です。それは私たちにとっての日曜日です。弟子たちに復活したイエスが出現したことで、最初の出現に立ち会っていなかったトマスに、イエスが出現したことが組み合わされています。ここから、「週の初めの日」つまり日曜日に、イエスを信じる集まりにも、イエスを信じる個人にも、いつくしみを示してくださるということです。

最初の出現でイエスが弟子たちに手とわき腹とをお見せになると、「弟子たちは、主を見て喜んだ」(20・20)とあります。本来は、「喜べる立場か？」と非難されても仕方ない状態です。イエスの十字架の場面で弟子たちはその場にいなかったのですから。それでも「主を見て喜んだ」と書かれている。これは、イエスのいつくしみがどれほど大きいかを物語っていると思います。

神のいつくしみを考えるとき、「放蕩息子のたとえ」を思い出さずにはられません。弟のしたことは、兄からの非難でも分かるように、弁解のしようがないものでした。けれどもこの物語が示そうとしているのは、それを上回る父親のいつくしみでした。人間は、神のいつくしみのおかげで、すべてを水に流してもらい、いつくしみを受けた人間に生まれ変わるのです。

八日の後、新しい週の初めの日、トマスも神のいつくしみに触れることになります。トマスの心は頑なになっていました。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(20・25)もはや弟子たちにはトマスの心を開く力は無かったのです。トマスがへそを曲げているだけかも知れません。けれども似たようなことは、私たちの誰にでも起こることではないでしょうか。

兄弟姉妹でいがみ合っている人たちがいます。兄弟は本来最も理解し合えるはずの関係です。それなのにどちらも折れようとせず、何年も一言も口をきかない場合があります。司祭は「兄弟」と呼ばれたりする間柄ですが、その中でも同級生は理解し合える間柄のはずです。けれど

も同級生と一言も口を聞かないこともあります。そうなった理由とか、その人の言い分があるわけです。こじれた関係、こじれた絆は、とても人間の力では修復できないものになってしまいます。

そんな、人間にはもはや心を開かせる術がないときに、神のいつくしみが必要なのです。神はどれほど頑なで、心を閉ざすもつともな理由がある人でも、神のいつくしみで覆い、いやしを与えてくださいます。頭では心を開くべきだと分かっているでもできない弱い人間を、神のいつくしみは黙って、覆い尽くしてくださるのです。心を開けず、後れを取った人たちを黙って受け入れ、群れに連れ戻してくださる。それが神のいつくしみの働きなのです。

今、神のいつくしみは誰に必要でしょうか。新型コロナウイルスの影響で、人が人と近づくことを避けようとしています。多くの人が自宅にこもり、もしかしたら自分の殻に閉じこもっているかも知れません。今年の神のいつくしみの主日は、すべての人に必要な恵みの日となった。私はそう考えます。

ミサに来ることを制限されました。司祭も会衆のいないミサを要請されています。いつまで、私たちは耐えなければならないのでしょうか。ある人は神様の働きが遅すぎるのではないかと悲観しているかも知れません。たとえ人間には遅いと思われても、神は遅れることなくご自身のいつくしみを示してください。神がお与えになるはいつもご自身のいつくしみであって、罰ではないのです。

神のいつくしみに信頼を寄せましょう。ミサ再開の日を、神は取り上げているのではなく、私たちにより深く求めさせているのです。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(20・27) ミサ再開の日を信じない者ではなく、信じる者になりましょう。



## 復活節第3主日 (ルカ 24:13-35)

今弟子はどこへ行き、何をすべきか

復活節第3主日は、復活したイエスがエマオで弟子たちに現れる場面が朗読されました。エマオに向かう弟子たちの出会っている方が復活したイエスだと気づいたのは、イエスが「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」(24・30)場面でした。ここに注目して学びを得ることにしましょう。

皆さんも、最近人と会うことが少なくなっていると思います。会う人が少なくなれば、変わった人と出会うことも少ないでしょう。面白い話を聞くことも少ないでしょう。そこで私のちょっとした失敗で、大いに笑ってください。

先週、春物の長袖シャツを買いました。思い切って派手な色のシャツを買いました。あわせて春物のジャンパーを買いました。こちらは地味な色です。シャツと合わせると、ちょうど良い着こなしになるなど、自分で喜んでおりました。

古くから付き合いのある人に、春物の服を買った話をしました。「どこで買ったの?」と聞かれたので、「西松屋で買ったよ」と答えたのです。実際には「しまむら」で買った服でした。するとその人は笑い転げて「笑いすぎておなか痛い。助けて～」と言うのです。何がそんなにおかしいのか分からない私は、「西松屋で買った服は似合わないかなあ?」とさらに追い打ちをかけたのです。するとその人は笑いすぎて声も出なくなりました。

笑いをこらえながら、その人は必死の思いでこう言ったのです。「神父様の服は、もしかして『しまむら』で買ったんじゃないの?『西松屋』は子供服専門の店よ。」ここでようやく笑っていた理由が分かりました。

福音朗読に戻りましょう。エマオに向かう弟子たちは、完全に気落ちしてエルサレムを離れようとしていました。「心ここにあらず」そんな人にとっては、身近な人がそこに居てもその人だと気づかないかも知れません。そんな状態で、イエスと共に歩いていたのです。

復活したイエスはまず、聖書を説明し始めます。「(イエスは)モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」(24・27)たとえば裁判などで証拠として採用されるのは、一つは「証言」、もう一つは「物的証拠」です。復活したイエスは、言ってみれば「証言」を通してイエスが苦しみを受けて復活することになっていると説明します。

しかし弟子たちは「証言」によって変わることができませんでした。彼らの失望を希望に変えるためには、「証言」だけでは十分ではなかったのです。聖書の一つひとつの言葉は力ある言葉ですが、エマオに向かう弟子たちの心はすべてが奪われ、空虚になっていたのです。聖書の言葉だけでは変わることができなかったのです。

そこでイエスは、ご自身のわざによって弟子たちの心に触れようと

しました。ここで物的証拠を示されるのです。「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」(24・30-31)

パンを裂いたとき、二人は目の前におられる方がイエスだと分かりました。イエスは復活し、生きておられると分かりました。私はこの「イエスがパンを裂いたとき」は、単に夕食の席で食べるパンを裂いたときに限らなくてもよいのではないかと思うのです。イエスがパンを裂かれる様子は、最後の晚餐を思い起こさせます。最後の晚餐のかたどりなら、それは同時に、十字架上の出来事でもあります。

つまりこういうことです。食卓のパンを裂いたときに復活したイエスが目の前におられると理解した。出来事が教えているのは、イエスがご自分の身体を裂いてお与えになる場面はすべて、パンを裂いてくださったあの二人の弟子の体験と重なるのだということです。

対立している人と人との間に和解をもたらすため、イエスがご自身を裂いて両者の歩み寄りを叶えてくださる。ゆるしがたい人が心から罪を悔やんでいる。人間としてはゆるせないけれども、イエスがご自身を引き裂いてゆるしの力を与えてくださる。このようにイエスがご自身を裂いて与えてくださる場所で、人は復活したイエスに出会い、「イエスは生きている」と実感することができるのです。

イエスがご自身をパンとして裂いてお与えになる場面は福音書の中だけではありません。新型コロナウイルスの影響で、ミサが中止となり希望をなくしている私たちにこそ、必要とされています。イエスは喜んでご自身を裂いてお与えになり、「わたしは生きて、いつもあなたたちと共にいる」と声をかけ、力づけてくださるのです。

イエスが生きておられると理解した二人の弟子は、エルサレムに戻りました。エルサレムは危険な場所になっていたはずですが、イエスが復活して生きていと主張すれば、自分たちに危害が及ぶかも知れません。それでもあえて、二人はエルサレムに留まっている弟子たちの元へ行ったのでした。「イエスは生きておられる」と知った私たちにも、復活の喜びを告げ知らせる使命が与えられています。

完全に希望を絶たれた人にイエスは現れて、ご自身を裂いてお与えになり、勇気と希望を与えてくださいます。ミサに参加する可能性を完全に奪われた私たちにも、復活したイエスはご自身を裂いて与えてくださり、苦難を耐え、苦しみからでも復活したイエスを喜んで伝えられる人になるよう望んでおられます。

裂かれたパン、裂かれたイエスご自身は、どんな暗闇をも打ち破る希望の光です。エマオへ向かおうとしていた弟子たちに現れたイエスは、今私たちを力づけ、励ましてくださいます。信頼して、また祭壇で食卓を囲む日を待ちましよう。イエスは今も私たちと共に歩いてくださり、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」(24・17)と声をかけてくださいます。



## 復活節第4主日 (ヨハネ 10:1-10)

羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるため

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」(10・10) 復活節第4主日に与えられた箇所イエスが結びに言われている宣言は、新型コロナウイルスですっかり教会でのミサがご無沙汰になっているこの時期、とても重く響いてきます。司祭はイエスのこの言葉を真摯に受けとめ、イエスが命を与えるために働いておられることを実感できるように工夫しなければなりません。

5月1日、福岡教区笹丘教会から電話がありました。笹丘教会にカトリック信者の方が相談に来たのですが、籍が自分たちの教会にないので、洗礼、初聖体、堅信までの記録を送ってもらい、笹丘教会でこの信徒を受け入れたいという用件でした。

分かっているのは名前と生年月日、両親の名前だけです。確かに田平教会で堅信まで受けたということでしたので、電話をかけてきた神父様には「一時間で返事をします。お待ちください」と伝えました。私には、一時間で返事ができる理由がありました。

幸いに中田神父は、田平教会で洗礼を受けた人に関して、司祭館にいらなくても調べることができるよう、3年かけて教会台帳のパソコン入力をしてきました。ですから仮に外出先でも、手元のスマートフォンで主要な秘跡の記録を調査することができます。それでも120歳とか、130歳の人のデータにはまだ手を付けておりませんが、今回依頼を受けた人の情報はすぐに調べがつかしました。

30分ほどで必要な情報を整え、笹丘教会に送りました。笹丘教会も大型連休中の相談にすぐに対応してもらえるか、大変心配していたと思いますが、対応が早かったことでとても喜んでもらえました。6200人ほどの洗礼とそれ以後の記録のデータ化を、私以外にも力を借りながら完成させておいて本当に良かったと思います。

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」教会の台帳は、羊の命の記録です。ある場合は生死に関わり、一分一秒を争うこともあるでしょう。それでも司祭もいろんな事情で司祭館を出ていることもあります。そんな時、羊の命の記録の問合せに、出先でも答えることができるとすれば、イエスの使命にいくらかでもお役に立てるのではないかと思います。

田平教会の信徒の皆さんは、命の記録が必要になったとき、主任司祭からすぐに情報を提供してもらえます。たとえ主任司祭が出かけていても、連絡を取ればいつでも調べてもらえます。すぐに対応できる体制になっていることを、今回初めて聞いた人もいるかも知れません。初耳の方はぜひ、周りの人に知らせてください。少なくとも、霊魂の命の記録に関しては、周囲の教会よりも、豊かに受けることができます。

ただ、今話した内容も、今般の新型コロナウイルスの事態においてはなかなか情報が届かないかも知れません。今週の説教を聞くことがで

きる人は、田平教会の信者の中でいったいどれくらいいるのでしょうか。私は毎週でも、この説教のプリントを配りたい気持ちでいます。地域には公民館があるので、すべての公民館にミサの録音 CD を一枚ずつ用意しても構いません。

ですがそれはさまざまな制約のため無理かも知れません。せめて、情報に触れることのできる人が、「田平教会のあの人、この人にも、今週の説教を届けよう。」そう思って足を延ばしてくれたらと願うばかりです。ミサの録音 CD が個人的に必要な人は、土曜日に司祭館に連絡をください。日曜日午前中までに必要な枚数を用意します。

ミサの様子は、毎週録音しています。それは月に一度病人訪問をしている方々のうち何軒かの家庭は知っています。全世帯ではありませんが、聖週間のミサの CD をお届けした家庭があります。病人訪問を受けている家庭、知り合いの方がおられるならぜひ訪ねてみてください。すると病人訪問を受けている人から、思いがけずミサと説教の恵みを受けることになるでしょう。

主任司祭の力はわずかかも知れません。それでも、羊飼いの声を知っている人が所々にいて、この新型コロナウイルスの危機の中でも羊飼いについてきてくれているのです。この、羊飼いの声を聞き分ける羊とすべての田平教会家族は繋がって過ごしてください。そうすることで主任司祭の声も聞けるし、何より真の羊飼いであるイエス・キリストの声を聞くことができると思います。

感染症がどんなに恐ろしく、猛威を振るっていても、門であるイエスは私たちを守ってくださいます。門を通過して出入りするなら、経済の手を差し伸べる人たちとは別に、魂の命のために手を差し伸べてくれる人の声を聞き、恵みに触れることができるでしょう。教会に通うことができないうちでも、復活したイエスは私たちの門として、私たちを迎え入れてくださいます。主任司祭も門番として、懸命に頭をひねってできるお世話を考えます。

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」私が入り出す門は、この世の門、経済を救ってくれる門だけでは足りません。教会に通うことができないうちこそ、私たちはイエスという門、心と身体の両方から成り立っている人間全体に関わる門を出入りして、恵みの牧草を得るのです。



## 復活節第5主日 (ヨハネ 14:1-12)

イエスは「御父」という出口戦略への道を示す

「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。」(14・12) 緊急事態宣言、外出自粛規制、カトリック教会では公式ミサの中止。こうしたかつて無い試練の中で復活節第5主日を迎えております。

聖週間から公式ミサを中止しています。例えて言えばイエス様の荒れ野での四十日を体験しているわけです。イエスは荒れ野での試練を経て三年間の宣教活動につなげていきました。私たちの乗り越えるべき試練ももう少しの辛抱です。主の昇天あたりからは、公式ミサを再開したいと考えております。もちろん、教区の決定を待った上でのことです。

過ぎた週、目を丸くする出来事がありました。中田神父は現在六つ目の教会でお世話になっておりますが、これまでお世話になった教会からはその教会の様子を知ることのできる教会報が毎月届いております。二つの教会報を受け取っています。その一つを読んでいた。

すると、「説教を聞きたいと思ったら？」と書かれている記事に目が留まりました。そこには、私が継続して活動している「話の森ホームページ」と、東京教区の神父さんのホームページが紹介されていました。

紹介されていたというのはていねいな言い方でして、私の記憶では「掲載してもいいですか？」という許可願いは受けておりません。私もお世話になった小教区なのでさすがにクレームまでは付けませんが、「え～？許可願いの連絡ぐらい取ってよね」と正直思いました。

ただ、今現在公式のミサが完全に閉ざされている状態です。司祭の説教を、録音ではあっても聞くことができる。あるいはもっと踏み込んで、録画した動画を見て説教に触れることができるというのは、時機を捉えていると思います。20年以上続けていることではありますが、個人的には「やっと日の目を見たなあ」という思いです。

某小教区報に掲載された件、見方を変えるとこれはイエスの予言の実現です。「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」(マタイ 10・27) 私は高所恐怖症なので屋根には登れませんが、某小教区の広報委員の方々が屋根の上に登ってくださり「中田神父のホームページで録音の説教がいつでも聞けるよ」と知らせてくださったわけです。

どんな状況にも、救いはあるのだと感じます。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」(12・1) 誰もが、教会でのミサの中止に気落ちしています。特に高齢の方々は、週に一度の楽しみ、場合によっては子供達が月に一度だけ教会に連れて行ってくれるので月に一度の楽しみという方もおられるでしょう。そうした高齢者にとっては、数少ない楽しみが奪い去られたわけです。

それでも、救いはある。今回、某小教区広報の方々が思いがけず私の活動を取り上げてくださったのを見て、「私の知らない所で、私の活



動が今の困難をいくらかでも和らげてくれている。」そう思ったのです。掲載に至る手続きの問題を横に置けば、私が緊急事態宣言の中でもこれまでと変わらず貫いてきたことは、もっと大きな実りを人々に与え始めているわけです。

今週の福音朗読の結びはとても印象的です。「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。」某小教区報に掲載されたことは、今後大きな影響を及ぼすことでしょう。どんな状況にあっても、イエスが語るみことばを告げ知らせる。その一貫した態度が、今回のようにもっと大きな業に繋がるのです。

パウロもテモテに言います。「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」(2テモテ4・2)これは、説教をあらゆる方法でミサに参加できない信徒に伝えようとしている司祭への呼びかけにとどまりません。信徒も、家庭の中で、「折が良くても悪くても、信仰に関わることをとがめ、戒め、励まし、忍耐強く、十分に教える」こうしたことは十分に可能なのです。

日曜日に集まって礼拝をささげ、宣教のための恵み、知恵と力を受けることのできない今、これまで以上に私たちは「見える形の礼拝」にこだわらず、イエス・キリストに固く結ばれ、生きていくことが求められています。これまでの信仰が、日曜日のミサに繋がることしか考えたことのなかったものであれば、この難局は私たちの信仰を問い直す機会になったわけです。

洗礼を受けた信仰の先輩たちは、いつか宣教師が来て、告白を聞いてくれるに違いない。ミサを献げてくれるに違いない。そう信じて迫害の時代を過ごしました。何世代もの人々が、洗礼を受けてから一度も告白を受けられず、ミサに参加することもできないまま生涯を終えました。

実際には迫害の初めに生きていた人々と、迫害の終わりに生きていた人だけが、宣教師の赦しの秘跡とミサのお世話に与ったに過ぎません。そうしてみると私たちが耐えなければならない今の困難は、はるかに限られた期間です。必ず、この試練は実りをもたらします。必ず、私たちの忍耐はもっと大きな業を成し遂げる基礎になります。

今私たちは、トマスと同じ言葉をきつと叫んでいることでしょう。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」(12・5)。出口が見えないまま、長い忍耐を強いられました。けれども私たちはこの試練を受けとめました。忍耐することから逃げませんでした。

だから不安になる必要はありません。私たちはイエスが示す出口に向かって、忍耐の中を歩いているのです。イエスへの信頼に留まっている人は、今も、いつも、「わたしは道であり、真理であり、命である。」(14・6)と断言するイエスと、真の出口である御父への道を歩いているのです。



## 復活節第6主日 (ヨハネ 14:15-21)

あなたがたをみなしごにはしておかない

復活節第6主日、予定では来週「主の昇天」から田平教会聖堂でのミサが再開されます。新しい生活の工夫をしながら日常生活を取り戻し、その中に宗教活動であるミサの再開も含まれます。中田神父からは、これまでミサを中止していた期間の意味づけをもう一度示して、ミサの再開までに見えない心の部分での準備を整える手助けをしたいと思います。

心の準備をするために、与えられた福音朗読の中ですぐに目に留まるのは、14章18節「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」この箇所をよく理解することが鍵になるでしょう。この箇所が納得できれば、私たちが自宅で辛抱してミサ再開を待ち、自宅で何とかして日曜日の恵みを探し続け、不安の中で過ごしたことに意味を見いだせるはずです。

単純なたとえから入りたいと思います。土を掘り起こしたとしましょう。配水管を埋めるとか、建物の基礎を地面に置くためとか、何かしらの理由で土を掘り起こしました。すると見た目にはそれまであった土はなくなって、大きな空洞が生じます。しかしながら当然、掘り起こした土はどこかに存在するわけです。消えて無くなったりはしません。

掘り起こされた土は、必要な所で、また新しい目的のために用いられます。場合によっては保管されて、必要になったときに使われます。なかには悪意のある人が掘り起こした土は、不法に捨てられ、放置されるかも知れません。いずれにせよ、掘り起こされた土は掘ったその場所からはなくなっても、どこかにあるのがふつうです。

さて、このたとえを私たちが中止していたミサに当てはめてみましょう。田平教会の聖堂に集まって、それぞれの意向で与り、ミサの中で献金をお献げして、恵みも頂いて帰りました。ミサの中での恵みはすべて、司祭の手を通して、司祭を道具として、イエス・キリストが配ってくださった恵みです。3月29日の公式ミサ以降、およそ50日間、教会の典礼にたとえればご復活後40日のご昇天のその先、50日目の聖霊降臨くらの期間、ミサの恵みを奪われてしまいました。

田平教会の神の民は、ミサが取り上げられ、「みなしご」になったのでしょうか？決してそうではありません。取り去られた恵みは消えてしまうのでは無く、どこかですでに配られている。少なくとも恵みの出番を待ってどこかに保管され、出番が来たらいつでも配られる。きっとそうに違いないと私は考えています。

ではどこに、取り去られた恵み、奪われた期間の恵みは運ばれているのでしょうか。教区内すべての教会聖堂で配られていたはずの日曜日ごとの恵みは、地面から掘り起こされた土のように、どこかで活用されたのでしょうか。

明らかに、ここに運ばれたという場所を一つ紹介します。それは大司教館です。大司教館には高見大司教様、中村補佐司教様、秘書の神父様、他にも引退の司教様がおられますが、すでにご存知の通り、大司教館で聖木曜日から今週復活節第6主日まで、大司教様か補佐司教様の司式でミサの中継が行われてきました。司教様方が勇気を出して、利用で

きる手段を躊躇せず使ってくださいったことで、一つのミサで最大 2900 回も、司教様のミサに参加したのです。

これは内緒の話ですが、司教様司式のミサが浦上教会で行われても、2 千人を超える信徒・修道者・司祭が集まることはまずありません。直接のミサで、恵みははるかに多いはずですが、浦上教会を満杯にするなど、聞いたことがありません（あくまでも小声で話しています。大司教様の耳に入ったらえらいことです）。

その点を踏まえると、最大 2900 回、ミサの動画が利用されたというのは驚くべきことでしょう。大司教様が司式する堅信式のミサや、教区主催の各地のミサは完全に奪われてしまいましたが、その恵みは消えて無くなったのではなく、大司教館の、参列者が誰もいない小さなチャペルで、より多くの人を惹きつけていたのです。

長崎教区だけではありません。大阪教区、東京教区も同じような取り組みをしました。調べてはおりませんが、ほかにも世界中多くの国で、いろんな特色あるライブ中継ミサが行われたことでしょう。現代でなければ、このような取り組みは不可能でしたし、司教様方やお付きの方々、教区本部事務局の方々の尽力があって実現しました。教区内のすべての小教区聖堂で受ける恵みは奪われていましたが、その恵みがそっくり大司教館に運ばれて、教区全体のために配られていたのです。

今週の朗読でイエスは「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」と弟子たちに約束なさいました。もしかしたら、大司教様、補佐司教様が決断しなかったら、長崎教区民は「みなしご」の状態になっていたかも知れません。けれどもイエスはそのような状態を決してお許しにならず、いろんな人を動かして、「復活していつも共にいるイエス」を示してくださいったのです。

長崎教区、日本の教会だけではありません。「全世界の教会で、恵みは奪われてしまったように見えたかも知れないけれど、決して無駄に終わったのではないよ」と、証明してくださいったのです。説教の中では一つだけしか例を挙げることができませんでした。ほかにも「イエスが私たちをみなしごにはしない」その証を見ることができます。

教会学校でも、実際の教会学校であれば一度参加した内容を繰り返してもらうことは不可能でした。けれどもこの機会に、「オンライン教会学校」を開いたカテキスタたちもいるでしょう。動画が保存、あるいはダウンロードされれば、繰り返し学び直すことも可能です。今までは不可能だった恵みの分配のしかたが、「みなしご」になったように思えたこの期間に実現したのです。

復活して、いつも共にいてくださるイエスの計り知れない力と恵みを、あらためて知ったミサ中止の期間でした。運び去られたかのように思われたもの、恵みも社会生活のさまざまなものも、三位一体の神の深い計らいによって、必ず巡り会うのです。イエスは決して、私たちを「みなしご」にはしないのです。



## 主の昇天 (マタイ 28:16-20)

その栄光は天にそびえる

55 日ぶりに公開ミサが再開されました。「天にも昇る喜び」という言い方がありますが、今年の主の昇天は、それほどに喜ばしい日になりました。主イエスのご昇天の喜びを、自分のためだけでなく、ミサに参加できないすべての人、もはや参加が叶わない生ける人死せる人、たくさんの人々のため持ち帰りたいと思います。

これに加えて、脳梗塞で入院して危険な状態にある駐日教皇大使ジョセフ・チェノットウ大司教の一日も早い回復と、新型コロナウイルスの患者の回復のためにも、ミサを献げたいと思います。

この日までの公式ミサ中止期間、個人的なミサを献げてきました。その間、中止期間でも構わないのでとミサをお願いに司祭館を訪ねてこられた方が4名（5名いたかなあ）おられました。嬉しかったです。中止期間は新たなミサの意向がないので、4月の終わりには手元に保管してあるミサは全部献げ尽くしました。5月は個人から依頼された意向をほとんど持たないままミサを献げておりました。これから皆さんがミサを依頼してくださることを期待するばかりです。

当然公式のミサがありませんから、ミサの献金もありません。およそ7週間、ミサ献金はゼロです。何と言いますか、張り合いのないミサ、ただ義務を果たすだけのミサを献げる状態に陥る危険は大いにあったと思います。そこで、ミサの最も中心部に当たる「奉献文」を、ふだんは第二奉献文ばかり唱えていたので、この機会に第一奉献文から第四奉献文まで日によって変えて使いました。

また、私自身の人生の記憶のために、ラテン語のミサ、英語のミサ、韓国語のミサを試してみました。実は韓国語のミサはまだ棒読みで意味を追いながら献げることができません。それでも「キリストによってキリストと共にキリストのうちに」の部分は、ある程度心の通う祈りを献げることができました。

誰もいない中で、諸外国語でミサを献げながら、こんなことを思いました。天に昇られたイエスは、どんな言葉を使っておられるのだろうか。地上での公生活中は、ユダヤ人に語りかけるために、ユダヤの国の言葉を語ったでしょう。けれども天に昇られたあとは、ユダヤ人ばかりではありません。日本語や韓国語を話す人は割合としては少ないでしょうから、天に昇られたイエスが話す言葉は日本語や韓国語ではないかも知れない。

ミサは、この地上だけでなく、天でも献げられていると思うのです。できれば、天上でイエスが献げているミサ、イエスがささげている言葉でミサに連なりたい。そう思うのです。天の国で、偶然にも、私が献げることのできる国の言葉でミサが献げられているならいいのになあ。そう思いながら、外国語でのミサを没頭して献げてみよう。そんな思いで一人のミサを献げておりました。

さて、今年「主の昇天」を黙想するに当たって、第二朗読「使徒パウロのエフェソの教会への手紙」を参考に黙想しました。朗読された中から1章20節と21節を取り上げてみたいと思います。「神は、(中略)キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来たるべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。」

特に前半部分です。「神はキリストを復活させ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置いた」と仰います。これが「イエスは天に昇られた」ということを理解させてくれると考えたのです。「天に昇られた」という意味を、今年は一から考え直してみました。

私たちの日常から出発しましょう。特別に優れた人に「高い」という表現を使うことがあります。名前を知らない人はいないという意味で「高名な方」と言いますし、人徳に優れた人を「徳の高い方」と言います。「高い」という表現で、特別な存在であることを言い表すのです。

エフェソの教会への手紙の一節も、これをヒントに考えることができます。「神はキリストを復活させ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置いた」今やキリストはすべての支配、権威、勢力、主権の上にあります。パウロにとって復活したキリストは、すべての上に高く上げられた存在だということです。主の昇天は、復活したキリストが私たちと同じ状態ではなく、「高名な方」「徳高い方」のように高い方になられたということではないでしょうか。何も、はるか雲の上に昇った姿ばかりが「上げられた」「昇られた」ということではないわけです。

すると今度は、福音朗読の言葉もしっくりきます。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」(28・18)これは、高く上げられたイエス、天に昇られたイエスをよく表しています。復活したキリストは天に昇り、いっさいの権能の上に高く立っておられるのです。

この復活したキリストが、弟子たちに「洗礼を授け」「教える」という使命を与えます。揺るぎない権能をイエスは今、帯びています。すべての人より、高くおられるのです。だれもが納得し、たたえる姿で私たちを派遣するのです。「なぜあなたは復活したキリストを告げるのか？なぜ洗礼を授け、イエスの命令を守るように教えるのか？」その問いに、「今やイエスは天に昇られたからだ。高くおられるからだ」と自信を持って答えることができます。

もし、高くいるだけでしたら、鼻持ちならないでしょう。「人を寄せ付けない方」なら、近くにいたらむしろ肩が凝って迷惑でしょう。復活した主は、そのような方ではありません。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・20)のです。

宣教し、教えることに専念する人々を励ましてくださいます。子供に洗礼を授け、信仰の教えを守らせようとする両親のそばにいて力づけてくださいます。「高くおられる方」「天に昇られたイエス」は、かつてガリラヤで宣教しておられたときよりも、私たちのそばにいる心強い方となられたのです。



## 聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

「聖霊来てください」と祈る

聖霊降臨の主日を迎えました。今日を終えると教会の季節も「年間」の季節に変わっていきます。本日、ミサの派遣の祝福には、「アレルヤ」を加えて、「行きましょう。主の平和のうちに。アレルヤ」「神に感謝。アレルヤ」と答えてミサを終わります。

聖霊の賜物を受けて、今年の典礼暦年に信仰の証ができるように、願わくは信仰を同じくする兄弟姉妹が与えられるように、福音の学びを得たいと思います。朗読では、復活したイエスが弟子たちに現れ、「平和があるように」と声をかけた点と、派遣にあたり「聖霊を受けなさい」と仰って、「罪のゆるし」について強調している点が目立っています。

先に、イエスと生活を共にしている間、弟子たちがどんな場面で「平和」「罪のゆるし」を教えられ、体験したのか確かめましょう。「平和」については、弟子たちを宣教に派遣する場面が思い出されます。「実習体験」といったところでしょうか。マタイ福音書の「弟子たちの派遣」、ルカ福音書の「七二人の派遣」ですが、マタイ福音書を取り上げます。

「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。」(マタイ 10・12-13)

実習体験ですから、弟子たちは派遣して下さったイエスへの信頼の上に立って「平和があるように」と願います。弟子たちが平和の源なのではなく、遣わして下さったイエスが平和の源です。常に師であるイエスが後ろ盾になってくださることを感じながら、弟子たちは「平和」を願い続けることができました。

聖霊降臨の主日の福音朗読でも、イエスは「あなたがたに平和があるように」と声をかけます。すでにイエスは十字架上の死を経て、復活して声をかけておられます。ここでの「あなたがたに平和があるように」との宣言は、最初に宣教実習に派遣されたときとは違って聞こえたでしょう。このたびの「平和」の源はどこにあるのでしょうか。

もちろん、かつてと変わらず「イエス・キリスト」が平和の源なのですが、私はその保証として、聖霊が与えられた、聖霊降臨の出来事があったと考えました。弟子たちがこれから宣教に出かけていく所は、必ずしも友好的な場所ばかりではありません。イエスの復活を証言することで、対立や分裂を生じるかも知れません。かつての、いわば実習の時とは違います。そこで自分たちが「平和の使者」であることを保証してくれるのが聖霊なのです。

もう一つの、「罪のゆるし」を強調している点も考えてみましょう。弟子たちと宣教生活に出かけたイエスは、どんな場面で、「罪のゆるし」を宣言なさったのでしょうか。ルカ福音書第7章で、罪深い女として登場する女性に、「あなたの罪は赦された」と仰っています(ルカ 7・48)

参照)。もっと特徴的なのはマタイ、マルコ、ルカ福音書で共通に取り上げられている「中風の人をいやす」場面です。「あなたの罪は赦される」または「あなたの罪は赦された」と仰って、中風の人本人と、周囲の人を驚かせたのです。

居合わせた弟子たちも、きっと驚いたことでしょう。だれもできない宣言を、大勢の人の前でおこなったからです。神お一人のほかに、罪を赦すことはできないのに、そのことばを目の前で聞いたわけです。そして今、復活したイエスは弟子たちに息を吹きかけて言われました。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(ヨハネ 20・22-23) 聖霊が、これから出かけていって神のわざを取り扱う弟子たちの保証、後ろ盾になってくださるのです。

聖霊が降臨する。聖霊が与えられる。使徒言行録の記事を読んでいると、何だか特殊撮影とか、アニメでなければ実現できないような光景が描かれています。けれどもその中心にあるのは、「復活したイエスが、いつも弟子たちと共にいてくださる保証として、聖霊が与えられる」ということであり、そのことをドラマチックに描いているのです。

ちょっと横道に逸れるかも知れませんが、使徒言行録のドラマチックな描き方を何かと比べてみましょう。たとえばそれは、結婚している夫婦のプロポーズの思い出です。海辺の公園で、燃えるような夕日が沈む直前、夕日を背にして「結婚してください」と言った。ロマンチックな場面を用意してくれたことに感激して「プロポーズをお受けします」と言った。たとえるならこういうことです。

実際には燃えるような夕日ではなかったかも知れませんが、プロポーズの経験の無い私でさえも、これくらいの描き方はできるし、大切な出来事を記憶にとどめるために、これくらいの描写はすると思います。こういう描き方が事実と反するとか大げさであるとか、私はまったく思いません。こういう描き方は有りだと思います。

とにかく、「共にいてくださる復活の主」を聖霊が理解させてくれる。そのことを記憶にとどめるために、使徒言行録のような描き方をしたと思いますし、ヨハネ福音書のように、イエスと行動を共にしたことと、聖霊を受けることとを結びつけて説明したりしているのです。

私たちに当てはめましょう。私たちに、聖霊が与えられます。聖霊は、事あるごとに「復活した主が、共にいてくださる」と実感させてくれるお方です。道を見失ったとき、成功の陰で自分を見失ったとき、誰が本当に頼れる人なのかまったく分からなくなったとき、いろんなときに聖霊が見分ける力を与えてくださり、「自分で言うのも何だけど、イエス様っているんだなあ」と感じさせてくれるのです。

意外と身近な所で、聖霊を受けている体験に巡り会います。気づかないことが多いかも知れませんが、だからこそ、私たちは機会あるごとに祈るのです。「聖霊来てください。」意識的に、このように祈ることにしましょう。



## 三位一体の主日 (ヨハネ 3・16-18)

父なる神について

三位一体の主日を迎えました。「三密」とは真逆の、父と子と聖霊の深い絆、多様性がありながら完全に一致している神秘へと、「御父」のお姿を黙想することで近づきたいと思えます。与えられた朗読箇所から、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3・16)ここを手がかりにしたいと思えます。

中学生と教会学校での勉強は、司祭になってからずっと続いています。小学生のお勉強はこれまで4年間お休みしていましたが、中学生は途絶えることなく続けてきました。特にたくさんの子供達と接してきた助任司祭時代は、中学生の理解力に大きな幅があることを不思議に思っていました。

ときどき中学生は、義務教育の学校のことを話してくれます。中間試験の点数がどうだったとか、いろいろ聞かせてくれるわけですが、私が初めのうち信じられなかったのは、「30点取った」と聞いたときに、「50点満点で、か？」と確認すると、「100点満点で、です」と答える生徒がいたことでした。

私にはわかには信じられなかったのです。私自身、南山中学校の一学期の中間試験で67点を取ったのが人生で最も低い点数でした。どんなに理解できない科目でも(中学高校一貫して数学は理解できませんでした。それ以上に高校の生物は、まったく理解できませんでした)、それでも、67点以下は取りませんでした。私自身の経験がそうなのですから、100点中30点というのは、理解できなかったのです。

しかし現実には、30点どころか8点しか取れなかったという生徒もいました。どんな努力をすれば8点しか取れないのか分かりませんが、実際に目にしました。「こりゃダメだ。救いようがない。」本心はそう思っていて話を聞いていたのでした。

しかし、私たちが信じる三位一体の神、その父なる神は、「8点？救いようがないな」とは仰らないはずです。何せ、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」心を砕くお方だからです。私たちは「独り子を信じる者が一人も滅びないように、永遠の命を得るように」心を砕くお方を、「父なる神」と呼んでいるのです。

人間は見えるものでいろんなことを知ろうとします。点数がそうでしょうし、点数以外にも出席率とか、質問に返ってくる答えとか、感覚で分かるものを通してしか相手を知ることができません。これだと、必ず「救われない人」が出てきてしまうのです。「一人も滅びない」と言うからには、人間の物差しではない何かが、御父の手元にあるはずです。

御父にあって、私たちにない物差しとは何でしょうか。それは独り子イエス・キリストです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3・16)御父の独り子であるイエスは、我が子を地上で十字架にかけた人々も含めて、「独り子を信じる者が一人も滅びない



で、永遠の命を得るため」人類に愛を注いでくださったのです。

独り子イエス・キリストを通して御父の愛を理解するようにと計画されましたが、独り子イエスを信じるには信じたけれども十字架につけた人々から、最後の十字架の場面で理解して自分を委ねた犯罪人まで、多種多様でした。「独り子を信じる者」の幅は、私のたとえで言えば8点の人から満点に近い人までいたのです。

それでも御父は、一人も滅びることをお望みになりませんでした。人間の努力で足りないと見るや、独り子の犠牲までいとわずに人間の救いに心を砕かれたのです。御父のあわれみ深さはどれほどでしょうか。独り子を与えてしまえばもはや何も残らないのに、それでも与えてくださったのです。

今年、かなり長い期間公式のミサを中止しました。教会学校も連動して休みました。いちばん心配しているのは堅信組です。今後コロナウィルスの第二波がやってくれば、更に堅信の秘跡の準備は追い詰められることとなります。そこで堅信組に当たっている中学2年生には、「君たちが心配する必要はない。信仰宣言の祈りを口頭でも筆記でも、確実に答えられるようにしておいて欲しい」とだけ伝えました。

けいこに来て勉強できることは、現実にはもう少し増えると思います。けれども今年に限っては、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(3・16)と書かれている聖書のことばに信頼したいと思うのです。まんべんなく勉強はできないかも知れない。中田神父の努力不足で、神様の前に8点と評価されるけいこの内容かも知れない。それも承知で、今年は堅信を授けてくださる司教様の前に受堅者を立たせてあげようと思っています。聖霊が、その後長い時間をかけて、子供達を教えてくれることでしょう。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」この聖書の言葉が誤りない真理であるなら、理解力の程度に関係なく、独り子を信じる者は一人も滅びません。もし私たちが、信仰を表現する理解力が弱ってきて、ほとんどの祈りを忘れたとしましょう。それでも、十字架のしるしはできるだろうと思います。

万が一、十字架のしるしさえ思い出せない状態になったとしても、家族のだれかに十字架のしるしをしてもらうだけでも十分です。私たちが十字架のしるししか、信仰を表現できなくなったとしても、あなたのその十字架のしるしが三位一体の神を信じている証しです。

父と子と聖霊の神は、通常は私たちが十字架のしるしをしなければ世の人々に示すことができません。私たちは世に対して、「父と子の聖霊の神」を現す道具になれるのです。

面倒くさがって十字架のしるしをすれば、三位一体の神は人々に安っぽい神として映るかも知れない。ぜひ堂々と、あるいはゆっくりとした動作で、十字架のしるしをしてください。そうすることであなたは、どんな状況にあっても三位一体の神を現す道具になれるのです。



## キリストの聖体 (ヨハネ 6・51-58)

いつか、御聖体のイエス様を届ける人に

キリストの聖体の祭日、9時のミサで三人のお子さんの初聖体を迎えます。この説教は、初聖体を迎えるこどもたちのため、保護者と関わりあるすべての方々のために話したいと思います。

三つのことを話したいと思います。一つ目は「御聖体に養われる人」、二つ目は「御聖体を探し求める人」、三つ目は「御聖体を届ける人」です。説教の最後にもまとめますので、覚えていてください。

初めに、「御聖体に養われる人」です。今年初聖体を受ける三人は、これまで初聖体を準備してきた誰よりも長く、御聖体をいただく日を待ちました。3月の初聖体の予定からもう100日くらい経ちました。とても長かったと思います。

今日、御聖体のイエス様を受けることができます。聖体拝領は今日が初めてですが、これからずっと、長く御聖体のイエス様をいただいて、イエス様から心もからだも養われて生きていきます。

どんな人も、身体に必要な物を外から取らなければなりません。これからできるだけお休みせず日曜日のミサ、土曜日の繰り上げミサに来て、「御聖体に養われる人」になってください。

二つ目は、「御聖体を探し求める人」です。「御聖体を探しに行くって、神父様は変なことを言うなあ」と思っているかも知れません。御聖体はたしかに聖櫃に収められています。けれども御聖体がここに収められていても、皆さんがいつもここにいるわけではありません。ですから「ミサに行って、聖体拝領したい」そう思い続けなければ、御聖体をいただくことは難しくなるのです。

今年は3月の終わりから5月まで、御ミサが中止になりました。学校も、長い間お休みになったでしょう。「御ミサに早く行きたいなあ」と思わなければ、御ミサが始まってもサボってしまうかも知れません。休校中は「小学校に早く行きたいなあ」とずっと思っていたでしょう？「早く学校のお友だちに会いたい。」学校とお友だちを探し求める人だったから、学校が始まった時、とても嬉しくなれたのです。

初聖体を受ける皆さんも、「また日曜日に教会に行って、御聖体を受けたいなあ」そんな、「御聖体を探し求める人」でいて欲しいです。いろいろグズグズ言って教会に行きたくない人にならないで欲しいと思います。「御聖体を探し求める人」は、御ミサに行くのが楽しくなるはずです。

最後に、「御聖体を届ける人」です。「御聖体を届ける第一の人」は神父様ですが、実は御聖体を拝領した人はみんな、御聖体のイエス様を届ける人なのです。初聖体を受けたなら、皆さんにも御聖体のイエス様がおいでになりますね。初聖体を受けた皆さんが、御聖体のことを知らない人、まだ初聖体を受けていない小さな子のところに行くことは、御聖体のイエス様を届けに行く人なのです。

日曜日、9時から、田平教会ではミサがあります。日曜日の9時、お家でゲームをしたりアニメを観たりしている他のお友だちがいるかも知れませんが、そのお友だちと日曜日に会う約束をしたら、何時に約束しますか？日曜日の朝9時ですか？違いますよね。たぶん、お昼前とか、昼からになるでしょう。そのお友だちが「朝の9時においでよ」と言われたらどうしますか？

その時は正直に言ってください。「僕は（私は）、日曜日の9時は教会のミサに行って御聖体を受けるから、ほかの時間がいいな。」これだけで、あなたはお友だちに御聖体のイエス様を届ける人になっているのです。お友だちは日曜日9時のミサを初めて知り、御聖体を受けることも初めて知ります。それだけで、皆さんは立派に御聖体のイエス様を届けているのです。これは、お父さんお母さんも、すべての大人の人も同じことです。

初聖体を受ける皆さんは、今日から御聖体のイエス様がおいでになり、留まってください。でも皆さんが御聖体をいただいたのに、御聖体のイエス様をすっかり忘れてしまったら、御聖体のイエス様を届ける人にはなれません。教会を一步出たら、御ミサのこと、御聖体のことをすっかり忘れるような人になってはいけません。そうではなくて、御聖体のイエス様が自分の中におられることを思い出せる人でいて欲しいと思います。

神父様は4月と5月の間、この田平教会聖堂で、一人でミサをしていました。世界中には司教様が5千人くらいいます。神父様も50万人くらいいます。もし司教様、神父様がミサをしてなかったら、神父様一人であっても、ミサがなかったら、この世に「御聖体に養われる人」「御聖体を探し求める人」「御聖体を届ける人」はいなかったかも知れません。

たった一人でミサをしながら、「今は一人だけれども、それでも私がミサをしているから、御聖体に養われる人がここにいる。御聖体を探し求める人がここにいる。御聖体を届ける人がここにいる。」そんなふうに思って、気持ちを切らさないでミサをしていました。

今日の初聖体で御聖体のイエス様をほかの誰よりも大切にしたいと思ったなら、その人は神父様か、シスターになってください。またいつか、たとえば50年後に教会で公式のミサが中止になったとき、初聖体を受けた皆さんの誰かが神父様、シスターになってくれたら、世界中のたくさんの方がミサに参加できなくても、「御聖体に養われる人」「御聖体を探し求める人」「御聖体を届ける人」は生き続けると思います。

さあ、お話しの最後です。神父様は三つのお話をしました。一つ目は「御聖体に養われる人」、二つ目は「御聖体を探し求める人」、三つ目は「御聖体を届ける人」でした。御聖体にはイエス様がおられます。初聖体を受けて、これからはずっとイエス様の恵みの中で生きるようにしましょう。これからはずっと御聖体を受けて、イエス様と同じ背丈にまで成長することにしましょう。



## 年間第 12 主日 (マタイ 10・26-33)

人々を恐れず「言い広めなさい」と励ましている

「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」(10・27) 私たちはいただいた信仰を、人々を恐れることなく、「明るみで」「屋根の上で」言い広める必要があります。

先週は忘れ物に振り回された一週間でした。信徒会館のマスターキーをスータンのポケットに入れたままクリーニングを依頼して、信徒会館の鍵がないと大騒ぎしました。どこにも当てが無く、たまたま鍵の紛失に気づいたのが6月13日「聖アントニオ」の記念日でしたので、無くした物を見つけ出すために取り次ぎを願う有名な聖人である聖アントニオに、「鍵が見つかりますように」とお祈りしました。

すると1分も待たずに勝手口のチャイムが鳴り、「クリーニングに預かっていたスタンができあがりしました。ポケットに鍵が入ったままだったそうです」と、鍵も一緒に届きました。まさに聖アントニオの記念日に、祈りの効果がすぐに与えられたので、油断したのか安心しすぎたのか、数日したらまた大きな忘れ物をしました。

今度は6月15日、月曜日なので釣りに行く日です。朝ご飯のあとすぐにJAのガソリンスタンドに行き、船外機の燃料を10リッター買いました。最近ではガソリン缶に小分けしてもらうのも免許証を見せて住所と名前、使用目的を書いてからでないといふ携行缶に分けてもらえません。いつもの通り免許証を出して書類を書いて、無事ガソリンを分けてもらって生向(いけむこ)から平戸瀬戸に出て半日釣りをして帰りました。

木曜日の晩、10月に結婚を予定している人の勉強会を終えて何気なく財布を触ったら、いつも車の免許証を入れているところにボートの免許証が刺さっていたのです。いろいろ探しますが見つからない。その晩はずいぶん探しましたがダメでした。

そこで藁にもすがる思いで「聖アントニオ！頼む！」とお祈りしたら思い当たる節がありました。ガソリンを10リッター買ったときに、免許証を財布から出しています。きっと月曜日に忘れたまま、木曜日になっていたのでしょう。

金曜日は「イエスのみ心」の祭日でした。祝い日のミサを終えて朝7時に恐る恐るガソリンスタンドに電話すると、「軽トラックでガソリンを10リッター買いに来られたお客さんですか？免許証預かっていますよ」という返事でした。

肝を冷やしましたが、私がガソリンスタンドを去ったあと電話帳を当たったが、小手田免19番地で「中田輝次」という名前が見つからなかったもので動けなかったということのようです。「聖アントニオに祈れば間違いないから、これからも熱心に祈りなさい」と、イエスのみ心が私の心に語りかけてくれたのだと信じております。

材料はどんなものでも構いません。私はイエス・キリストを信じ、

聖なる公教会を信じ、使徒たちから受け継いできた伝統を信じている。そのことを、人々を恐れずに言い広めなさいと、イエスは呼びかけておられるのです。私のようなドジを踏んだ話でも構わないのです。皆さんのこれまで生きてきた中で、自分が信仰に支えられて生きていと体験したことを、恐れずに言い広めて欲しいのです。

けれども、これだけ言ってもある人は口を開けないのかも知れません。人々を恐れているかも知れません。人を恐れるのは「今」恐れているか「将来のこと」を恐れているか、どちらかでしょう。イエスはそのどちらも恐れる必要はない、恐れを取り除いてあげると言います。

「今」恐れている人にイエスは言います。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」(10・28)「今」イエス・キリストを言い広めると、たくさんの妨害を受ける。そう感じて恐れているのでしょうか。私たちの証を「今」妨害する人も、私たちの見えない心の部分まで妨害することはできません。目に見える物に害を加えることができても、最も重要な神への信頼とか、神への愛にまで害を加えることはできないのです。

「将来のこと」を恐れている人にイエスは言います。「だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。」(10・32)今、妨害しないかも知れませんが、私たちの証を不満に思っ何年後かに苦しめるかも知れません。あるいは私たちの後の世代を苦しめる人がいるかも知れません。けれども私たちは天の父の前でイエスから「仲間である」と言ってもらえる約束を受けています。約束を決して破らない方の言葉に信頼できるなら、「将来のこと」も恐れる必要はありません。

「将来のこと」で一つ思い出しました。宗教にまったく興味を持たない人たちの集まりに「宗教者」という形と呼ばれたことがありました。呼ばれた人たちに次のような質問をされました。「もし、来世がなかったら、宗教は無駄ではないでしょうか？」と。

その時私は「確かに、来世がなければ宗教は無駄でしょう。ですがもし、次の世界があったときに後悔したくありませんし、今の生き方にも神を信じていることで道を逸れないようになるとか、十分恩恵を受けていますよ。」それ以上のやり取りはありませんでしたが、宗教にまったく関心のない人にカトリックの司祭として証した最初の出来事でした。

信仰に根ざして、誠実に生きてきた人は、学問なんか関係なく、立派にイエス・キリストを人々に言い広める力を持っている人です。「今」恐れがある人にも、「将来」に恐れを感じている人にも、イエスは必ずそばに寄り添い、恐れを取り除いてくださいます。「神様に感謝しない千日よりも、神様に感謝する一日のほうがすばらしい時間です。」これだけでも十分な証です。

教会に集まって、ミサの中で聞いたことを、明るみで言いましょ。ミサの中でイエスが耳打ちしてくれたことを、屋根の上で言い広めましょ。



## 年間第 13 主日 (マタイ 10:37-42)

その順番を、一つ下げることができますか

「はっきり言うておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」(10・42) 宣教に放り出されたかも知れない弟子が不安に思っているところに、「冷たい水の一杯」はどれだけありがたい差し入れたったでしょう。私たちが差し出す温かい手を、神は必ず報いてくださいます。

これから、私の中学生の時の体験を紹介したいと思います。今から四十年も前の話です。すでに話を聞いたことがある人も、どうかもう一度耳を傾けてください。

当時私はすでに神学生した。夏休みの終わり、8月31日、五島から神学校に帰る日のことです。前の日に私は荷物を準備し、明日いつものように神学校に帰る予定でした。ところが前の晩、8月30日の夜中に、弟がひどい熱を出して、病院に運ばれていきました。

母もいっしょに病院に行きました。その時母は、「自分で何とか帰りなさい」と言って病院に行ったのです。けれども困ったことになりました。私は母親からお金を1円も預かっていなかったのです。バス代も、船賃もありませんでした。

悪いことは続きます。バス停に行ってみると、もうバスは出発していました。当時、フェリー港に着くためには、バスに2時間以上乗らなければなりませんでした。お金は持っていないので、もうほかに港に行く方法はありませんでした。

悲しくなって、バス停に立ち尽くしていると、知らないおじさんが声をかけてきました。「あんた、輝明さん家の神学生やろ」「はい」「神学校に今日帰るとね?」「はい、けれども、行けなくなりました。」私は前の日からのことを話して、もうバスもないし、帰ることが出来なくなると話しました。泣きたい気持ちでした。

すると、そのおじさんはポケットからお金を出して、私に握らせてくれました。見ると一万円でした。四十年前の一万円です。おじさんは私に、「タクシーばつかまえてすぐ港に行かんね」と言ってくれました。

私はお礼を言わなければいけないので、「おじさん、名前を教えてください」と言いました。するとそのおじさんは、「おじさんはおじさんたい。子どもは心配せんでよか。はよう行け」と言って、いなくなってしまうのです。

今でも、そのおじさんの名前は分かりません。元気なのかどうかも分かりません。けれども、そのおじさんは神学生になったばかりの私、海の物とも山の物とも知れぬ私に大金をくださったのです。四十年前の一万円を、あたかもコップ一杯の水であるかのように、惜しげも無く、「イエスの弟子だ」という理由で差し出してくれたのです。

そのおじさんは、信仰のことをとやかく言いませんでした。けれど

もおじさんは、イエスの教えを完全に実行したと思っています。イエスが打ちひしがれている弟子に声をかけて、生きた水を与えるように、あのおじさんは私を見つけて、「わたしの弟子だという理由で」手を差し伸べてくれたのです。

そのおじさんのことを、私は決して忘れません。おじさんは、本当に私がイエスの弟子になって、イエスに固く結ばれる手伝いをしてくれたのです。あのおじさんは、わたしの心の中に、説教の冒頭に触れたイエスの声を届けてくれたのです。「はっきり言うておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

大金を持たせてくれたおじさんに、私は返すものが何もありませんでした。一万円よりも尊いものを、私は持っていなかったのです。けれども、私が司祭を目指している、イエスのために長崎で勉強している、それだけで、大金を冷たい水一杯として与えてくれたのです。

イエスは今でも、私たちに声をかけて、「わたしについて来なさい」と言っていると思います。父や母を愛することは当然のことです。親が、息子や娘を愛することも当然のことです。それでも、神のことを優先する人がいます。神の招きが何よりも大切だと感じた人は、今までいちばん大事だと思っていたものでも、順番を一つ下げることができるのです。そしてそれはイエスの時代だけでなく、今でも続いているのです。

最近司祭になられた青田神父様、また現在三ツ山教会におられる山田良明神父様、いずれも社会人として立ち位置があった人でした。能力もあり、社会で成功できる人でした。それを、神のために順番を一つ下げて、神の招きを最優先にして司祭となられたのです。

私たちも何かを見倣うことができると 생각합니다。イエスが期待しておられることに照らして、自分の生活の優先順位を変えること。いざとなったら、目の前の今まで最重要だったものの順番を一つ下げる。それは痛みを伴うかも知れませんが、私たちが信仰の証をするとき、圧倒的な証になると 생각합니다。

この世のものの価値を、永遠のものの価値と置き換えることはできない。この一言だけ、イエスに返事をして今週は生活に戻っていきましょう。その答えがあれば、生活すべてに、神の心にかなう順番を付けることができるようになるはずで



## 年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

人は十字架上でこそ、学びと安らぎを得る

「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」(11・29) イエスの軛を私たちが負うとき、私たちは最も学びを得ます。イエスの軛を負うときがいつなのかを考えてみましょう。どのような学びを得て、それがどのように安らぎに結びつくのでしょうか。

福音朗読に戻りましょう。イエスは「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と言います。ここで言う「わたしの軛」は、何のことでしょうか。イエスが私たちに求めることは、「わたしの軛」と言えるでしょう。マタイ福音書から探してみると、5章から7章でまとめられている「山上の説教」は「わたしの軛」に当てはまるでしょう。

具体的には、「腹を立ててはならない」「姦淫してはならない」「離縁してはならない」「誓ってはならない」「復讐してはならない」「敵を愛しなさい」「天に富を積みなさい」「人を裁くな」こういったことが並べられていますから、これらを守ることはイエスが言う「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と言うことになるでしょう。

けれどもイエスは、これら日常生活の具体的なことをずらっと頭に思い浮かべて、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と言ったのでしょうか。違うかも知れません。それらをすべて含む軛、一度ですべてを超える、そんな軛のことを思い浮かべてあのように言ったのかも知れません。それは何でしょうか。

もしイエスが、軛として一つだけ思い浮かべておられたのなら、それは「十字架上の犠牲」のことだと思います。十字架上で、人間の救いのためにご自身をささげることが、「わたしの軛」と言っておられたのではないのでしょうか。

そうであるなら、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」とは、「わたしと共に十字架を負い、わたしに学びなさい」と言っておられるのです。人が、日々の十字架を負うとき、私たちはイエスがになった十字架と一緒に担うこととなります。「イエスの十字架と一緒に担う」と言うよりむしろ、自分の十字架を担って初めて、人間を救うために十字架にかけられたイエスの御心を知るのです。

日々の十字架を担うとき、私たちにはどんな学びがあるのでしょうか。イエスはゲッセマネの園で、苦しみもだえ、次のように言いました。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」(マタイ 26・39) 「杯」とは、これから待ち受けている十字架の死に至るまでの苦しみのことでしょう。イエスはこの緊迫した場面で、自分の知恵に頼らず、御父に心をすべて開いて、「御心のままに」と自分を委ねたのです。

日々の十字架を担う私たちの学びはここにあります。「なぜ？」と思うような試練、苦しみ、理不尽な仕打ち。これらに自分の知恵で意味



とか価値を探そうとすると、絶望的になるかも知れません。こんなに親切にしているのに裏切られたとか、こんなに思いやっているのに恩を仇で返されたとか。そんな仕打ちを甘んじて受け入れる理由がどこにあるでしょうか。

けれどもイエスは、私たちに模範を示し、慰めてくださいます。「わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」私たちにとって日々の十字架を担うことが、イエスの軛を負ういちばんの近道です。時代を超え、場所を超えて、十字架こそが、私たちとイエスとの共通の軛ではないでしょうか。

同じ一つの軛に繋がれているから、重荷は負いやすく、軽くなります。同じ一つの軛に繋がれているから、共にいてくださるイエスのおかげで安らぎを得ることができるのです。もちろん十字架の重さはイエスとはまったく違いますが、神に心を完全に開いて日々の十字架を担うなら、十字架を担う日々はいちばん学ぶときであり、いちばん安らぎを得るときになるでしょう。

同じ一つの十字架を担った、長崎の小神学生時代の体験を話しましょう。私が知っているわけではありませんが、当時の神学校はちょっとした軍隊生活のようなものでした。好き嫌いは決して許されず、縦割りで分けられた六人掛けのテーブルで食事をしていた中で、食べ残そうものなら最上級生がそれを決して許さず、食べるまでほかのメンバーは待たされるのでした。

あるとき新入生がワカメスープを食べられず、残してしまいました。現時点ではもう時効ですが、テーブルの最上級生は切れ目の先輩でした。最初に全員注がれたワカメスープに新入生が箸を付けなかったので、先輩は「食べ終わるまでこのテーブルは食後のレクレーションに入ることは許さん」と言うのです。

困り果てまして、ほかのメンバーは恐ろしくて凍りついています。私はとっさに思い付きまして、給食の鍋のような大鍋に用意されたワカメスープがすべて無くなれば、先輩も嫌がらせはできないに違いないと思い、大鍋のワカメスープを全部平らげようと、私がおかわりをし始めたのです。10杯、それ以上おかわりしたでしょうか。最後には先輩が根負けしまして、新入生は勘弁してもらい、私たちも食堂を出てレクレーションに移ることができたのでした。

後に思ったのですが、私はあの時、初めての同じ一つの十字架を背負うことができたのでした。新入生は食べられずに苦しんでいる。ほかのメンバーは身動き一つできずに苦しんでいる。イエスも、そばで苦しんでいたはずです。幸い私は行動を起こせたので、他人の苦しみとイエスの苦しみを学ぶことになり、最後に許されて、安らぎを得たのです。

神秘的ではありますが、十字架上でこそ、人はイエスと同じ軛を担うことができます。十字架上でこそ、最高の学びを得ることができます。十字架上が、神が与えてくださる安らぎを得られる場所なのです。日々の担う十字架を通して、私たちも最高の学びと安らぎに預かりましょう。



## 年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

あなたの中でも百倍の経験は存在する

「ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」(13・8) 種蒔きしたもののなかで、豊かに実を結ぶものが出てきます。それが百倍になるのか、どうなるのかは神様に任せるとして、私たちはいつか豊かな実りにあずかると希望することができます。

人間誰でも、何かしらの才能を種蒔かれています。それは神様から、生きていくために役に立てて欲しいと与えられているわけです。ですから「種を蒔く人」の原点は人となられた神の子、イエス・キリストのことです。イエスは実りを計算するのではなく、実りを得られない危険も承知で人類に種蒔きを開始します。

「その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。」(13・1) これはイエスがたとえを通して弟子たちに種まきをするという暗示かも知れません。あるいは父なる神が自ら家を出て、人間の世界に独り子イエスを遣わし、人類の救いのために「一粒の麦」となって死んでくださったことの象徴でしょうか。蒔かれた種は確かに実りました。蒔かれた種の実りである十二使徒も、その後の教会指導者たちも、いのちをかけて神の民を守ってくれました。

蒔かれた種が、多くの実を結ぶ。それは体験によって知るのがいちばんでしょう。私の母方の祖母はカタカナしか読めない環境で孫たちを慈しんでくれましたが、中でも祈りの精神を教えてくださいました。時間になると何を置いてもロザリオと晩の祈り、日常生活では「歩きながら主の祈りを唱えなさい。そうすれば歩みも軽やかになります」と教えてくれたのでした。祈りのない生活などない。それが祖母の教えでした。私の人生の土台を作ってくれた人です。そう考えると、祖母が蒔いた種は私の中で百倍に実ったのだと思います。

私は福岡の大神学校時代、上級生になって福岡市内の教会に日曜学校の実習に出るようになりました。聖書を開いて子供達に教えますが、聖書全体を見渡すためには書名を覚えていなければなりません。

福岡市内の子供達は優秀な子供達がいました。西南学院とか九大を目指している子供から問い詰められて答えに窮することもあったのです。旧約聖書、新約聖書全体の書名を覚えていれば、神の働きがどのように私たちに届いてきたのかをじっくり話すことができます。最初のうちはそれができず、申し訳ない気持ちになりました。

完全に旧約聖書と新約聖書の書名を覚えたのは浦上教会の助任になったときです。子供達の要理に加え、カトリックセンターでの聖書講座にも呼ばれることがあり、概略を話すときにどうしても書名をすべて覚えておく必要がありました。その時代に苦労して覚えたことが、今になって大いに役に立っています。「鉄道唱歌」という歌に合わせて私は覚ええました。皆さんもその気になれば、きっと覚えられると思います。

この、旧約聖書と新約聖書の書名をすべて覚えたことが六十倍の実りだったかも知れません。三十倍の実りは、まったく違うところからでした。私はまとまった時間の話をするとき、初めに参加者の気持ちをつかむため少し時間を使います。話を聞く人たちは、最初から熱心に耳を傾けてくれる人ばかりではありません。「聞いてみようかな」という気持ちにさせないと聞いてくれない人もいます。

そこで私は、純粹に興味を引くためだけの話題を持ち出して、こちらを向いてもらうことにしています。最初の頃はあとで聞く話の準備になっていることもありましたが、繋がっている話をして繋げてくれない人もいますので、最近はあまり気にしていません。

その中でいちばん役に立ったのが、「ルービックキューブ」でした。ご年配の方はよく知らないかも知れませんが、サイコロの形をしたパズルで、六つの面すべての色が完全に揃うことを楽しむものです。私はこれを高校生の時夢中になって取り組んでいました。現在でも、2分半から3分あれば、六面すべての色を揃えることができます。興味がある方は、「こうじ神父ブログ」の「今週の一枚」というリンクをご覧ください。

このルービックキューブは一時期日本でも爆発的に人気が出て、その時期はたいていの家庭に一個あって、完成できないまま放置され、見向きもしなくなっていたのです。子供達や学生たちに「私の所に持っておいで。完成させてあげるよ」と言うと喜んで司祭館に持ち込んできて、話が弾むのでした。たくさんの方に放置されていて、それを話題にして人を知り、家庭を知るきっかけになるわけですから、これは三十倍の実りをもたらした道具だったと思います。

振り返って、私たちはどのような種蒔きを受けたのでしょうか。蒔かれた種がいつどのように実を結ぶのか、それは神様がお決めになることです。神様は多くの種蒔きが無駄になるかも知れないと理解しています。それは私たちの用心が足りずに奪い取られたり、覆い塞いだりするからです。それでも神様が私たちに蒔いてくださった種は、見事な実をつけるのです。人間の目には失敗に見える結果からも、神は実を結ぶことができます。それは独り子イエスの十字架上の死で証明済みです。

ですから私たちは信じましょう。神様が私たちに種蒔きしてくれた。あとは神様が実を結ばせてくれる。信じて、心を開き、神様の声に、神様の導きに委ねましょう。神様に心を開ききるなら、聖霊の働きで、私たちは実を結ぶことができる。私たちそのものが、この世界に神から蒔かれた種なのです。



## 年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

ちよっと毒のある人いるよね

「畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。」(13・27) ついつい取り除きたくなる要素を、辛抱強くそばに置きます。たとえイエスが教えようとしていることを見つけ、私たちの信仰生活に、教会生活に、活かしていきましょう。

新型コロナウイルスの感染が、平戸地区の行事にも影響してきました。今年の「福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭」は協議の結果中止となりました。県内の感染者も増えてきています。8月の人の移動とか、政府のキャンペーンとか、様々なことで危険が増すと判断しました。

教会の行事を社会情勢で中止せざるを得ない。そんな時代が来ています。もし強行して多大な迷惑をかければ、私たちキリスト信者の行動は人々に理解されなくなります。ここは忍耐が必要です。

福音朗読に戻りましょう。僕たちは毒麦を取り除きたいと考えていますが、主人は「取り除く」のではなく「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」(13・30) と命じました。私たちも、僕のような考えに傾き、僕が提案した行動を取ろうとするのだと思います。

このように考える私たちは、たとえ話の主人ではなく、僕なのだと思います。私たちの身の回りにも、「毒麦を抜いてしまおう」という考えや行動はたやすく入り込みます。たとえば、人材を集める必要があって、募集してみたら思いがけない人まで応募してきたとしましょう。

すると「この人がいたらやっかいだ」そういう考えが先に立ち、早めに手を打とうとするのではないのでしょうか。たとえば「人数が定員を超えたので何人かはお断りすることになります。人選はお任せください。」その後「毒麦」と考えるメンバーを取り除こうとするでしょう。

「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」この世界では見る人の都合で、あるものが「毒麦」と見られてしまいます。たとえ話の主人は、見る人の都合ではなく、本性が現れて、みずから毒麦であり、焼かれなければならない束であると正体を見せるまで忍耐して待ちます。主人の考えに立つと、両方とも育つままにしておけば、誰かが判断しなくても、変わらない本性の部分が現れて、どのように扱うべきか決まってくるというのです。

たとえ話のまことの主人であるイエスは、「わたしに倣いなさい」と暗示しています。今は裁きの時ではなく、憐れみの時なのです。神は悪をうやむやにせず、いつか裁くでしょう。しかしイエスが再びおいでになり、収穫を命ずるまでは、憐れみの時、忍耐の時なのです。

イエスの思いに反し、急いで判断を下してしまい、「抜き集めよう」とする。人間的な判断で事態を丸く収めようとする。これらはイエスの思いを理解しない者のすることです。ここが、たとえ話を聞く人が「僕」に終わるか、「イエスの弟子」になるかの分かれ目です。

イエスの思いを知らず、イエスの前に立ちはだかる人は決してイエ

スの弟子にはなれません。イエスの再臨の時まで長く感じるかも知れませんが、私たちはよく観察し、見極めなければなりません。イエスがここまでして忍耐の時を過ごすそのわけを考えなければなりません。

忍耐の時を受け入れる。どんなに勇気の要ることでしょうか。勇み足で毒麦を抜くほうが、どれほどやりやすいでしょうか。なぜ「僕」のような考えに傾くのか。私たちがほぼ間違いなく、自分のことを「良い麦」と理解しているからです。「毒麦」「毒のある人間」「他人に害を与える人間」とは、夢にも思っていないからです。

たとえを語るイエスがこうまでして「両方とも育つままにしておく」のは、「私という毒麦」を収穫のときに束ねて燃えさかる火に投げ込まないためなのだ、もし一度でも考えるなら、イエスの忍耐に私たちも理解が及ぶのだと思います。実際、私を「毒麦」の立場に置いた方が、たとえ話はよりよく理解できるのではないのでしょうか。

「抜き集められても仕方ない」というような発言や行動を、私たちはこれまで一度もしたことがないのでしょうか。「あんなことを言ったり態度を取ったりしています。抜き集めておきましょうか。」私たちにほんのわずかでも、指摘される覚えがないと言うのでしょうか。

私が前任地にいた時、東北からの旅行者を熱心に五島に案内してくれる旅行会社の人がありました。最初のうちは教会訪問の申し込みを受け入れて、自由に教会訪問して行ってくださいと返事をして、直接会うことはありませんでした。

ある時たまたま聖堂内に用事があって入ってみると、巡礼の引率者らしき人が聖堂内に入り込んだスズメを追い払おうとしていました。その時こんなふうには言っていたのです。「おーいスズメ、ここから出なさい。そうでないと焼いて食べるぞ。」

私はびっくりしてとっさに注意したのです。「スズメを焼かないでください。食べないでください。」彼は自分の発言を詫言しました。実はそれが縁で、その後この旅行会社のツアーの教会訪問を何度も受け入れることになりました。

彼はあのとき、軽い気持ちであんな発言をしたのかも知れません。けれども私はそれをすぐに罰しようとしたのでした。「毒麦を抜いてやったぞ」そういう気持ちだったかも知れません。あとで考えると、巡礼者も一緒にいる場で責任者を叱責するのは良くなかったと思います。

振り返ると、私は自分自身を「毒麦」とは思っていないでしたが、引率者を皆の前で叱る態度は「毒麦」の態度だったかも知れない。神の前に、神の僕から「抜き集めましょうか」と言われるのは私だったかも知れません。神はそれを制して忍耐し、今日まで、振り返りと反省の機会を与えてくれたのだと思います。

私たちは常にイエスの語るたとえ話の中に含まれています。けれども常に「良い麦」だとは限りません。「毒麦」の立場でもたとえ話を読み返し、よりイエスの忍耐を学ぶ必要があります。イエスの忍耐は、私を含むすべての人のいのちを守るためだからです。



## 年間第 17 主日 (マタイ 13:44-52)

神の国の働きを新しいものからも古いものからも見る

「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」(13・52) 自分の倉から新しいものと古いものを取り出し、どちらからも天の国のことを自在に話せる。これがまことの学者です。この世の中に数え切れないほど学者がいても、天の国のことを学んだ学者は限られています。

7月25日は聖ヤコブの祝日でした。聖ヤコブの霊名をいただいた人で皆さん誰を思い出しますか？まずは田平出身の山内豊神父様を思い出してください。今年は25日に豊神父様の住まいを訪問して、お祝いの品を渡し、一緒にミサをささげてきました。いつもは一人でささげるミサを中田神父と教会役員とが一緒にささげたので、とても喜んでおられました。

それはそうだろうと思います。私も政府の緊急事態宣言の期間、教区本部の通達に従って個人でミサをささげていました。「主はみなさんと共に」と唱えても誰も返事のないミサです。「主よ、あわれみたまえ」と自分で言って、「主よ、あわれみたまえ」と自分で答えるミサです。私はせいぜい二ヶ月くらいでしたが、豊神父様は引退してから10年、15年、忠実にささげてくださいました。一緒にミサをささげながら、頭の下がる思いがしました。

ミサが終わってから、しばらく豊神父様が思い出話を語ってくださいました。私たちがまったく知らない原爆投下から半年後の浦上と大浦の様子から、私が知っている時代の話まで、自在に引き出しから出して話してくださいました。それはすべて、神様が豊神父様を導いてくれた信仰の歩みでした。どの話からも、神父様が司祭になって神様を証する材料になっていました。

私は山内神父様に、イエス様が言う「天の国のことを学んだ学者」の姿を見ました。思い出話の中で一つ紹介しませんでした。豊神父様が司祭になるにあたって、「天の国のことを学んだ学者」に育っていたことを伺わせる思い出を語っていました。

豊神父様は大神学校の最終学年になって、「考えに考えた結果、私は司祭になる自信がありません」と、霊的指導を8年間つきっきりでしてくれたカナダ人の司祭に打ち明けたそうです。それに対してカナダ人の霊的指導司祭(おそらくツルデル神父様だと思います)は次のように言ったそうです。「だったら司祭になりなさい。」その場に居合わせた人が気づいたか分かりませんが、その思い出を語りながら、「あの時『だったら司祭になりなさい』と言ってもらったおかげで、こうして司祭叙階60周年を迎えることができました」と感慨深げに振り返っていたのを私は見逃しませんでした。

私も、今50歳を過ぎて、その意味が分かります。「司祭になる自信がない」自信がないほうが、むしろ司祭に適しています。「自信がある」

という人は得てして成功しないからです。自分の能力を過信せず、いつも慎重に司祭職を果たす、用心深い人。自分の能力ではなく、「弱さの中に働く神の力」を信じて生きる人。そのような人をイエスは弟子として求めておられるのです。

歳を取った人の話に、中田神父はあまり興味がありませんでした。そもそも歳を取った人のどこが優れているのか、理解できていませんでした。記憶力も、瞬発力もない。けれども自分がかつて煙たがっていた中年になった時に、この歳にならないと語れないことがあるし、ここに辿り着かないと気づかないことがあると、納得したのです。

「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」40年前の体験に良い味付けをして、天の国のこと、信仰を生きる人のことを語る材料にできる。今若い人のあいだで猛烈に流行していることの中に、天の国のこと、信仰を生きている人のことを語る材料を見つけることができる。30代、40代でも、できなかつたかも知れません。それが今少しだけできるようになった。豊神父様の年代になる時が、私は楽しみになってきたのです。

私たちはそれぞれ「古いもの」を持っています。「古いもの」を持っていない人もいますが、ほとんどの方が「古いもの」を持っています。その「古いもの」は、倉から取り出した時に、神の国のことを何か感じさせるでしょうか。「古いもの」でも、取り出せばいつでも神の国の何かを感じさせる。そういうものは貴重です。いつまでも大切に保管してください。

一方で私たちは、「新しいもの」を持っています。新しい味付けで生まれ変わったものも、「新しいもの」に含まれます。新しい世代の人は「カセットテープ」を知らないので、それを見た時に「新しい何か」だと考え、今カセットテープは静かなブームになっているそうです。そう言えば、スペインのサンチアゴ巡礼も、500年前にすたれて誰も見向きもしなくなっていました。21世紀になって、最盛期だった年間50万人の巡礼者に迫る勢いなのだそうです。ちなみに、「サンチアゴ」とは「聖ヤコブ」のスペインでの呼び名で、聖ヤコブにささげられた壮麗な大聖堂への巡礼を「サンチアゴ巡礼」と呼びます。

私たちの中になる「古いもの」と「新しいもの」が、倉から引き出される時、いつも「天の国のことを知らせる道具」でありたいものです。もっと言うなら、私たちが大切にしまっているものの中に、「天の国のことを知らせる道具」以外のものがあるとすれば、それらに執着すべきではありません。私たちが大切にしまふべき「古いもの」「新しいもの」は、「天の国のことを知らせる道具かどうか」いつもこの基準で整理整頓したいものです。



## 年間第 18 主日 (マタイ 14:13-21)

聖体をいただく私たちはイエスの手の中にあるパン

「弟子たちは言った。『ここにはパン五つと魚二匹しかありません。』」  
(14・17) 人里離れた場所に五千人も人が集まって、弟子たちは食べ物  
の心配をしています。しかし弟子たちは、イエスの起こす奇跡によっ  
て、自分たちがいる場所の見方が変わっていきます。

夏休みをいただいて、県内で小さな巡礼をしようと思います。最初  
は、もっと俗っぽいことを計画していましたが、一日千人を超える新型  
コロナウィルス感染者が出る状況では、計画は断念せざるを得なくなり  
ました。計画は大幅に狂いましたが、最終的に巡礼に行くことになった  
のは、神様の考えがあったのでしょうか。

巡礼地と言えば、焼罪殉教公園も立派な巡礼地です。最近カテキス  
タ委員会がかつて製作したという「カミロ・コンスタンツォ神父の殉教」  
を扱った紙芝居を手にしりましたが、それによると海に突き出したあの丘  
は、対岸の平戸の人々から、カミロ神父様の火あぶりの刑がよく見える  
ようにと選ばれたのだそうです。実際にあそこが寸分違わぬ場所かどう  
かは分かりませんが、説明は理に適っていると思います。

この世の中には、「廃墟」に特別な興味を持つ人がいると言います。  
「廃墟女子」という言葉すらあるそうです。廃墟もかつては人が住み、  
生活感があり、活気に満ちていましたが、そののちに廃れた場所です。  
表面的には薄汚く、誰も寄せ付けない雰囲気を持っています。

しかしある人たちはその廃墟に、人間生活を読み取ります。廃墟に  
人間の営みが読み取れることで、おそらく廃墟を訪れる人にとって価値  
が上がるのでしょうか。廃墟ですらそうですから、焼罪公園についてはな  
おさら当てはまるのではないのでしょうか。

7月の中旬、けいこの時間に小学校上級生の子供達を連れて焼罪殉  
教公園に向かいました。この時カテキスタ委員会が作成した紙芝居も持  
って出かけました。最初に祭壇の前に子供達を集めましたが、子供達に  
とっては緑に囲まれた公園にしか見えなかったでしょう。紙芝居を読み  
終え、もう一度公園を見渡した時に、子供達にも少し、この場所が違っ  
て見えたはずです。対岸の平戸ザビエル教会とその周辺からこの丘が見  
える。その意味が、違って見えたと思います。

福音に戻ります。弟子たちは集まった大群衆の身体的疲労を心配し  
ていました。群衆をこのまま残らせるのは、群衆を危険にさらすことにな  
ると考え、解散を命じてくださいとイエスに促すのです。しかしイエ  
スにはたとえどんな場所でも、イエスがおられる場所は豊かであることを  
証明します。

そのためにまずイエスは、これから起こることをあらかじめ言葉で  
知らせました。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を  
与えなさい。」(14・16) 弟子たちはイエスの復活後もこの言葉を思い  
出したでしょう。イエスが共におられるから、弟子たちは群衆に食べる



ものを与えることができるのです。

それでも弟子たちは目の前の心配が拭いきれません。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」(14・17) 直前のマタイ 13 章を重ねて考えると、「種を蒔く人」のたとえで蒔かれた御言葉が豊かに実を結ぶことを学んでいたでしょうし、「からし種」と「パン種」のたとえでも、あるいは「天の国」のたとえでも、大切なのはイエスが誰であることを理解し、学んだ者として留まることだと気づいているはずです。それなのに、五千人の群衆という「大きな試練」が大切なことを忘れさせていました。

「それをここに持って来なさい」(14・18)。外国語の翻訳も参考にしてもう少し言葉を付け加えましょう。「それをここに、わたしの所に持って来なさい。」イエスの手の中に、五つのパンと二匹の魚が置かれた時、豊かになります。イエスと繋がりを持ったなら、その土地やその人は豊かになります。

弟子たちはたんに五つのパンと二匹の魚の奇跡を見たのではありません。「イエスの手の中に置かれた五つのパンと二匹の魚の奇跡」を見たのです。私たちは当時の人里離れた場所に立ち会うことはできませんが、イエスの手の中にある五つのパンと二匹の魚を想像することができます。イエスの手の中にある時、それは五つのパン、二匹の魚のままでは終わらないのです。

私たちも、同じ経験ができないでしょうか。私たちが同じ経験をするとしたら、このミサではないでしょうか。そしてミサの中でイエスが五つのパン、二匹の魚となってくださり、私たちを満たし、私たちを通して驚くべきわざを行うのです。

私たちは日曜日ごとにここに集まっています。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」弟子たちが言う通り、ここには大勢の人を食べさせる食事はありません。けれども私たちがいただくパンは、司祭が、イエス・キリストの身分において父なる神におささげしたパンです。イエスの手の中に置かれたパンは、いつも大きな働きをします。私たちが日曜日ごとに御聖体に養われるなら、私たちが大きな働きをする手足となれるのです。

人里離れた場所で、あっと驚く教えを学んだ弟子たちのように、イエスは私たちにも呼びかけます。「あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」(14・16) 今度は私たちが「イエスの手の中にあるパン」となって、絶望の中に希望を、悲しみの中に喜びを、暗闇の中に光をもたらしましょう。私たちが小さなパンとなって、人に配られるために出かけましょう。私たちはここ、イエスが招かれたこの聖堂で、人に働きかけるのに十分な力を受けたのですから。



## 年間第 19 主日 (マタイ 14:22-33)

イエスに信頼して一歩踏み出す。二歩踏み出す。

8月9日はもちろん長崎原爆の日です。被爆から75年、体験した人たちが切に願う核兵器廃絶と、戦争のない平和な世界を、集まっている皆さんで心から願いましょう。

先週巡礼に行ってきました。このご時世ですから、県外ではなく、雲仙と大村市内を巡礼してみました。しかし今となつては、「長崎県内だから県外よりも安全」そんなことはとても言えなくなっており、どんな行動も責任重大だと改めて思いました。

私が考える「雲仙」と「大村」は、やはり殉教を思い出させる地です。205福者殉教者に数えられている福者アントニオ石田と雲仙の殉教者にささげられた雲仙教会をまず訪ねました。かつての私の記憶とは少し違って、緑が生い茂った景色になっていました。

次に雲仙地獄のそばに建てられたキリシタン殉教碑を訪ねました。ここは特にパウロ内堀とその家族の物語が伝えられています。訪ねた時、人数は少なかったですがある程度の人が雲仙地獄の周回道路を回っていました。しかし殉教者を尋ねる旅の人はいませんでした。

雲仙を離れて、大村の殉教地を訪ねました。いくつか回りましたが、その中で放虎原殉教地と関連する史跡を紹介したいです。郡崩れのキリシタンのうち131人が放虎原殉教地で処刑され、キリシタンは復活を信じていると知っていたので首と胴体を別々に離して埋められました。しかも首は塩漬けにしてさらし首にされたそうです。それぞれゆかりの土地の首塚、胴塚、獄門所跡に記念碑やマリア様が置かれていました。

雲仙の殉教地は、有料とは言え駐車場の心配はありませんでした。大村では駐車場に大変苦勞させられました。放虎原殉教地は結果的に駐車場があったのですが、ロープが張ってあって、駐車は遠慮しました。それからようやく駐車場所を見つけ、あとはひたすら歩いて回ります。この日、道に迷った関係もあって、雲仙と大村で15キロも歩きました。

さて福音朗読に戻りましょう。夜明け頃、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに來ます。弟子たちはイエスを「幽霊」と見間違え、恐怖のあまり叫び声を上げました。イエスが弟子たちに話しかけてようやく弟子たちは落ち着きを取り戻します。

そこへペトロが勇気を出して動き出します。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」(14・28) 私はこれまで、単にペトロが「水の上を歩いてイエスへの信頼を表す」という物語としか考えたことがありませんでした。

しかし今回は違う見方が可能だと思っています。ペトロの行動は、「イエスへの信頼が揺らぐことがなければ、人はあっと驚くことができる」とそのしるしとして物語を読むことができるとしています。

先週私は二つの殉教地を巡ってきましたが、「偉いなあ」「すごいなあ」とは思うけれども、いざその場面に置かれたら自分に同じことが

できるかと問われたら、無理だと思いました。殉教地に立ち、殉教についての説明を読んでも、自分にそれができるとはとても思えませんでした。

ペトロは、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」と言います。水の上を歩くなんて、ふつうでは思い付きもしないことです。けれどもペトロは、「イエスへの信頼があれば」この前提であれば可能だと考えたのです。本来なら一歩踏み出すことも不可能ですが、イエスへの信頼があれば、一歩目を踏み出すことができるということです。

殉教者たちの勇敢な行為もまた、一歩目を踏み出すのが困難なのではないでしょうか。一歩踏み出すことで、すべてをささげなければなりません。その勇気は、イエスへの信頼からしか出てこないのです。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、『炎』の上を歩いてそちらに行かせてください。」

ペトロの話に戻ると、「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、『主よ、助けてください』と叫んだ」（14・30）とあります。脇目も振らず、微塵も疑わず、一歩目を踏み出す。それはペトロにとっても初めは難しかったのです。

殉教者が示した勇気がどれほどであったか、これで分かります。怖くなり、絶望に沈みかけるなら、殉教の栄冠は与えられません。常に死と向き合ってきた迫害時代のキリシタンは、イエスを目で見ている時代の人々にも決して負けない信仰の持ち主でした。

私たちがイエスに向かって踏み出した一歩はどのようなものでしょうか。洗礼を受けて神様の子供となり、一歩を踏み出しました。堅信を受けて、大人の信者として一歩を踏み出しました。結婚の秘跡を受けて、愛と忠実を尽くすことを誓いました。司祭に叙階されて、修道者として誓願を立てて、一歩を踏み出しました。それから二歩目、三歩目はどうなっているのでしょうか。

ペトロは強い風に気がついて怖くなり、それでも「主よ、助けてください」（14・30）と叫びました。来なさいと呼んでくださるのもイエスです。「助けてください」という叫びにすぐに手を伸ばして捕まえてくださるのもイエスです。一歩目はすでに踏み出しているはず。これからもイエスの差し出す手に信頼を寄せて、次の一歩を踏み出すことにしましょう。



## 聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

あなたは最初に何を声高らかに叫ぶ

2020年の聖母被昇天の祭日を迎えました。今年、県外から里帰りしている方とその家族、県外にお出かけになった方とその家族には、8月15日16日のミサ参加を控えてもらいたいと依頼しています。申し訳ない気持ちでいっぱいの中、ミサを続けております。

今年の聖母被昇天で、私は次の箇所を取り上げたいと思います。「エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。』」(1・41-42) エリサベトは、マリアに与えられた栄誉を、声高らかに言うのです。

私たちは今年、新型コロナウイルスの影響でさまざまな制約を強いられています。その一つは、「大声を出さない」ということで、教会では聖歌をできるだけ控え、歌う時も大きな声で歌わないように気を付けています。これはもちろん、本来の姿から遠く離れています。

安倍晋三首相は8月9日、長崎市内で開いた記者会見で、新型コロナウイルスの全国的な感染拡大に関し、緊急事態宣言の再発令に慎重な考えを示しました。その一方で、「この半年で得られた知見をフル活用し、感染予防や重症化予防に万全を期す」と語ったうえで「社会経済活動との両立を図る方針に変わりはない」と強調しました。

ただ、両立と言えるのか、疑問もあります。お盆期間の帰省について、帰省の際は「3密」の回避や大声で話さないなど「基本的な感染防止策を徹底するようお願いする」と呼びかけています。無理を承知で、両立の旗を振っていないのでしょうか？

こうした中で、エリサベトの態度は、私たちにとって希望を持たせるのです。「エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。」声を大にして、喜びいっぱいの気持ちで、マリアを讃えたのです。マリアを通して、自らに働かれた神のあわれみといつくしみをも讃えたのです。

これが、本来あるべき姿でしょう。そして、この姿に、私たちが声高らかに言う「順位」についても教えが込められています。私たちは、いつか大声を出してよいその時が来たら、まず声高らかに叫ぶのは、神への感謝、神の計画を讃えることなのです。

政府は、大声を出していいですよとなった時、最初に何を考えているのでしょうか。私たちは知っています。この辛い時期を乗り越えて大声を出せるようになった時、神様を賛美するのです。神への賛美を最初に大声で唱える人が、天に上げられたマリアに倣う人なのです。

聖母被昇天の今日、心ならずもミサ参加を見合わせてくださいとお願いした方々もおられます。ぜひミサの説教を持ち帰って、私たちカトリック教会の新型コロナウイルスの後に大声で言い表す物は何かを届けてください。エリサベトを訪ねたマリアに、私たちも見倣いましょう。



## 年間第 20 主日 (マタイ 15:21-28)

もっと食い下がって願い求めなければならない

聖母被昇天のミサを終えての日曜日です。少しずつでいいから、暑さも和らいでほしいものです。ちなみに来年の聖母被昇天は日曜日に当たっています。また、昨日の聖母被昇天と、今日の年間第 20 主日は、もしも聖堂内の人数がオーバーしたときのために、リモートの部屋を用意してみました。緊急の措置ですが、定員オーバーした人、堂内で具合が悪くなった人や乳幼児のいる方も含め、活用できたらなと思っています。

福音朗読に戻りましょう。カナンの女性が、自分の娘の苦しみを取り除いてくれるように願います。これは母としてのなりふり構わない熱意の表れでしょう。ところがイエスは、原理原則をまずは示します。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」(15・24)。

原理原則であっさり引き下がる人はまずいないでしょう。特に無理を承知でお願いしている人は、原理原則で無理が通らないことは十分承知しています。カナンの女性は、いわば見ず知らずの、畑違いのイエスにお願いをしているからです。

イエスはさらに手厳しく、女性の願いを斥けます。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(15・26)。自分たちを「子犬」扱いされると、さすがに人によっては背を向けるかも知れません。「なんだ。こんな人だったのか。」そんなセリフを残して、去って行く可能性もありました。

それでもこの女性は食い下がります。原理原則で拒否され、さらに手厳しい言葉で拒否されたのに、彼女は食い下がりました。母親だから、ということもあるでしょうが、私は彼女が、「異邦人だったから」食い下がることのできたのかなと考えました。同じユダヤ人であれば、イエスの杓子定規の態度、人を食ったような態度に嫌気をさし、ここまで食い下がれないかも知れません。

カナンの女性が「部外者」「外の人」であれば、「ユダヤ人」は「中の人」でしょう。もっと言えば、洗礼を受けた私たちもまた「中の人」と言えるかも知れません。中にいる人たちは、自分たちがお世話を受けることをある程度当然のことと考えているので、もしこの時のイエスのように辛く当たられるとヘソを曲げ、「あの人がいる間は教会に行かない」ということになるかも知れません。

カナンの女性の食い下がる姿を、「中の人たち」である私たちは軽んじてはいけないと思います。私たちにとって当然と思えるようなお世話も、当然とは言えない人にとってはあり得ないほどの豊かなお世話なのです。そのことをカナンの女性は見抜いていた。だから、どんなにつれなくされても食い下がったのではないのでしょうか。

私たちは謙虚に、彼女の姿に見倣わなければなりません。私のちょっとした体験ですが、浦上の助任時代に結婚を予定していたカップルが、

予定を組んでいるのにいつまで待っても結婚講座に来てくれないケースがありました。実家に電話しますと父親が電話に出ました。「講座に来てくれないと結婚式をできなくなりますよ」と伝えると逆ギレされて、「お前はそれでも神父か。結婚式を挙げてくれるのが当たり前ではないのか。前の神父様はそんなに厳しくしなかったぞ。何様か。」もっとひどいことを言われましたが、この家族をどうやったら導けるか、一日頭を悩ませました。

その結果、次の日の朝ミサの後にその実家に行きまして、朝7時にチャイムを鳴らしました。父親が玄関に出てきました。少しきつく言い過ぎましたと謝りました。本心は、「なぜこちらが謝らなければならないのか」と思っていたのですが、一步引いてみました。

するとお父さんは「息子にもよく言い聞かせます」と言って、それでようやく結婚講座に来てくれることになり、無事結婚式を挙げたのでした。私は浦上に来たばかり、浦上の事情も、この家庭の事情も知らなかったもので、最後の最後まで食い下がることができたのだと思っています。

私たちはつい、受ける恵みを当然のことと思うことがあります。恵みを受けられないことを不当だと考えることがあります。けれども恵みはすべて神から無償で与えられるもので、私たちのほうに要求する権利はないのです。そうであれば、心からその恵みを求めている人は、食い下がる必要があるのではないのでしょうか。

「教会の中の人」である私たちは、恵みに対して食い下がる気持ちをいつの間にか失っているかも知れません。当然もらえるものをもらえなかったと言ってイエスを非難したり背を向けたり、いつの間にかそういう態度を取っていないのでしょうか。

私がりなり構わずイエス様の足もとにすがりついた、食い下がったのはいつ以来でしょうか。カナンの女性に見倣いたいものです。



## 年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

あなたに天の国の鍵を授ける

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。」(16・19) 宗教画では、鍵を手を持つ聖ペトロ、剣を持つ聖パウロという構図はよく描かれます。あらためて「鍵」について考える機会としましょう。

先日、お告げのマリアのシスター橋口ハセさんが亡くなりました。名前を聞いてピンと来る人はそうとう「お告げのマリア」ならぬ「お告げのマニア」です。出津の救護院という場所で観光のため訪れた方にド・ロ神父様がフランスから持ち込んだオルガンを弾いて、「いつくしみふかき」を一緒に歌いましょうと、オルガンの音色を聞かせ、母親から聞いたド・ロ神父様の思い出を語ってくれたシスターでした。

そのシスターが、8月19日、101歳で天国に旅立っていきました。往年の、オルガンを弾いている姿は、YouTubeで誰でも観ることができます。一目見ただけで、足踏みオルガンの素朴な音色に魅了されると思います。ぜひご覧ください。

私は直接、橋口シスターにお目にかかったことはありませんが、きっと出津教会、外海地区巡りで外すことのできない場所、出会いだっただのだと思います。すると、橋口シスターは外海地区の鍵となる人物だったのではないのでしょうか。

巡礼で訪ねてくる人と出津とをつなぐ鍵となる人、訪問者をド・ロ神父様とその時代につないでくれる鍵となる人。ド・ロ神父様を日本に送ってくれた神様につないでくれる人。それが橋口シスターだったのだと思います。橋口ハセと言うくらいですから、生きているうちにハセ参じたかったです。

福音朗読に戻りましょう。「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。」物理的な鍵を握っていても構わないのですが、私はペトロ自身が、天の国の鍵なのではないかなと考えました。

ペトロは信仰を表明した後、イエスが死と復活を予告したことに慌てて、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」(16・22)と遮ります。このようにペトロはまだ不完全ですが、その後もイエスの言葉を生きる土台「岩」にしていったのです。イエスの言葉に信頼を置いて生きる姿が、天の国の鍵ではないのでしょうか。

ペトロは、イエスから天の国の鍵を託されました。私たちがペトロに倣って、不完全な者ではあるけれどもイエスの言葉に土台を置いて生きようとするなら、私たちも天の国の鍵を授けられた者と言えるのではないのでしょうか。私たちの生き方が、生き方を探している人をつなぎます。

あなたが地上でつないだ人は、本当の生き方を見つけ出し、天上でもつながれます。101歳で亡くなったシスターが、見ず知らずの人々を

地上でつなぎ、その人たちの何人かは、イエスの言葉に土台を置いて生きるシスターを見て、天でもつながれていきます。私たちもペトロに倣い、身近な先輩に倣うことで、イエスから天の国の鍵を授けてもらえるのです。

私たちは、地上で何人の人をつなぐことができるでしょうか。イエスの言葉に土台を置いて生きる姿を通して、何人の人を地上でつなぐのでしょうか。それは召された生き方によって違うでしょう。ある人は、何の妨げもなく、地上の人々をつなぎ、天の国にもつなぐ生き方に召されます。

もしその招きを受けたなら、大切にしてください。101歳まで、命尽きるまで地上の人々をつなぐ生き方は、誰にでもできるものではないからです。大きな志を立てて、数多くの人をつなぐ鍵になりましょう。鍵は小さな存在ですが、とても大切な存在なのです。

年間第 22 主日(マタイ 16:21-27)





## 年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

後ろに回ってみて見えるものがある

「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。」(16・26) 全世界を手に入れるくらいの熱意で、自分の命を失わないように努力すべきだ。イエスのみことばを私はこのように理解しました。自分の命を守るために、どこから始めれば良いのでしょうか。

私は、教皇フランシスコが定めたラウダート・シ特別年(今年5月24日～来年5月24日)の期間に、日本の司教団が設けることとした「すべてのいのちを守るための月間」(毎年9月1日～10月4日)この呼びかけに応えることから始めたら良いのではないかと思います。教皇様は、「すべての命を守る取り組みが、結果的に自分の命を守る大切な一歩になるのだ」と私たちに行動を呼びかけておられると思うからです。

日本の教会は、司教団の決定を受けて今年から毎年9月の第一日曜日を「被造物を大切に作る世界祈願日」と定め、全国で一斉に祈り、各教区あるいは共同体の単位で具体的な行動を起こすことが求められています。このことについては、長崎教区報8月号の3頁目で、詳しく取り上げられています。どうか自宅に帰ったら、もう一度読み返してください。

田平教会は、8月の評議会でのこの点を取り上げ、「海岸清掃を行うこと」としました。どこの海岸かと言うと、田平教会のレンガを運んできた海岸です。私は土地の者ではありませんが、聞いた範囲ではこの浜に船でレンガを運び、二つの山道を利用して、片方を上り専用、もう片方を下り専用と決め、大人も子供も競ってレンガを運んだそうです。

このレンガを運んできた浜も、今は立ち寄ることが難しくなっていると思います。幸いに、下り専用にしていただ道からは浜に近づけるようですので、もう一度、この浜に下り立って、海岸清掃をしましょう。海岸の環境を少しでも知ること、すべての命が繋がっていて、おろそかにしてはいけないことに気づくと思います。

またこの清掃活動を通して、私たちの先祖が苦勞して運んだレンガ、苦勞して建てた聖堂の重みを感じ、いつかまた、上り専用の道についても、関心を深めるきっかけになればと思っています。

これから毎年、9月の第一日曜日に具体的な取り組みをすることになりますから、教会下の浜の清掃を毎年すれば、何か、田平教会の歴史の扉を開く道に通じるかも知れません。この時期は台風の季節でもありますので、あとは天気だけが心配です。

福音に戻りましょう。「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」(16・21) 弟子たちにはこの言葉が理解できません。あまりに悲觀的だからです。山上での光り輝く姿、ペトロ自身の信仰告

白「あなたはメシア、生ける神の子です」（マタイ 16・16）これらに照らし合わせても、とても受け入れがたかったのです。

「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」

（16・22）イエスを思う熱意からペトロはこう言いましたが、イエスに叱責を受けました。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」（16・23）イエスは復活の栄光まで、通るべきすべての道を尊いもの、かけがえのないものと見ていますが、ペトロはその視点を持ち合わせていませんでした。

私は、二度自動車学校のバイク教習に通っています。今になって思うと最初から大型バイクの教習に通っておけばよかったと後悔する日々ですが、このバイク教習は大変役に立ちました。バイクの教習は自動車の教習と比べ大きな違いがあります。それは、バイクは同じ一つの乗り物に乗って指導を受けることができないということです。

たとえばバイクの教官がお手本を見せて、それを見倣うとすると、生徒たちはそれを後ろからついて行ってまねることになります。また、教官は生徒たちの実技を後ろから眺めて、ここがいけないからこうなさいと、具体的に指摘することができます。後ろに付くことで、先を行く人の教えを学び取ります。後ろに回ることで、正しい方法を知るのです。

ペトロはイエスを遮りました。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」ペトロはイエスの見ているものを見ることができなくなっていました。それは、イエスの後ろに付かなかったからです。イエスの後ろに回らなければ、復活の栄光を受けるまでの正しい道を知ることはできなかつたのです。

「だから大型バイクの教習に皆さん行ってきなさい」と、私は言いたいくらいですが、必要ない人も多いでしょうから、気持ちだけ受け取ってください。人は、後ろに付かなければ正しく理解できない道もあるのです。後ろに回らなければ、先を案内してくれる人がどのように見ているのか見えないこともあるのです。

イエスが見ているように見なければ、私たちは自分の命を失うことになります。イエスが「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（16・24）と言うなら、いったん自分の考えを横に置いて、後ろに付かなければなりません。

イエスの後ろに控えて、イエスが見ているように見る努力をする。これは易しいことのように実は大変難しいことなのです。幸いに9月6日、海岸清掃をします。海岸清掃に出ることができない人は、身近な場所の清掃をしてみてください。最終的にすべての場所が海に繋がります。

自然環境の後ろに私たちは一度回ってみましょう。各自、命の背後にある自然環境を見ることで、自分の命がすべての命と繋がっていることをはっきり理解するでしょう。



## 年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

イエスの光に照らされるように忠告し、導く

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。」(18・15)「忠告する」とか、「戒める」というのはなかなか簡単ではありません。聞き入れてもらえる何かの手立てを、イエスのことばから持ち帰りましょう。

台風 10 号が迫っています。台風 9 号でも東側のモチノキが折れ、聖堂東側の瓦に当たって瓦を落としました。信徒会館から教会の石段に下りていく入り口にあった大きな梅檀の木も、根もとから折れました。今度の 10 号ではいったいどれだけの被害になるのか、気が気ではありません。9 号では幸いにステンドグラスを割られていませんが、どこか一カ所割れると、風が侵入して聖堂内は滅茶苦茶になるでしょう。

今晚私は、司祭館を諦め、信徒会館に寝ることにします。信徒会館で、台風が過ぎ去るまで、たくさん祈ろうと思います。小石が飛んで、ガラスを割りませんように。周りの木が、被害をもたらす凶器になりませんように。生向のボート、頼る人がなくて浮かべたままですが転覆しませんように。そして最後に、どこからかお中元の残り物の缶ビールが飛んできますように。いろいろお祈りしたいと思います。

福音に戻りましょう。「忠告する」のは容易ではありません。「お前に言われる筋合いはない」とばかりに、拒否されることも考えられます。最近では司祭が説教することさえ、「NHK ニュースを見たぞ。お前に言われる筋合いはない」と言われそうです。それでも、心からの忠告を聞いてもらう何かの手立てがあるはずです。

こう考えました。「忠告する」という行為が、福音朗読の結びの「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(18・20) ことと繋がるようにすれば良いのではないのでしょうか。「忠告する」場面が、「二人または三人が、イエスの名によって集まっている」そういう場になっていけば良いわけです。

前にも話したことのある失敗談ですが、今回も例に引こうと思います。今は司教様になった白浜司教様が高校三年生で神学校の生徒会長だった時、やんちゃだった私は後輩を連れて屋根裏から屋上に上がり、遅くまでおしゃべりしたことがありました。消灯時間過ぎて抜け出したのですから当然規則違反です。話し疲れて帰ることにしたら、屋上と屋根裏をつなぐ扉のところで、白浜先輩が待ち構えていました。

40 年前の話です。当時ですから「グー」で殴られても不思議ではありませんでした。心の中では覚悟していましたが、白浜先輩はこう言ったのです。「話は終わったね？もう遅かけん、戻って休まんね。」私にとっては「グー」で殴られたくらい白浜先輩の言葉は刺さりました。もちろんそれ以降は、同じ真似はしませんでした。

当時の白浜先輩の「忠告」は、どうして私の胸に刺さったのでしょうか。反抗期の中学生の私に、

そんなことは関係なかったと思います。そうではなく、私が先輩から忠告を受けた時、聖書の言葉が実現していたからだと思います。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

屋根裏で引き留められ、注意を受けた時、真っ暗だったはずですが、忠告を受けた私たちは照らしを受けていたのです。イエスの光で照らしを受け、過ちが明白になり、もはや説明の必要も無いほど、理解できたのです。

当時から「白浜聖人」とまで言われていた先輩のおかげで、そこにイエスがおられたのです。正しい道を選び続けなければいけない。たくさんの言葉は必要なくて、そこにイエスがおられるだけで、言うことを聞き入れ、立ち直ることができたのでした。

忠告することは難しい務めです。忠告されたことをいつまでも根に持つ人も現れるかも知れません。それでも、私たちは兄弟への忠告を、イエスが示す愛に倣って行いましょう。真に忠告する戒めは、滅びを望まぬ神の愛の表れなのです。

年間第 24 主日(マタイ 18:21-35)



## 年間第 24 主日 (マタイ 18:21-35)

億千万回兄弟を赦すことができるか

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」(18・21) 当時のユダヤ社会では、三回赦してあげればそれは最上級の寛大さを示すことでした。七回は、それを上回る数でしたが、イエスはそれでもご自身の教えに到達できていないと答えます。

先日、長崎カトリックセンターで司祭集会が開かれ、前教区会計の不手際について集会を開き、今後の方針を話し合いました。集会は紛糾しまして、ほとんど何の結論も得られなかったのですが、私にとって収穫もありました。

それは、私が長崎教区で心の清い司祭の代表だと思っているある先輩が、こんなことを言っておられたのです。「私は教区内の司祭の不祥事に心が痛み、ミサで祭壇に立つのが恥ずかしい。できることなら逃げ出したい。それでも、自分の十字架を背負って、祭壇に立っています。

神の教会を、この世のもので健全な状態に立て直そうと考えるから、こんな悲惨なことになったのではないですか？長く教区会計を果たしてくださった先輩は、この世のもので神の教会を健全な状態にしようなどとは決して思わなかった。そこが根本的な間違いでしょう。」

この言葉を聞いて、「なんの实りもない、ただのガス抜き集会だったか」と失意のうちに帰るところでしたが、長崎教区もまだともしびは消えていない、捨てたもんじゃないと思ったのでした。教区報で掲載された不名誉な記事の内容は、残念ながら事実です。すべての教区司祭が、これから責任を負うことになります。

福音朗読に戻りましょう。たとえ話の王の前に引き出された家来は、「億千万」の借金を抱えていました。返せるはずがありません。それなのに王は、この家来を赦しました。この家来に赦される事情があったからではなく、王が一方的に赦しを与えてくれたのです。「億千万」の借金は、一般的には返済不可能な金額です。

ここで家来が学ばなければいけなかったのは何でしょうか。私は、王に対する信頼回復に努めることだったと思います。王に対してと言うより、王が導いている「国民」に対して、どうやったら信頼を取り戻せるか。この一点に絞って考えるべきだったと思うのです。

ところで、この「億千万」の借金を王に背負させた家来は、外に出て自分に百デナリオンの借金のある友人に出会うと、「捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った」というのです。社会的な制裁を受けた人たちがしばしば、「懲役何年、執行猶予何年」という判決を受けたりしますが、この「億千万」の借金をした家来も、いわば執行猶予の状態だったはずですが、それなのに、友人の借金の返済を強要したことで、かえって自分で自分の首を絞めてしまったのです。

この家来が取るべきだった行動は、この執行猶予中に、どうやって

王の信頼を回復するか、どうやって国民への信頼を取り戻すかでした。友人と会った時、どうやって信頼を取り戻すかだけを考えていたら、あんなまねはしなかったでしょう。

今回、長崎教区の前教区会計も、これから信頼回復の日々を歩まなければなりません。長崎教区は関係者を切って捨てませんでした。切って捨てたなら、その他の司祭はそれ以上責任を問われなかったでしょう。けれども切って捨てなかった。それはつまり、すべての教区司祭が、教区長と教区民すべてに、信頼回復のための努力をせよという神からの呼びかけだったのだと思います。

田平教会の周囲を一周しますと、400mあります。この前歩いて、歩数を数えたら、600歩で一周しました。これから必ずとは言いませんが、周囲を十周歩きますと6000歩です。一年365日、毎日は無理なのでその三分の二、240日歩くと144万歩です。まあ、あと何年居るかは分かりませんが、億千万歩に到達するにはざっと174年が必要です。信頼回復の道を一步ずつ、174年かけて取り戻すつもりでいます。

ついこの前も、有名人が逮捕されまして、それまでの活躍と社会貢献が何だったのかと問われました。転落するのはあっという間ですが、信頼を回復するためには私のたとえで言えば174年必要です。しかも、他のことには目もくれず、自分に借りのある人もいるかも知れませんが、それらを横に置いて、たった一つ教区民の信頼を取り戻すことだけに注力して174年必要です。一步ずつ前に進みたいと思います。

「何でそこまで泥被らないといけないのか？」という意見は今でもくすぶっています。けれども教区民の信頼を回復する歩みは、関係者だけの働きでは不可能です。教区司祭全てが、誠実に努力することが、今週の福音から学ぶ教訓です。

「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(18・35) 億千万歩歩き通せないかも知れませんが、私が倒れて眠りにつくまでには、私の兄弟である司祭を赦せるようになれたらと願っています。



## 年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

どの時点で恵みにあずかっても感謝できる人になる

「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」  
(20・16) およそ 30 年、身近な例にうまく当てはめることができずに  
いましたが、今回はうまく当てはまりそうです。

先週、司祭館の床の間のある部屋から「骨壺」が出てきたと、前振り  
だけしておりました。賄いさんから「床の間の部屋を掃除すると、何  
だか肩が重くなるとかずっと見られている気がする」と言われたのです  
が、「そんなことあるはずがない」と相手にしてなかったのです。

そうしてしばらく経ってから、大声を上げて助けを呼ぶので泥棒  
か？と、床の間の部屋を見に行きましたら賄いさんが腰を抜かし、床の  
間を指差して座り込んでいました。「出た！」と言っているのです。

そこで床の間の引き出しを開けますと、何と「骨壺」が出てきまし  
た。さすがにこんな物は置いておけないと思い、風呂敷に包んで納骨堂  
に移動しました。あとで中を確かめました、何も入ってなかったの  
でひと安心です。誰が、どんな目的で置いていたのかは分かりません  
でした。もし皆さんで心当たりの方がおられたらご一報ください。また、近  
いうちに使う予定のある人も、ご一報ください。格安でお分けします。

さて今週の福音朗読、最後の結びは「後にいる者が先になり、先  
にいる者が後になる」となっています。私は正直、この部分が十分消化で  
きずにいました。30 年ものあいだです。

今年は突破口が見えた気がします。夜明け前に雇われた人から始ま  
って、最後は夕方五時に雇われた人までいたわけですが、「もう一度雇  
われることになったらどうだろう？」と考えてみたのです。

今回の一連の騒動の後に、もう一度広場で雇われることになったら、  
どうだろう？夜明け前に雇われ、一時間しか働かなかった人より多く賃  
金をもらえるだろうと思っていたのに、彼らと同じ一デナリオンしかも  
らえなかった人は、次の日、また夜明け前から仕事を求めて広場に立つ  
のだろうか？そんなことを思ったのです。

皆さんはどう思いますか？「最後に来たこの連中は、一時間しか働  
きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、こ  
の連中とを同じ扱いにするとはい。」(20・12) ここまで不平を言った人  
たちが、次も夜明け前に立つのでしょうか。十中八九、この人たちは夕方  
ギリギリにしか、広場に立たないのではないのでしょうか。

一方で、五時頃雇われ、一時間しか働かなかった人たちは、次に雇  
われる時にもっと早く広場に立つのではないかと思うのです。ずる賢い  
者もいるかも知れない。皆が皆ではないでしょうが、主人の寛大さに心  
を打たれ、一日分の賃金をもらえるなら、何もしないでいるよりは、ぶ  
どう園で汗を流そう。そんな人が出てくると思うのです。

夜明け前から働いて、結局賃金に不平を漏らした人は、「夜明け前  
から立っていても馬鹿らしい」と思い、一時間しか働かなかったのに主

人の寛大さに触れた人々は「早く広場に立って、この前のお礼にもっと長く働こう」と思う。これが、「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」ということなのではないでしょうか。

同じことは、洗礼をいつ受けたかということにも考えさせられます。今の時代、残念ながら幼児洗礼を受けた多くの人が、教会から姿を消しています。彼らは「夜明け前から」主のぶどう畑に入るのを許された人々です。ある人はこう言って、来なくなりました。「小さいうちに、一生涯ぶん祈りをしたから。」祈りがもたらす実りを味わう頃には、もう教会から遠ざかってしまいました。

一方で、成人してから洗礼を受ける人、結婚を機に洗礼を受ける人がいます。彼らが皆教会に留まっているわけではありません。私もそれは認めます。ただ、後で洗礼を受けた人は、受けた洗礼の恵みに感謝しています。自分で責任を持って洗礼を受けたので、自分が教会の家族に入れてもらったことを感謝しているのです。

できるなら、「結婚信者」とか「新信者」という言葉は無くなればいいなあと思っています。神の子となり、神から永遠の命に招かれ、神の家族とされた。いきさつはそれぞれですが、夜明け前に恵みを受けた人も、あとで恵みを受けた人も、主であるイエスの前で互いに喜び合える教会家族でいたいなあと心から願っています。

福音朗読に重ねて考えましょう。もう一度、洗礼を受けるとしたら、あなたはどのように行動しますか？「生まれてすぐに洗礼を受けるのは割に合わない。もう一度やり直すなら、人生の終わり、日暮れ前に受けて滑り込みたい」と思いませんか。それともやはり生まれた時に洗礼を受けておきたいと思いませんか。

今日、本来なら「福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭」が焼罪（やいぎ）殉教公園で行われる予定でした。カミロ神父様は、燃えさかる火の中で殉教しました。ご自身の信仰と、私たちの信仰を、火で精錬するために、殉教してくださいました。カミロ神父様がもし、もう一度人生を与えられるとしたら、「洗礼は亡くなる直前で十分。殉教などとんでもない」と思うのでしょうか。

私をご本人ではありませんが、もう一度人生を与えられても、生まれた時に洗礼を受けて、殉教を求められたら喜んで殉教したのではないかと思うのです。「最後に回心したこの連中と、火に焼かれて命をささげた私たちとを同じ扱いにするのですか？」殉教者がこんなことを言うはずがありません。

最後の一人にまで寛大に恵みを与えてくださる神の思いを、もう一度考えてみましょう。「燃えて輝くともし火」（ヨハネ 5・35）となってくださった福者カミロ・コンスタンツォ神父様の思いを、もう一度考えてみましょう。だれもが、洗礼に招かれた境遇を感謝できる人になれますように。だれもが、違った環境で洗礼に招かれた人を喜べる人になれますように。





## 年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

外に立つ人に近づく時、イエスに会わせてもらえる

「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」(21・28)。ぶどう園の所有者が二人の息子にかけた声です。二人の息子は、「つらい場所で働きたくない」単純に、そのようなことだったかも知れません。父親の思いを探ってみましょう。

本日、午後3時から、江里山の移住記念碑前で、田平教会の基礎となってくれた移住者たちの記念ミサをおこないます。9月の「世界難民移住移動者の日」に、移住者である先祖たちに思いを馳せるのはふさわしいことです。

せつかくですので、与えられた福音朗読を移住者のことも少し念頭に置いて考えると、「ぶどう園」で息子たちが働けば、当然ぶどう園の労働者に出会うことに繋がっていきます。父親の思いはそこにあるのではないのでしょうか。息子たちがぶどう園の労働者に出会えば、労働者を通して父親をより深く知り、愛することができるようになるはずです。

今年の「世界難民移住移動者の日」に当たって発表された教皇様のメッセージも、これとぴったり当てはまります。教皇様は、難民に思いを寄せ、「『服は破れ、足は汚れ、顔はゆがみ、からだは傷つき、ことばも通じない彼らの中に、主を見ることが難しかったとしても』、避難民はわたしたちを主に会わせてくれるのです」と仰っています。わたしたちはこの司牧的な課題に具体的な行動で応える必要があります。教皇様が発表されたメッセージから、ぶどう園で息子たちが労働者と出会ってほしいと考えたたとえ話の父親、また父である神の思いに触れることにしましょう。六つの具体的な行動で弱い立場にある人たちに近づくように促しています。以下、引用いたします。

**理解すること。**理解するためには、知らなければなりません。イエスご自身がそれを教えておられます。「話し合い論じていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」(ルカ・24・15-16)。移住者と避難民のこととなると、話題に上るのは数ばかりです。しかし、そこにいるのは人なのです。彼らに会えば、彼らを知るようになります。彼らのこれまでの歩みを知れば、彼らを理解できるようになります。わたしたちがこのパンデミックの中で耐え忍んできた明日をも知れない状況は、今まさに避難民が抱えている状況です。

**仕えること。**仕えるためには、寄り添わなければなりません。善いサマリア人のたとえです。「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見てあわれに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した」(ルカ 10・33-34)。恐れと偏見は、わたしたちを他者から遠ざけ、「寄り添う」こと、愛をもって仕えることを妨げます。仕えるために近くにとどまるということは、単なる義務の先にある行為です。弟子たちの足

を洗う際、イエスはそのもっとも偉大な模範を示してくださいました。上着を脱いでひざまずき、手を汚されたのです(ヨハネ 13・1-15 参照)。

和解すること。和解するためには、耳を傾けなければなりません。神ご自身が、そのことを示しておられます。神は御子をこの世に遣わすことにより、人間の耳をもって、人類のうめきに耳を傾けたいと思われたのです。和解して相手を助ける愛は、耳を傾けることから始まります。現代世界において、謙虚に注意深く耳を傾けることだけが、真の和解をもたらすことができるのです。避難民というもっとも脆弱な立場にある人々と、ひどく病んでいるわたしたちの地球の叫びに耳を傾けることで、隣人、多くの見捨てられた人、自分自身、そしていつくしみを絶えず与えてくださる神と和解する機会を得たのです。

ともに成長すること。成長するためには、共有しなければなりません。初期のキリスト教共同体は、共有することをその本質的な要素としていました。「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだという者はなく、すべてを共有していた」(使徒言行録 4・32)。神は、この地球の資源がごく一部の人のためだけに活用されることをお望みになりません。だれも排除することなくともに成長するためには、共有することを学ばなければなりません。今回のパンデミックは、わたしたち皆が、同じ舟に乗っていることを思い起させました。真に成長するには、もっているものを共有し、ともに成長しなければなりません。

促すこと。促すためには、巻き込まなければなりません。それは、まさにイエスがサマリアの女になさったことです(ヨハネ 4・1-30 参照)。主は近づき、耳を傾け、心に語りかけ、それから真理へと導き、良い知らせを告げる人に変えておられます。他者のために尽くしたいと思うあまり、相手の豊かさに目がいなくなるがよくあります。助ける相手を真に促したいと思うなら、その人を巻き込んで、その人自身をそのあがないの主演にしなければなりません。今回のパンデミックは、共同責任がいかに重要であるか、そして、軽視されがちな人々も含め、あらゆる人が貢献してはじめて危機に立ち向かえるということに気づかせてくれます。

築き上げること。築くためには、協力しなければなりません。神の国を築くことは、すべてのキリスト者に共通の使命です。だからこそ、嫉妬や不和や分裂への誘惑に負けずに協力することを学ばなければなりません。わたしたちの共通の家を守り、神の原初の計画にいつそう近づけるためには、だれをも排除しないかたちで、国際協力、世界的な連帯、地域レベルでの取り組みを確実なものとするよう努めなければなりません。

ぶどう園に行けば、労働者と汗まみれになります。それが、今日イエスに出会うことにつながります。今日、イエスに出会って「考え直し」、神の心に留まろうとするなら、私たちのどのような過去も、明日は救いに変わってゆくのです。



## 年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

お膳立てをしてくださった神と収穫を分け合う

日曜日 9 時の、説教の後に洗礼式を予定しているミサを前提に話します。今週の福音朗読箇所から洗礼式に臨む両親に語りかける部分を探すのは難しいかも知れません。ただ、イエスがたとえ話を語っている相手、祭司長や民の長老たちは、たとえ話が自分たちへの当てつけであると知りつつも、正しい答えを返しました。

「その悪人どもをひどい目に遭わせるでしょう。そしてぶどう園はほかの農夫たちに貸すでしょう。」ここに、洗礼を受けるお子さんと、保護者や代父、関係者は耳を傾けることができますと思います。

「ぶどう園」をはじめに貸した相手は、「悪人」でした。当時の宗教指導者たちに当てつけて言われていると知っていましたが、宗教指導者たちは最初の農夫たちが「悪人」であることを認めなければなりませんでした。

彼らも、主人である父なる神が期待している収穫を収めず、弱い人たちをしいたげ、自分たちが主人の喜びにあずからないだけでなく、主人と喜ぼうとする人たちまで妨げていたのでした。収穫があるはずの「ぶどう園」に居座って、「ぶどう園」からあの手この手で奪い取る人たちになってしまいました。

何度も、宗教指導者たちには振る舞いを改め、神の喜びに連なるチャンスが与えられましたが、ことごとく無駄にしていきました。イエスがおいでになった時、最大のチャンスでしたが、態度を変えませんでした。

一方で、「新たに貸した相手」は、季節ごとに収穫を収めることになる人たちです。収穫を受け取りに来る僕を見て、自分たちが今あるのはこの僕たちを送り込んだ主人のおかげだと素直に認める人たちです。ぶどう園の主人に信頼を寄せているので、送り込んだ僕のことにも信頼しました。

この人たちはのちに教会を形づくることになる人たちでした。たとえそれが、罪人であっても、です。自分を甘く見てしまう弱さ。誰かに迷惑をかけても自分は生き残りたいという利己心。そうした罪の部分素直に認め、私を今も生かしてくださる主人に収穫を渡すことのできる人たちです。

洗礼式を迎えるお子さんと、保護者に当てはめてみましょう。お子さんが健やかに成長していく。いろんな節目をどのように迎えますか？世の人々は、あの手この手で両親にお祝いのアイディアを持ちかけ、その実少しずつではあってもお金を目当てに近寄ってくるのです。子供が小さい時は小さなお金を、成長するに従ってどんどん大きな額を引き出させようとする。いつまでもきりがありません。

しかし別の祝い方もあります。節目になるたびに、父なる神の前に出て、ここまで育った子供の成長を、収穫としてお渡しすることです。

洗礼式、堅信式、結婚式。その他にも、子供の成長という収穫の実りを、僕である司祭の手を通して、お渡しする生き方です。そうすることで、子供と両親は節目のたびに神の喜びとなり、神と喜びを分け合うのです。

私たちは幼い頃、両親に手を引かれて教会に来ました。教会はそんなに楽しいところではなかったけれども、「教会に行く時の服」というのをときどき買ってもらえました。子供は新しい服を買ってもらって嬉しいばかりですが、両親が教えたかったのは、教会に来て行ってから初めて普段着になる。最初は神様のために着てからだよ、ということでした。

どんな人も、教会に集まって父なる神の前に跪いていました。外では道路に大の字になってバスを困らせたりするあるおじさんが教会に来ていてビックリしたことがありました。弱い人も、罪人も、教会に来て収穫を受け取る僕に自分自身を渡して、また生活に戻っていったのです。

なかには、収穫を独り占めしようとする人たちもいるでしょう。両親が育てたのだから、子供を両親の思うままにしておきましょう。そんな人もいるかも知れません。実際にはそうしたくても、子供は反抗して思い通りにはならないでしょう。現実はその中でも、思い描いた通りに子供を歩かせたいと本気で思っている両親もいるでしょう。

それでも私たちは、節目のたびに神様の前に身を置きましょう。命を授かりました。言葉を話せるようになりました。自分で道を選ぶようになりました。命を生み出せる大人になりました。いろんな収穫を、僕である司祭を通して、主である父なる神にお渡ししましょう。私たちがこの生活のリズムを固く守るなら、親子共々、尊敬される息子の列に、イエスの友としてイエスと共に並ぶことができます。



## 年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

司祭の究極の礼服はイエス・キリスト

本日(11日)午後3時から、司祭・助祭叙階式が浦上教会で行われます。この叙階式で、稲田新司祭と、鼈甲屋新助祭が誕生します。彼らがこれから果たしていく教会奉仕の上に、神様の豊かな祝福がありますように、このミサの中で願いたいと思います。

先週、お子さんの洗礼式をこの田平教会でおこない、撮影もしたのですが、「言い間違えた」とはつきり分かる箇所がありました。「堅信式を行いましょ」と言っている部分があったのです。私はまったく気づきませんでした。映像はバッチリ、その瞬間を捉えていました。

28年前を思い出しました。叙階式を終えて浦上教会信徒会館での祝賀会の席で、当時の島本大司教様が祝辞を述べてくださり、最後に新司祭の任地を発表しました。二人目までは小教区の助任司祭として働いてもらいますと発表されたのですが、最後に私の任地を、「小教区の主任司祭として働いていただきます」と仰ったのです。後に親戚の方が録画したビデオテープをいただいて、ビックリしたのです。

その教会に、私はもう一度舞い戻ることがあるでしょうか。いちばん大きな教会なのでないような気がします。もし実現したら、島本大司教様は預言しておられたことになります。

福音朗読に戻りましょう。王子の婚宴を催した王は、招待しておいた客が二度も僕の案内を断り、しかも二度目には乱暴まで働いたのでガッカリしています。それで見かけた人は誰でも婚宴に招きました。意外なことに、通りで突然招かれた人々は皆、王子の婚宴であり、王が催したことをわきまえていたので、礼服を着て婚宴の席に着きました。

しかしそこに、礼服を着けていない人が一人現れます。礼服は、婚宴に招かれたことを感謝する気持ちの表れです。招かれるはずがなかったのに招かれた。名誉なことと感じたから、礼服を身につけます。それなのに、この人は王に招かれたことを感謝する気持ちを持っていませんでした。来るには来ましたが、義理立てて来たようなものでした。

さて私たちは、ここからどんな教訓を得られるのでしょうか。たとえで暗示されている王は、父なる神、王子は御子イエス・キリストです。では王が催した王子の婚宴は、どこにあるのでしょうか。それは日曜日ごとに集まるこの教会、主の祭壇に用意されるのです。「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」と言うでしょう。

まずは、この「神の小羊の食卓」に、礼服を着て集まる必要があります。先週話した、一張羅の意味でも構いませんが、もう少し踏み込んで考えると、「この食卓に招かれたことを光栄に思う、名誉に思う」そのしるしを身につけてくる必要があります。それはたとえば、断食であったり、隣人愛であったり、感謝を表す献金などです。

断食は、「神の小羊の食卓」に着くためになくしてはなりません。酔っていたり、どこかで食べてきたから食事は要らないという態度を取っ

たりすれば、礼服を着ていない人と何ら変わりません。また隣人愛は、人に奉仕する愛のわざですから、招待客の枠を越えて人を招く神の広い心に彩りを添えます。そして私たちが持ち寄る献金は、神の小羊の食卓をいつまでも続けさせてくれます。私たちの献金で、次のパンとぶどう酒も用意され、神の小羊の食卓に招かれる人がさらに増えるのです。

11日(日)午後3時から司祭・助祭の叙階式ミサが行われます。今は自分自身のことも重ねて考えることができます。会衆はミサに参加する時、断食や隣人愛や献金を持ち寄ればそれで十分ですが、司祭に叙階される人、助祭に叙階される人はそれだけでは足りないでしょう。

ではどんなものをささげて、神の小羊の食卓に近づくのでしょうか。一言で言えば、ささげものは自分自身です。イエス・キリストにいつも「はい」と答え、イエスに反するものには「いいえ」と常に答える。「私はこう思う」ではなく、これからは「イエスが私の全て」となります。

浦上の助任司祭の時、予定外のことがいつも降りかかって、自分がしている目の前のことを横に置かなければなりません。緊急の病人が出て、机に向かっていたのに中断させられます。一日くたくたになって寝床についたのに、大学病院に救急搬送された人の家族から呼び出され、夜中に病者の塗油を授けます。いつも、弱く貧しい姿で現れるイエスが「私のもとに来なさい」と呼んで、「はい」と答えるのでした。

もしかしたら今度叙階の秘跡を受ける方々はよくできた人物で、「それらのことは皆、小さい頃から準備ができております」と答えるかも知れません。しかし司祭や助祭に叙階される人は、叙階されてからもっと多くのものをささげるように求められるのです。実際にささげることになる前に、考えておいてもよいでしょう。

司祭・助祭に叙階される方は、いわば「イエスに買い取られた人」です。イエスが代価を払って、叙階の秘跡を受ける人の全てを買い取ったのです。どんな代価を払ったのでしょうか。「十字架にはりつけにされて死なれた」という代価です。十字架上の死という代価を払って買い取られたことを、叙階の秘跡を受けてからは忘れてはならないのです。

いつか怠け心を起こしたり、この世のもので時間を埋めようとしたり、ミサをささげながら心は満たされない。そんな場面がやって来るかも知れません。しかし、司祭はイエスが御自分の死という代価を払って買い取られた者なのです。投げ出しそうになる時、私のために支払われた代価の重さを、繰り返し確かめる必要があります。これが祭壇に上がる司祭に求められる究極の「礼服」です。

私が、叙階式ミサの前に必ず行われる受階者への訓示をする機会が巡ってきたら、そう伝えたいと思っています。どうか皆さんも、新司祭にいつか会うことがあれば、この人はイエスの死によって買い取られた人なのだと考えてください。

もし、どうしても諫めなければならない時には、「あなたはだれのいのちで買い取られたのか忘れたか？」と諫めてください。司祭・助祭叙階式に臨む方々のために、続けてお祈りいただきたいと思います。



## 年間第 29 主日 (マタイ 22:15-21)

すべてのことに神の肖像と銘がある

「イエスは、『これは、だれの肖像と銘か』と言われた。」(22・20) 刻まれている肖像と銘に従って、責任を果たす。今週はこのようにまとめられると思います。では私たちに刻まれている肖像と銘は、どのようなものでしょうか。考えてみましょう。

司祭・助祭叙階式が行われ、稲田新司祭と鼈甲屋新助祭が与えられました。稲田新司祭は、助祭として奉仕していた福江教会に、引き続き助任司祭として赴任することになりました。鼈甲屋助祭は、大神学院の課程を修了するまで、ひとまず福岡に戻ることになります。

翌日、「司祭の日」のミサが行われ、新司祭・銀祝・金祝・ダイヤモンド祝を迎えた司祭方のお祝いがミサの終わりに設けられました。下川神父様はお元気にしておられ、山内豊神父様が体調にまったく不安がなければこの場で一緒に祝ってあげたかったなあと思いました。

それぞれ、短い感謝の言葉を述べたのですが、新司祭の挨拶には度肝を抜かれました。「昨日、叙階の秘跡を受け、司祭とさせていただきます。昨日のことにように思い出します」と涼しい顔でした。「『ゆとり世代』は挨拶も余裕があるな」と感心しました。どんな働きをするのか、これから楽しみです。

今週の福音朗読、「これは、だれの肖像と銘か。」このイエスの問いかけはいまだに私の中で消化し切れていません。生涯問い続ける必要があるかも知れません。納税の問題で罌を仕掛けようとデナリオン銀貨を持ち出し、言葉じりを捉えようとした人々の悪知恵。その手にあるデナリオン銀貨は、よくできた貨幣だったのでしょ。ローマ皇帝の肖像であると一目で分かったようです。

貨幣の鑄造の技術にせよ、イエスを罌に陥れようとする悪知恵にせよ、技術や知恵は、人間の素晴らしさを表しますが、しかしその技術と知恵を授けたのは人間ではありません。使い方の差はあっても、すべての技術、すべての知恵は、もともとは神から人間が授かったものです。

「これは、だれの肖像と銘か」この言葉には、見える肖像と銘の向こうに、神がおられるのではないか。すべてのものの向こうに神の働きを見て、神のものは神に返しなさいと言っているように感じるのです。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」これは区別して言っているのではなく、生活のすべてに世の中で返すものがあり、神に返すものがあると思っさせているのです。

叙階式ミサの次の日に設けられた「司祭の日」のミサ、司祭生活 60 年とか 50 年の方々の姿にはいろんな重みを感じられました。彼ら大先輩方も、この世のものはこの世に返し、神のものは神に返す、その長い人生を送ってきたのだと思います。

司祭だけに求められるものもあったことでしょう。この世のものを返すのに命まで削る必要はありませんが、神のものを返すためには、と

きには命を削ってでも務めを果たすことがあったでしょう。それらを内に秘めて、祭壇に上がって、新司祭や銀祝の司祭と並んでいる。すごいことだなと思いました。

「これは、だれの肖像と銘か。」生涯にわたって自分に問いかける必要を感じたのは、25年を過ぎた頃からかも知れません。何かの務めを果たす時、かつてはその務めが10年後、20年後にどのようになるのか、考えもしませんでした。ただ懸命に務めを果たすだけでした。

それが、25年を過ぎると今までにない考えが頭をよぎります。一つの務めを果たした時、それは10年後、20年後の蓄えになる。そのような考えが浮かんできたのです。たとえば、11月からは聖書愛読運動で、予定ではコリントの信徒への手紙一と二を読むつもりでいますので、そのための資料の準備をしています。

かつてであれば、聖書愛読のために準備したことが次にどう繋がるかなど、考えもしなかったでしょう。けれども今は、「ここで努力したことは、将来努力しないで使えるようになる」と、独り考えてしまうのです。努力することに偽りはありませんが、神に返すべき努力の、その何割かを自分のために還元しようと考えてしまうのです。

ですから何度でも、自分に問い直すのです。きっと生涯、問い続ける必要があるのです。「これは、だれの肖像と銘か。」洗礼を受けて神のものとされた。私はどこまで、神のものを神に返しているだろうか。堅信を受けて大人の信者となり、かつては「キリストの兵士」とさえ言われてきた。私はどこまで自分を神に帰しているのだろうか。

ましてや司祭・奉献生活者は、イエスに身も心もおささげした者です。司祭生活が25年を過ぎたあたりから、「ここで恩を売っておこう」「こういう形で名前を残しておこう」「今苦勞しておけば、次のときには何の苦勞もせずに恩を売れるではないか」考えることはまるで「神のものをこの世のものとすり替える働き」になっています。

新型コロナウイルスの影響で、多くの計画が中止になりました。それによって与えられた時間は、果たして神のために使ったのでしょうか。ここでひとやすみしようと、この世のために使ったのではないのでしょうか。大いに反省させられるところです。

余談ですが、来週26日、私は長崎市の聖フランシスコ病院で人間ドックを受けることにしています。身も心も神のものですから、よりよく教会の働きができるように、十分検査をしてみようと思っています。そしてこの機会に、「これは、だれの肖像と銘か」このイエスの言葉を繰り返し言い聞かせ、自分に問うてみたいと思います。





## 年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

神に愛され、隣人に愛されて重要な掟を知る

律法の専門家は、イエスを試そうとして尋ねました。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」(22・36)。自分自身への真剣な問いかけとして考えてみましょう。「わたしにとって、最も重要なことは何でしょうか」。どんな答えが出てくるでしょうか。

考えるヒントとして、これまでになくしたものを振り返ってみましょう。何か大きな損失を被った。または、大きな喪失感を味わった。そのことであなたは、もう立ち直れない、もう未来はないと思って生きてきたでしょうか。

実際には多くの人々が、一から出発し直して、今は新たな気持ちで日々を歩んでいるのではないのでしょうか。大きな喪失感を味わった時期があったかも知れませんが、そうした時期を乗り越えて、今を生きているのだと思います。

かつて私も、大きな損失を被ったことがありました。人によって何が大打撃かは違いがあると思いますが、たくさん残していたパソコンのデータをある時一瞬で失いました。説教の原稿、教会学校の教案、黙想会の原稿、恩人や友人に宛てて書いた手紙、出会った多くの人との記念写真。それらすべてを失い、がっかりし、怒りさえこみ上げてきました。

大きな損失を被りましたが、だからといって人生を投げ出すことはしませんでした。資料や記録や思い出は、失ってしまうことは残念ですが、それらが自分のすべてではありません。これからも新しい出会いがあるでしょうし、これまで以上に資料や記録を残すこともあり得るからです。

また、私は父を亡くしました。男性の平均寿命 79 歳にさえ届かない 71 歳でした。どうして?なぜ?現実がなかなか受け入れられませんでした。よく言われるように、ぽっかりと大きな穴が開いたような感じがしました。

愛している人を失うことは大きな損失です。でも、それでも私は前を向いて歩いています。「人生はこれで終わってしまった」さすがにそこまでの失望感を味わったわけではありませんでした。

重大な喪失感を味わって、ようやく「最も重要なこと」が見えるようになりました。私にとって最も重要なことは、これまでに失ったものの中には存在せず、違うところにあった。もっと言うと、私を立ち直らせてくれた神の中に、「最も重要なこと」があったということです。

神の中に「最も重要なこと」があったと言いましたが、別の言葉で言うと、大きな喪失感の中でも神が与えてくれた力、「前を向いて歩いていける」という力こそが、「最も重要なこと」だったのかも知れません。

なぜ、前を向いて歩き続ける力が、「最も重要なこと」と言えるの

でしょうか。それは、神が与えてくれた「前を向いて歩き続ける力」が、神が私を愛し続けておられるしるしだからだと思います。

これ以上ないという喪失感を味わっても、神は私を見捨てず、愛し続けてくださった。そうであれば、最も重要な第一の掟は、神を愛し返すことです。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(22・37)これが第一の掟であることに議論の余地はありません。

同じような考え方に立つと、「隣人を自分のように愛しなさい」(22・39)という掟も理解できます。もう一度前を向いて歩き続ける力を与えてくれた神の次に私にとって重要なのは隣人なのです。隣人の中には、ずっと私を見捨てず、見守ってくれた隣人が、だれにでも一人はいるものです。

例を挙げたいと思います。私個人の司祭としての活動ですが、2002年の誕生日から、日曜日の説教をメールで配信するサービス(メルマガ名「こうじ神父今週の説教」)を続けています。登録してくれた人に、毎週説教を送り続けるという活動です。

現在第1087号なのですが、相手が見えない活動はときおり不安になるものです。メールで送った説教をだれも読んでもらえず、だれからも振り向かれずに廃刊しなければならないという危険もありました。幸いにメルマガは今年まで18年6ヶ月、毎週配信できています。

なぜ、相手も見えない人に説教を送り続けることができたのでしょうか。力の源がありました。それは、欠かさず読んでくれている人がいたことです。「いつも楽しみにしています」そんなメールをもらったのです。「こんな人もいるんだなあ」と力を頂きました。

個人的に始めた説教の配信活動を、始まりから決して見捨てず、自分のことのように思ってくれる人がいた。この経験から、第二の掟は自然に理解できるようになります。「隣人を自分のように愛しなさい」(22・39)。体験を通してイエスが、「あなたは今日まで、だれかに支えられ、歩いてくることができた。だからあなたも、隣人を自分のように愛しなさい」と呼びかけているのだと思います。「『あなたを見捨てない』そんな人になってあげなさい」と、イエスは私に期待しているのです。

自分にとって最も重要なものに気付いた時、最も重要な掟の意味が見えてきます。神をこの上なく愛することと、隣人を自分のように愛すること。この二つの掟は、「どの掟が最も重要でしょうか」と真剣に問うすべての人に十分理解できる掟なのです。



## 諸聖人 (マタイ 5:1-12a)

イエスがそばに立ち、「あなたは幸いだ」と呼ばれる人に

特定の日が、日曜日と重なることはとても珍しいことです。今年、11月1日が日曜日と重なり、「諸聖人の祭日」として日曜日を祝っています。珍しいので前回諸聖人の祭日が日曜日と重なったのはいつか調べてみたら、5年前の2015年でした。せっかく日曜日に巡ってきたので、神のもとに迎えられ、すべての人のためにとりなす聖人たちに心を向けましょう。

聖人方が集う「天の国」はどのようなところでしょうか？二つの聖書の引用から、描いてみたいと思います。一つはヨハネ福音書の第14章1節から4節です。次のように言われています。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

「住む所がたくさんある」これは私にとっては大変魅力的な言葉です。聖人たちも殉教者がおられるし、生涯を聖なる生き方で貫いた方もおられます。その「一生涯、聖なる生き方」という中にもさまざまな生き方があります。

聖なる学問を究める人もいれば、祈りを極める人もいます。隣人愛を極める人、家庭の父として母として聖なる一生を送る人もいます。諸聖人の祭日に選ばれた福音朗読箇所も、さまざまな生き方で聖なる一生を過ごす人たちが、「幸いである」と呼ばれています。天の国には住む所がたくさんあり、あらゆる生き方で聖なる道を究めた人たちが招かれるのです。

もう一つ、紹介したい聖書の箇所があります。ルカ福音書第16章の「金持ちとラザロ」のたとえ話です。毎日ぜいたくに遊び暮らしていた金持ちと、できものだらけだったラザロとが亡くなると、ラザロは宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれ、金持ちは陰府でさいなまれています。

金持ちがアブラハムに、「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください」（16・24）と大声で叫びました。しかしアブラハムの返事は、金持ちにいきさきの希望を諦めさせるものでした。「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。」（16・25）

ここで一つのこと気づきました。アブラハムは金持ちに「子よ、思い出してみるがよい」と言っています。「思い出せ」と言うのですから、「知らなかったでは済まない」ということです。通常何かを間違え

た時、「本当に知らなかった」というのはあり得ます。アブラハムはその「うっかり」がここには存在しないことをはっきり示します。「思い出してみるがよい。思い出せるよね？」弁解も、言い逃れもできないのです。

私たちがきっと、「子よ、思い出してみるがよい」と言われるのでしょう。私は生きている間に、宴席でアブラハムのすぐそばにいさせてもらえるだけの何かをして、旅立たなければなりません。今週の福音朗読にある生き方をした人々は、神が隣にいてくださり、「幸いである」と声をかけてもらえる人々です。たとえそれが、地上では「悪いものをもらっていた」（ルカ 16・25 参照）と言われるような生き方であっても、神の前に価値ある生き方であれば、神がそばで「幸いである」と言ってくれるのです。

一つ、今週の朗読箇所から取り上げてみましょう。「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る」（5・8）とあります。私はある場面に、この幸いな状態がぴったり重なる、と感じたことがありました。それは日曜日のミサ、聖書の朗読の時です。

ある朗読者が朗読のために祭壇に上がってきました。その人の目には、「みんなのために、読んでやるか」みたいな気負いは何も感じられませんでした。またそれとは反対の、「上手に読まなければ」とか「引っかけたらどうしようか」といった「自分をよく見せたい」という雑念も感じられませんでした。純粹に、「与えられた朗読箇所を読む」その単純な思いが、その人の目から十分伝わりました。

もしかしたら、その人は心の清さ以外に、持ち合わせは何もないかもしれないかもしれません。この世の物差しで言えば、「物持ち、金持ち人生」ではないかも知れません。

しかし私は、その人の中に、イエスがそばに居てくれて、「あなたは幸いだ」と言っているのが見えた気がしたのです。聖書朗読をしている間に、隣にイエス・キリストがいて、「あなたは幸いだ」と言っているのが感じられたのです。

諸聖人と認められる方々は、「幸いである」と神から認められた人々です。神から「幸いである」と呼ばれることを、「幸いなこと」と理解した人々です。私たちはまず、神から幸いであると呼ばれることを「幸い」と理解している人々なのではないでしょうか。

典礼当番で、聖書朗読のため、答唱詩編のため、祭壇に上がってくる人は本当に限られています。もし自分が祭壇に上がることがあったら、「この人は神から『幸いである』と呼ばれている人だ」と認められたいものです。

そのためにはおそらく、自分を見せようとするどんな飾りも必要ありません。イエスが紹介した「幸い」を生きてきた。この一点だけを身にまとして、いつの日か祭壇に上がりましょう。毎日祭壇に上がる司祭は、なおさらその覚悟が求められています。



## 年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

五人は愚かで、五人は賢かった

「十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。」(25・1-2) 私たちはもちろん、「賢い乙女」の振る舞いに倣わなければなりません。賢い乙女の賢さは、どこにあったのでしょうか。

十人の乙女にぴったり当てはまるたとえを、結婚式を準備しているカップルにずっと話してきました。ここで紹介したいと思います。結婚した夫婦が赤ちゃんに恵まれたとします。赤ちゃんはまず、空気を吸ったり吐いたりしているのではなく、羊水という液体に浸かって生きています。また、食べ物を口にして生きていくわけではなく、ヘソの緒で母親と繋がり、栄養をもらって生きています。

用水に浸かって、ヘソの緒で繋がっているにもかかわらず、赤ちゃんは成長していく中で、今は必要ないのに呼吸するための肺を用意します。今は必要ないのに、食べるための口、消化・排泄器官、ものを見るための目、音を聞くための耳を準備します。何もつかまないと、歩き回らないのに、手足の指が発達していきます。これはすべて、胎内を出た時のための準備です。無事に生まれてきて、すぐに新しい環境に適応するために、今はまったく必要のないものを胎内で準備しているわけです。

結婚するカップルには、この胎児の成長を例に、人は、この世のことだけを整えるだけでは足りないことを学ぶ参考にしています。つまり先祖のために祈るとか、自分自身の救いのために祈るとかは、この世のことだけで十分と考える人にはまったく不必要なことです。

しかし、この地上の生活を終えた後、神の国での生活に必要な物を準備していなければ、間に合わなくなるのです。胎児が、生まれ出て「しまった。外の世界では肺で呼吸をしなければいけないのか。外の世界では口から食べ物を入れなければならないのか」と言ってそれから準備をしても間に合わないのと同じです。

赤ちゃんが、次の世界で必要な物を準備しながら、私たちに「今さえよければ構わないという生活では、次の世界、次のステージに移った時に後悔しますよ」と教えているのだと結婚する人たちに考えさせるようにしています。今週の福音朗読は、まさにこの学びが当てはまるわけです。

「十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。」花婿が花嫁をもらい受けに行く時間は、「今」というステージです。「今」のことだけ考えれば、ともしびの予備の油は必要ないでしょう。

しかし花婿を出迎え、婚宴の会場に入る段階は、「次の世界」「新しいステージ」です。しかも、この新しいステージにいつ移るのか、ともしびを用意するおとめたちには知ることはできません。それでも、常に次のステージに移った時に困らないように、用意が必要なのです。

私たちにとって、「今の世界」と「次の世界」とはどのようなものでしょうか。「今のステージ」には大きな差は出ないけれども、「次のステージ」では大きな差となる「予備の油」とは何でしょうか。それは「イエス・キリストを信じる信仰」だと思います。「今の世界」のことだけ考えれば、日曜日に時間と都合を付けてミサに参加することは、その習慣のない多くの人々と差が付くことはないでしょう。ひよっとすると、もっとゆっくり眠り、平日にできないことに没頭する時間に費やした方がましかも知れません。

しかし、「今」教会に来てミサに参加することは、次の世界、次のステージで大きな差が付きます。私たちに次の世界があるなら、それはイエス・キリストと繋がった世界です。そこで必要なものは「今の世界」で用意していなければ間に合わないのです。

「予備の油」を買いに行ったおとめたちは、ついに次の世界、次のステージに移ることはできませんでした。「はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない」(25・12)と主人に突き放されます。それはつまり、「次の世界の準備をしないで今を過ごしてきたあなたがたの責任である」ということです。

今日、洗礼式を迎えるお子さんがいます。洗礼によって神の子とされ、永遠の命を授かり、教会の一員となります。この子も、これから「今」のことだけを追い求めて生きるのではなく、「今この時点から、次の世界に必要なものを備えて生きる」ひとになっていきます。

もちろん本人にはその力がまだ備わっていませんから、大人になるまで両親と代父母が、「今さえ良ければ構わないという生き方では足りないのだよ」と教え、導かなければなりません。教会の中で過ごす時間を体で覚え、両親、祖父母、代父母の祈りの声で祈ることを覚え、予備の油を蓄えていきます。

いつかこの子は「予備の油がなぜ必要なのか？今さえ楽しければ良いのではないか？」と聞いてくるかも知れません。その時に、両親、代父、祖父母はていねいに、今信仰を養っておけば、次のステージで決してうろたえることがなくなると、教えてあげるのです。

今週の福音朗読で、「五人は愚かで、五人は賢かった」とあるのは偶然ではないかも知れません。半分の人たちは、この地上の生活を、「今さえ良ければ構わない」そんな暮らしかたをしているのではないのでしょうか。さらに「油を分けてください」と愚かなおとめたちが願った時、賢いおとめたちは「分けてあげるほどはありません」と答えました。

私たちは「賢いおとめたち」を遙かに超えて、予備の油を分けてあげる、今を生きる中で、次を生きる準備を人に勧めることもできるのです。私のミサ説教は田平教会だけに留まらず、多くの人にネット上で聞かれています。原稿も読まれています。この人たちも含めて、予備の油を分けてあげることさえためらわない人になりましょう。今日洗礼を受けるお子さんが、そのような人に育っていくことを願っています。

それでは、洗礼式に移りましょう。



## 年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

あなたはそれをどう読んでいるのか

「早速、五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。」(25・16) 主人が預けたのは現金です。いろいろ複雑に考える必要も無く、それを元手に商売をするなり、貸金業をするなり、すぐ事業に取りかかれるはずでした。しかし最後の一人は何も取りかからず、責任を問われることとなります。なぜ最後の一人は主人の期待に恐れを感じたのでしょうか。

「タラント」というお金の単位は、非常に大きな単位です。その下のお金の単位は「デナリオン」とか「ドラクメ」です。これは労働者が一日に稼ぐ賃金だったと言われています。ちなみに「ムナ」という単位もあります。これは「100 デナリオン」「100 ドラクメ」ですので、基準となるのは一日の労働者の賃金である「デナリオン」ということとなります。

一タラントは 6000 デナリオンです。一年に 200 デナリオンの稼ぎとして、単純計算で 30 年分の稼ぎです。するとこの一タラントは、私が考えるに当時の人々が一生かかって稼ぎ出すお金だったと言えるでしょう。当時の人々の平均寿命を考え合わせると、30 年働くことができれば御の字だったと思います。

一つのことには気づきます。一タラント預かった人は、僕が一生働いて稼げるだけのお金を預かっている、ということ。すでに十分な資金を託されていたことを、最後の僕は見落としていました。

「かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。」(25・19) 十分な資金と時間を与えられているので、何らかの結果を出していなければなりません。預けたお金のほかに何も差し出すものがないというのは、言い訳にならないということです。

振り返って私はゾッとします。「それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けた」(25・15) 私の同期は、それぞれ三つの教会の助任司祭となり、私は浦上教会の助任司祭でした。私は何タラント預かって、この司祭職をスタートさせたのだろうか？そう思った時、ゾットしたのです。

私がイエス・キリストと精算をする日に、何をお返しできるのだろうか。そもそも何タラント預かっていて、どれくらい儲けて主人に差し出さなければならないのでしょうか。どうひいき目に見ても、浦上教会は他の教会の二倍、三倍の経験を毎年積んでいきます。出会う人の数、出会う人の種類も、他のどの教会よりも中身が濃いものになります。浦上教会助任から出発したのですから、私がお返ししなければならない分は、他の同期の何倍も求められて当然です。今の自分の姿を鏡に映しながら、ため息をついたのでした。

今日の福音を、朗読箇所からではないのですが、イエスの次のことばで見渡すとよいかも知れません。「律法には何と書いてあるか。あな

たはそれをどう読んでいるか」(ルカ 10・26)。これはルカ福音書の「善いサマリア人」のたとえを使って律法の専門家と対話する時に言われたことばです。私たちはこれを、「あなたは今日のたとえ話をどう読んでいるか？」と受けとめる。そうすると、見えてくるもの、響いてくることがあるのではないのでしょうか。

「ここには何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」私は、司祭として歩み始めた時に五タラントンをいただいたに違いない。その五タラントンを元手に、神の国の喜びにあずかる人をどれだけ儲けたらろうか。「これがあなたのお金です」と責任逃れをし、託された多くの恵みを神の喜びのために使わなかった点を問われるかも知れません。

私たちはどうでしょうか。少なくとも私たちは、人が一生涯で手に入れることのできるタラントンを、神から託されて生きています。それが 6000 デナリオンでなくても一向に構いません。ある人は生まれた時から寝たきりですが、その人の生涯で手に入れることのできるすべてを、前もって託されているのです。託されたものを使って、私たちは神にお返しできる人生を生きてきたのでしょうか。

ある人はこう言うかも知れません。「私は自分のことで手一杯でした。さらに貯蓄して、さらに増やして、神さまにお返しする余裕なんてどこにもありませんでしたよ。」本当にそうでしょうか。

中田神父は、出会った時から長崎市の原爆病院に入院し、一步も動けなかった人を知っています。その人はお見舞いに行くとしばしば新しいカトリック信者の紹介をしてくれました。「何階の何号室に、カトリックの人が入りました。よかったら訪ねてください。」

この人は「預かった命」というタラントンを活用して、神さまの喜ぶ儲けを生み出していたのです。そして、ある日訪ねたら居なくなっていて、詰め所の看護師に聞くと亡くなったということでした。

寝たきりの人ですから、預けられたタラントンはそう多くなかったかも知れません。けれどもその人は立派に儲けを出して、旅立っていったのでした。私たちが神さまから託されたものをどのように使うべきか、考えるお手本と言えるでしょう。

神は、誰に対しても預けたものの精算をします。預かったのにホコリを被ったままにしておくのか、預かったものを積極的に運用するのか、私たちの答えを楽しみにしておられます。それを「厳しい方」と受け取るのか、「楽しみに待っておられる方」と受け取るのかは自分次第です。私は、病院で出会った高齢の女性を通して、「神は私たちの応答を楽しみに待っておられる」と信じております。





## 王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

最後の一人にまで心を寄せる王であるキリスト

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(25・40) この招きを耳にすることが、私たちにとってどれほど大切か。誰にでも分かっていることです。ですがこの招きにあずかることを最優先に人生を送っているかは別問題です。王の前に誰もが立たされます。その時を、平常心で迎えられる人生でありたいものです。

先週ボートで釣りに行ったら、塩焼きくらいの鯛を釣りました。キジハタ1匹、アラカブ1匹、塩焼きの鯛3匹(3枚と言うのかな)だったので、鍋料理の下ごしらえまでしてから引退した神父様に届けようと考えまして、賄いさんにも野菜や豆腐や準備してもらいました。

出かける頃には昼1時になっていたのですが、「起きてるかな？」という心配が出てきまして、賭けをしようという話で盛り上がりました。私のほうから「『昼寝している』に500円」と提案しますと、「同じほうに賭けようと思ったので、不成立ですね」と言われました。いざ訪ねてみますと、なんと神父様は額に汗をかきながら、せっせと庭いじりをしているではありませんか。お魚を預けながら、「どっちも外れたなあ」というオチが付いたのでした。

さて今週は「王であるキリスト」の祭日で、今週で典礼の暦の一年が終わります。来週からは待降節になり、新しい典礼の暦が始まります。典礼暦の終わりに当たり、「この世の終わり、最後の審判」を考えるのは意味のあることだと思います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち」と王に招いていただけの一年だったかを振り返り、また新たな一年をこの姿勢で過ごしていく決意を新たにしたいものです。

たとえで示される審判の成否を決める分かれ道は、「この最も小さい者の一人にしてくれたこと、してくれなかったこと」です。「最も小さい者」がどれくらい意識できているか。それが大きな分かれ道になります。具体的に考えることにしましょう。

中田神父が田平教会の日々の出来事を取り上げ、問題があれば解決するその場所は評議会です。評議会と連絡会が密に情報交換をすれば、ほぼ田平教会の家族全体のお世話ができる、とても立派な仕組みです。

しかしそれだけで安心してはいけません。お世話が行き渡っていない場所があるかも知れません。田平教会の信徒の皆さんが遠慮深くて、問題があっても評議会まで上がってきていないこともあるでしょう。それでも主任司祭個人に問題が上がってきていけば、取り上げてもらうことは可能です。それすら恐縮して声を出さずにいる場合も考えられます。

ここで今週のたとえが重なってきます。「主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。」

(25・44) 評議会で上がってきたことは、一つずつチェックをして一つ

残らずこなした。だから漏れはないはずだと思って「いつお世話をしなかったのでしょうか」と言いたくなります。けれども主任司祭の果たす務めとして、残念ながら漏れがあったのです。「はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。」(25・45)

評議会と連絡会で話し合っ、それでも漏れてしまう問題。それこそが、「最も小さい者」が抱えている問題なのだと思います。そして審判の席で主任司祭が問われるのは、この「最も小さい者にしなかったこと」なのです。

評議会で話し合っ、内容を主任司祭が日曜日のミサでお知らせを入れ、連絡会に参加する地区委員さんにも各世帯に連絡を回してもらおう。そこまですれば「組織」としてはやるだけのことはやったと言えるかも知れません。

ただ、「最も小さい者」に、この方法で連絡が届いたかは疑問が残ります。この方法で漏れた人にも小教区の歩みを共にしてもらいたい。そこであと一歩、主任司祭は踏み込んで行動しなければ、「わたしにしてくれなかった」と責められる可能性もあります。

主任司祭に当てはめてみましたが、これは決まった人だけの問題ではありません。王であるキリストは、「すべての民族を裁く」「すべての人に同じことを問う」と考えるべきです。一人ひとり、自分にとっての「最も小さい者」は誰なのか、考えてみましょう。かなり手を尽くしても漏れてしまう人。それは私にとって誰のことなのでしょう。

私は病人訪問を月の第一金曜日に回っていますが、たくさん漏れている人がいるに違いありません。申し訳なく思っています。漏れている人たちにせめて、クリスマスプレゼントの一つでも届けられたらと思っています。みなさんも、「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」(25・34)と声をかけてもらえるように、王であるキリストの祭日を迎えたこの一週間、振り返る一週間といたしましょう。

一年前、11月24日、フランシスコ教皇様と私たちは、同じ場所で同じ時間を過ごし、王であるキリストを祝いました。今また教皇様と一緒に歩いた「すべてのいのちを守るため」この歩みを思い起こし、教皇様のこれからのご活躍と、私たちが変わらずすべてのいのちにいつくしみの目を注いで生きる決意を新たにしましょう。



## 待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

典礼の意識的参加のために用意していません

「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」(13・37) 待降節を迎えました。教会の暦は待降節から新しい一年が始まります。さらに言うとミサの福音朗読はA B C三年周期になっていて、今年マルコ福音書を主に朗読するB年です。「目を覚ましていなさい」という呼びかけを、新しいB年の典礼を始める糧にしましょう。

新型コロナウイルスの脅威はいまだに去りませんが、この状況で典礼を行いながら感じたことがあります。平戸地区内、他の小教区でも似たような問題が起こっています。それは私たちが「教会の公式の礼拝である典礼に、これまで意識的に参加できていなかった」ということです。

具体的に例を挙げましょう。ミサは、「入祭唱」から始まります。典礼にオルガンを十分使用できていた頃、入祭の儀はオルガン奏者が典礼聖歌を弾くことで始まりました。皆さんはそれに合わせて歌いさえすれば良かったわけです。

ところが今は、入祭唱を地区の典礼当番の人が読み上げて入祭の儀が始まります。どのタイミングで、皆さん唱えているのでしょうか？規則には「どのタイミングで入祭唱を読み上げなさい」などというこまごましたことは書いてありません。それこそ、その担当者の思いやりとか、心がけが問われるわけです。

実際に、「あ～。このタイミングで入祭唱を唱えているということは、ミサが始まるきっかけを入祭唱が与えていることなどまったく頭に入っていないな」と勘ぐってしまう時があります。司祭の姿が見える頃にはもう唱え終わっている。それから間延びしたように司祭が入堂する。これでは、入祭唱の役割を果たしていません。

通常、「ミサ曲」と言われている「賛歌」の部分も、オルガン奏者が音を出してくれていた時はそれにただ従うだけでした。しかし今、オルガンを演奏しなくなって、「あわれみの賛歌」と呼ばれる「主よあわれみ給え」をどのタイミングで言うのか、意識しなければならなくなりました。その直後の「栄光の賛歌」は司祭が最初を唱えますが、皆さんは続きを祈祷書を見ないで言えるのでしょうか？オルガンに合わせて歌っていた時、何とな～く歌で唱えていた。それを意識して唱えるのは大変だと初めて気づいたでしょう。

同じように感謝の賛歌「聖なるかな」も、意識して会衆をうまく導かなければなりません。まだ司祭の叙唱の祈りが唱え終わっていないのに「聖なるかな～」と遮ることなどもってのほかです。「平和の賛歌」

(神の小羊) このあたりになるともう自分の務めは忘れてしまって、誰かが知らないうちに「神の小羊！」と代わりに言われてしまった。そういうことはなかったでしょうか？

いよいよ「拝領唱」まで進むと、意識にすら上らないかも知れませ

ん。司祭がキリストの血である御血を拝領して侍者の鈴が鳴らされた後、典礼部員に促されて、促されるままに拝領唱を唱える。こんなことでは、典礼に意識的に参加しているとはとても言えません。

もう一度、福音朗読の冒頭を読み上げましょう。「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」（13・33）何かに気を取られて、入祭唱を唱え損ねている間に司祭はもう入堂して、ミサの意向を読み始めた。それから入祭唱を唱えようとしてももはや手遅れです。一瞬、気を取られてしまうのが今回なのか次回なのか、誰にも分からないのです。

今年の新型コロナウイルスの猛威は、カトリック教会にとっては私たちに典礼の意識的参加を強く促す出来事だったと言えるでしょう。平戸地区内の他の小教区でも同じような状況だそうです。

ついでに言いますが、典礼の意識的参加を求められているのは、典礼当番だけではありません。会衆全員が、どのタイミングで入祭唱を唱えたら、司祭も気持ちよくミサに入れるのか、自分が当番に当たっているつもりで、心の中で唱えてみると良いでしょう。そうすれば、皆が典礼に意識的な参加を果たすことができます。

もし、新型コロナウイルスの影響がしばらく続くのであれば、私たちは典礼の意識的参加のためにチャンスをもたらされたのです。新しく始まる典礼暦B年の始まりに当たり、今年の典礼暦は、さまざまな典礼行事に意識的に参加しましょう。

オルガン奏者に導かれたから何となく答唱を唱えていた。そんな参加の仕方をこの際改めましょう。よりよい参加、意識的な参加を心がけて、主の降誕を喜び迎えることができますように。取り次ぎを願っていきましょう。

待降節第2主日(マルコ 1:1-8)



## 待降節第2主日 (マルコ 1:1-8)

洗礼者ヨハネの証に倣って生きる

待降節第2主日は、「洗礼者ヨハネ」と覚えたらほぼ間違いありません。同じような主日は、復活節第二主日「神のいつくしみの主日」です。これは、「トマス」と覚えたら間違いありません。洗礼者ヨハネは神から「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう」と言われた人物です。もし今の時代にも、「あなたよりも先に使者を遣わし、あなたの道を準備させる」そんな人が生きていれば、神の言葉は今の時代にも生きていくことになります。

先週だったか、典礼暦の仕組みを小学生の子供達と学んでいて、クリスマスを準備するために「待降節」という期間があって、この「待降節」から教会の暦（典礼暦）は始まるのですよと説明していましたが、ホワイトボードにそれを説明書きしていたのですが、どうしたことか「クリスマス」を「クリスママ」と書いていました。

まるで教育評論家の「尾木先生が」「尾木ママ」と呼ばれているように、タレントのクリス松村さんが「クリスママ」になった。私にはそんなことを連想させました。せっかくなので楽しんじゃえということで、クリス松村さんを意識しながら「あらやだ！クリスマスをクリスママと書いちゃったのね。どうしましょ」と言ったら、子供達にはほとんど受けませんでした。クリス松村を知らなかったのか、クリスママそのものが面白くなかったのか、残念です。

さて、洗礼者ヨハネが人々に伝えたメッセージの中心は、「わたしよりも優れた方が、後から来られる」（1・7）ということでした。自分自身に取り組んできた悔い改めの呼びかけは、十分称賛に値する働きでした。けれども自分の働きを決してひけらかすことなく、「わたしよりも優れた方」を素直に認め、その方に席を譲ることを躊躇しませんでした。

私たちはどうでしょうか。毎日の生活、毎日の取り組みの中で「わたしよりも優れた方」を認めているでしょうか。具体的に誰かをイメージしなくても構いませんが、「わたしよりも優れた方」を意識している人は、自分自身のわざをひけらかすことなく、謙虚になれる人です。

本当は、評価されて当然の働きをしてきたのですが、それを鼻にかけない。洗礼者ヨハネの姿を学ぶ人は、常にこのように自分に謙虚さを失わない人です。自分を持ち上げないことで、かえって自分の価値を高める生き方です。

私たち司祭は、ともすると自分のしてきたことを鼻にかけがちです。自分がいる間にこれこれのことをしたとか、自分が来るまでは誰も成し遂げられなかったことを、私だけは成し遂げたとかです。しかもその場にいる人にだけでなく、次に赴任した場所でも過去の働きを自慢して回る。そんな危険が大いにあります。

けれどもそんなことをしていたら、現代に洗礼者ヨハネはいなくな

ってしまいます。洗礼者ヨハネのように、常に「わたしよりも優れた方が、後から来られる」と言える人でなければ、イエス・キリストを告げ知らせる働きは価値が下がってしまうのです。喜んで、後から来られる方に席を譲れる。その覚悟で毎日自分の務めを果たさなければ、教会の中でよりよい働きはできないのです。

自分の働きを鼻にかけず、自分が残した実績も躊躇せず次の人に譲ることができる。その覚悟でなければ、どうして教会の中で良い働きができるでしょうか。もし私たち一人ひとりの働きが、洗礼者ヨハネのような潔い働きであれば、今このコロナ禍の中でもイエス・キリストは誰にでも分かりやすく伝わるでしょう。

あなたの働きを通して、「この人は遣わしてくださった方を証している。この方を遣わしてくださったイエス・キリストは本物だ」そのように理解することでしょう。さらに、遣わしてくださったイエス・キリストはもっと偉大な方だと理解するなら、立派に私たちは現代の洗礼者ヨハネの役割を果たしています。

待降節第3主日(ヨハネ 1:6-8,19-28)



## 待降節第3主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

私たちも証しをするために来た

「彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。」(1・7) 洗礼者ヨハネの使命をひとことと言ひ表しています。私たちの生活が、「証しをするため」の生活となるよう、今週も洗礼者ヨハネに学ぶことにしましょう。

中田神父がお世話になる教会の中で、徹頭徹尾、信仰に生きている人たちと出会うことがあります。今はもう天国にいますが、どこに行ってもどんな場所でも、何かを感謝するのに「マリア様感謝します！」と大声で叫ぶおじさんがいました。三度の食事よりお酒が好きな人で、病院に入院したそのおじさんを教会仲間が見舞った時、頼まれて仲間達がお酒を病院に持ち込みました。

そのおじさんが「持って来たや？」と言うと「持って来たぞ」と答えて、何と「マリア様感謝します！」と言って飲んだそうです。結局そのおじさんは戻ってくることはありませんでした。私は「『マリア様感謝します！』のおじさん」として告別のミサをしたのでした。

もう一人紹介しますと、恐れ多いのですが、すでに天国におられるとある神父様です。この方は「ビールは途中で注ぐな。飲みあげてから注げ」そんな方でしたが、よく「乾杯」と言わずに「主の平和」と言っていました。泣く子も黙る神父様でしたので、非常に印象に残っております。

こうした方々を思い出すたび、その人生は徹頭徹尾、キリスト教の信仰に支えられていたと感じます。社会的な貢献もいろいろあったことでしょう。けれども思い出すのは、それら社会的なことではなくて、いつも信仰にまつわる思い出なのです。

ここまで来ると、その人がどんな人だったかひとことと言ひ表せば、「信仰の人」ということになるでしょう。本人が生きている間は本人が、亡くなればこの人を思い出す人たちが「信仰の人だった」と証しをするわけです。

「彼は証しをするために来た。」ある人がこの世に生まれてきて、イエス・キリストを証しするために生きた。家庭や社会に貢献したことを証しするのではなく(もちろんそれも大切ですが)、あのキリスト信者もこのキリスト信者も、一人の人イエス・キリストを証しするために生きた。もしそうであるなら、イエス・キリストについての彼らの証しはどれほど確実でしょうか。

新型コロナウイルスの影響で、ふだんの教会活動はこの一年ほとんど実施できませんでした。しかし、だからと言って教会の歩みを止めてはいけません。イエス・キリストに託された「福音を宣べ伝えよ」という使命は、諦めてはならないのです。集まって何かを証しすることはできませんでしたが、その代わりに、一人ひとり何ができるかを考える機

会となりました。

聖母月、集まっのロザリオは断念しました。代わりに、心を一つにするため、「夜7時」を目安に家庭でロザリオをしましょうと呼びかけました。それぞれの家庭が、各人が、証しをする場を与えられました。

他にも、教皇様をお迎えするために、家庭での祈りが呼びかけられました。小さな折り鶴を、祈りのしるしにしました。これも、集まって、大勢で証しするのではなく、小さな証しの力をお願いしたのです。私たち一人ひとりには小さな者でも、「彼は証しをするために来た」その生き方はどんな環境にあってもできるのだと、今年学んだと思います。

実は今、教会に集まっているのも、これから家庭や社会に戻って、証しをする力を蓄えるために集まっているわけです。教会に来て、嘆きを訴え、自分が困っていることをすべて打ち明けるために来ている人もいるかも知れません。

それでも大丈夫です。あなたも、「証しをするために来た」のです。「嘆きを訴えるのはイエス・キリストしかいない」「悩みを打ち明けるのはイエス・キリストしかいない」その証しをするために来たと言えるでしょう。私たちは皆、「証しをするために来た」神の民なのです。私たちの証しは、まもなく来られる救い主によって、報われるのです。

待降節第4主日(ルカ 1:26-38)





## 待降節第4主日 (ルカ 1:26-38)

小教区再編

待降節第4主日、天使のお告げでマリアにイエスの誕生が予告される場面が福音朗読に選ばれました。今回説教は2014年の原稿をもとにしています。マリアは人間の知恵では完全に把握できない出来事を受け入れようとします。人間が知恵を巡らせても把握できないとき、どのようにして出来事を受け止めるのか、マリアは教えてください。

聖堂入り口に、先週から「アンケート」とその「回収箱」を置きました。お知らせをしなかったのは失敗でしたが、内容は「小教区再編について」です。すでに教区報などでも取り上げられていますが、現状で77ある小教区すべてに主任司祭を派遣できておりません。小教区の数より主任司祭の数が少ないのです。この状態は一時的なものではなく、これからもずっと続くことが予想されます。

そこで、二つの質問を書いたメモを用意しました。平戸地区は小教区が8つあり、そのすべてに主任司祭が派遣されています。しかしこの状態は恵まれているのであって、ひょっとしたら次の人事異動では、8つの小教区に対して7人（あるいは6人）の主任司祭しか派遣できないと言われるかも知れません。そうなった時、田平小教区の信徒としてどんなことを要望したいですか、書いてみてください。

あるいは、これからの司祭減少傾向に対応するため、平戸地区を7つの小教区（または6つの小教区）に組み直すかも知れません。そうなった時、田平小教区の信徒としてどこまでは受け入れられますか、どんなお願いをしたいですか、考えて書いてみてください。

こんなお願いをして、「いきなりそんなこと言われても困る」と気を悪くされるかも知れません。ですが一歩引いて考えてみてください。「無い袖は振れない」のです。「平戸地区はずっと8人の主任司祭が与えられて当然です」とばかり言えなくなっています。「平戸地区の小教区を減らすなんてとんでもない」とばかり言えなくなっているのです。

長崎教区の神学生が、中学・高校・福岡の大神学院、合計12学年で25人くらいしかいなくて、彼らが12年間でかろうじて半数司祭まで辿り着く。しかしその頃までに同じだけの数、いやそれ以上の現役の司祭が引退する。明らかに、司祭数は減少していきます。田平教会が助けあげられること、田平教会がここまでは受け入れられるということ、それらを一歩引いて考えて、回答用紙に記入して投函してください。

福音に戻りましょう。今週はイエスの誕生が予告される場面が選ばれました。天使ガブリエルが、特別なメッセージを携えてマリアのもとに遣わされます。天使ガブリエルは、神から託されたメッセージをそのまま届けますが、マリアは出来事の大きさに戸惑います。自分が身ごもって男の子を産み、その子はいと高き方の子。ダビデの王座につき、永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがないと言うのです。

マリアは、天使のお告げが何のことか分かりません。天使が続けて

説明してくれるかもしれないので、「どうして、そのようなことがありえましようか」(1・34)と問いかけます。天使は、マリアの理解を超えるこの出来事は、聖霊の働き、いと高き方の力に包まれて起こることだと説明しました。

ここで、マリアが人間的な理解力に頼って判断しようとしていたら、判断を誤っていたかもしれせん。出来事は人間の理解を超えることだったからです。人間が正しく判断できる事柄は、人間の理解が及ぶ出来事に限られます。それ以上のことを正しく判断するのは、もともと人間には不可能なのです。

そこで、マリアは一步引いて考えました。自分は主のはしため、主の召し使いではないか。主人が自分をよいように計らってくださるはずではないか。それなら、自分の考えの及ばないことまで考えておられる主に信頼して委ねよう。

考えの及ばないことを示された時、一步引いて考えるとよい判断にたどり着くことがあります。世の中に、騙されて泣く人がいますが、その人は自分だけで判断しようとして却って騙されるのです。もし一步身を引いて、近親者や第三者にひとこと相談すれば、大金を騙し取られる人はもっと少なくなるでしょう。そのように、一步引いて考えるとき、目の前だけでなく、もう少し広く見渡せるようになり、少し遠くを見通せるようになるわけです。

マリアは一步引いて考えました。一步引いたとき、主なる神が出来事を中心にいて、導いていることを知りました。出来事がどのように進んでいくのかは分からなくても、主なる神が中心にいて働かれるのだから信頼して受け入れよう、そう決断したのです。一步引いて、見えなかったことが見えるようになり、恐れに囚われていた心が解放されました。

人間が知恵を巡らせても把握できない場面で、どのようにして出来事を受け止めるのか、マリアは教えてください。それは一步身を引いて考え、観察することです。思い通りにならないこと、いくら言っても理解してもらえないことなど、わたしたちの生活には「なぜ？」と言いたくなることがいろいろあるでしょう。

それら難しい出来事に、マリアはお手本を示してくださいます。あなたの立っている場所から、一步引いてみなさい。そうすることで、見えなかったものが見えるはず。マリアは人類に与えられる救い主の母となる場面で、率先してお手本を示してくださったのです。「いや待てよ」とか「もう一回考えてみよう」と立ち止まったり一步引いたりすることは、本当に必要なことを見極めるため必要な時があるのです。マリアがそれを教えてくださいました。

マリアが一步引いて考えてくださったことで、神が人を救う計画がいよいよ実現しようとしています。歴史の中心に神が置かれて、歴史が動こうとしています。わたしたちも、神の計画の前に一步身を引くことを学びましょう。人間が一步引くことで神が出来事を中心にになり、出来事は最高の結果をもたらし、わたしたちは喜びに満たされます。



## 主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

月が満ちて、神の愛があふれ出た

主の降誕おめでとうございます。新型コロナウイルスに振り回された一年でしたが、お生まれになった救い主は私たちの所に来てくださいました。しかも、「できるだけ近くに」来てくださいました。「近くに来てくださる」救い主を、福音朗読から感じて持ち帰りましょう。

「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。」（2・6-7）今年のクリスマスに中田神父はこの箇所を選びました。特に「月が満ちて」という言葉に惹かれました。もちろんここでは、出産予定の月に達するということですが、満ち足り欠けたりする月の、「満月」も想像させます。

「満ち満ちた状態」から私が考えるのは、「あふれ出る」ということです。それは温泉が湧き出たり、地下水が湧き出たりする様子に似ているでしょうか。神の愛は、御子イエス・キリストとなって母マリアを通してあふれ、私たちに幼子として現れてくださった。私が今年伝えたいメッセージはこれです。

神の愛は、人間の救いという計画のためにあふれ出ました。全能の神が、無力な幼子になられました。あふれ出る愛がなければ、全能のお方が弱く小さな者になることは不可能でした。ヘロデが命を狙っています。最後は十字架にはりつけにされます。あふれ出る愛がなければ、これらの危険が待ち構えている世界に身を置くことは不可能なのです。

このあふれ出る神の愛を最初に受け取るのは誰でしょうか。それは、夜半ミサに参加している私たちです。神の愛が溢れ、わき出ている馬小屋に、私たちは導かれているからです。ミサを祝ったら、あらためて馬小屋に近づきましょう。あふれる様子は源泉に近づくことで確認できます。私たちも幼子を間近に見て、神のあふれ出る愛に触れましょう。

神の愛に触れたなら、私たちには使命が与えられます。それは、「私たちも神の愛に満たされたのだから、あふれ出る愛をより多くの人に届ける」ということです。今年は、健康に不安がある方のミサ参加を自粛しております。県外からの家族が帰省していたり、県外に出張などで出かけた方もミサの参加を自粛しております。これまでであれば問題なく参加できた人でも、参加できない場面が生じています。

何かの形で、こうした人とつながって、降誕の喜びを届けて欲しいのです。中田神父はミサが終わって一時間半もすれば、必ずミサの様子を録音で聞けるように準備します。ひらがなで「こうじ」それに神父を付けて、「こうじ神父」で検索すれば、ブログやホームページを見つかると思います。これが私なりの、「神の愛があふれ出て、人々に届ける方法」です。皆さんも何か考えて、「神の愛はあふれ出て、私たちに届きました」この喜びをひとりでも多くの人に届けることにしましょう。



## 主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

聖体より先に、みことばが

あらためて、主のご降誕おめでとうございます。私たちはミサをささげて、主の降誕を祝いました。昨日話しましたように、都市の封鎖（ロックダウン）のため教会でミサをささげることでもできなかった国があります。身近な関係者が感染したためにミサが中止になった教会もあります。私たちはこうした残念な思いで今日を迎えた人、打ちひしがれている人のことも心に留めて、心を込めてミサをささげるべきです。

主の降誕日中のミサは、ヨハネ福音書の冒頭「言（ことば）が肉となった」という箇所、抽象的に見えます。毎年、この朗読箇所を日中のミサは取り上げています。この朗読と、今年の新型コロナ感染の状況が、私の中では見事に結びつきました。感染拡大の中、ミサを中止せざるを得なかった教会のために、この朗読箇所が人々を慰めてくれます。

それは、冒頭のひとことで十分です。「初めに言（ことば）があった。」（1・1）そうです。初めに、神のことばが響き渡ったのです。これは天地創造の初めから、救い主が人となり、時が満ちて宣教活動を始めた際も、「初めに言（ことば）があった」のです。イエスはいきなり最後の晩餐を制定して弟子たちに委ねたのではなく、ことばで人を見たと、ことばの食卓が3年間あってから、聖体の食卓が用意されたのです。

これは、イエスがこの世におられた時だけのことでしょいか？いいえ、今も同じことです。ミサの前半はみことばの食卓です。ミサの後半が聖体の食卓です。私たちはみことばの食卓に預かってから、聖体の食卓にあずかっているのです。

夜半のミサから、ミサが中止となった教会があります。その方々のご家庭で、ミサに参加できなかったと唇を噛みしめて残念がっているかも知れません。しかしイエスは、すでに二千年前に予告しておられたのです。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」と。言（ことば）によって人間は照らされ、命を得ることになると、二千年前から約束してくださっていたのです。

今日私たちは、ヨハネ福音書の冒頭の朗読で、「みことばであるイエス」を確認しました。もし「聖体のイエス」だけが私たちに残されていたなら、ミサに参加できなかった人は慰めを得られず、「闇に住む民」のままだったでしょう。そうではなく、イエスは「みことば」として、「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与え」（1・12）、今も慰めと希望を与え続けておられるのです。

実は私たちの小教区にも、「みことばであるイエス」が宣べ伝えられることを今か今かと待ち望んでいる人たちがいます。私は今日の日中のミサを「瀬戸山の風」に載せて、全世界帯に届けます。あなたも、誰かのためのメッセージとなって、降誕の喜びを届けに行きましょう。



## 聖家族 (ルカ 2:22-40)

腕に幼子を抱いているなら

聖家族の主日を迎えました。ご降誕からすぐなので、慌ただしい感じでした。来年は土曜日がクリスマスなので、さらに慌ただしくなるでしょう。ただ再来年は、日曜日がクリスマスなので、ホッとしています。来年のクリスマス、果たして新型コロナウイルスの感染は終息しているでしょうか。

他愛のない話を先にしますが、司祭たちは「月曜会」という夕食会を時々しています。たいてい四人です。先月の月曜会で、ある先輩神父様が、「今年から来年は説教が連続するから大変だ。クリスマス夜半の説教、クリスマス日中の説教、そのあとすぐに聖家族の祝日、やっと終わったと思ったら神の母聖マリア。そうこうしていたら1月3日は御公現だ。息つく暇も無い」と言っておりました。毎年のことですが、確かに余韻に浸ることはできませんでした。

考えると、ヨセフとマリアの夫婦も、イエスの誕生の余韻に浸る時間は無かったかも知れません。占星術の学者の訪問のあと、すぐにエジプトに避難しなければならなかったのはご存知でしょう。そもそも、マリア自身、これから起こることを「どうしてそのようなことがあり得ましようか」と思ったわけですし、ヨセフもマリアのことを表沙汰にすることを望まず、密かに離縁しようと考えていました。こうした思いを引きずらずに、すぐに神の望みに従っていったのはすごいことです。

私たちに与えられた福音朗読は、幼子が神殿で献げられる場面の物語でした。シメオンが両親に連れられた幼子を見つけ、幼子を腕に抱きます。そして「神をほめたたえ」、それから両親を「祝福」します。おそらく、「主が遣わすメシア」(2・26)にお目にかかる瞬間を今か今かと待ち望んでいたわけですから、その時にどんな声をかけようか、何かしらのことばを用意していたかも知れません。それらも、いざお目にかかってみればすべて吹き飛んでしまったかも知れません。

しかし、シメオンは「聖霊が彼にとどまっていた」(2・25)ので、新しいことばが口をついて出たのです。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(2・29-32) これら一連の出来事には、共通したものがあると考えました。それは「腕に幼子を抱いている」ということです。

マリアが天使のお告げを聞いた時、「どうしてそのようなことがあり得ましようか」と尋ねましたがそれでもすぐに出来事を神に委ね、受けとめました。腕に抱いていたわけではありませんが、すでに「幼子を抱いている」と言える状態だったからでしょう。

ヨセフも思い悩むのをやめて、マリアを妻として迎えました。「腕に幼子を抱きかかえる」決心がついたからでしょう。シメオンも、女預

言者アンナも、祝福のことばを口にできたのは「腕に幼子を抱いている」預言者だったからこそできたわけです。

すでに、私たちは今週の学びを頂いたようなものです。問題山積、外では新型コロナウイルス、内では教区内の司祭の不祥事。心も身体もくたくたになる一年でした。それでも、「腕に幼子を抱いている」人は失望しません。救い主イエスは私たちが本来手にできない宝だったのに、私たちの手に収まる姿でおいでくださったからです。

よく考えると、「腕に幼子を抱いている」なら、一歩歩くのにも十分気を付けるでしょう。何かが起こっては大変だと、全神経を集中して守ろうとするでしょう。私たちが聖家族から受け取る模範は、「腕に幼子を抱いている」ということは、全神経を幼子に向ける覚悟も、聖マリアと聖ヨセフに倣って求められているということです。私がイエスにつながって日々を過ごし、成長していくためには、「腕に幼子を抱いている」つもりで信仰の務めを果たす覚悟も求められているのです。

簡単に言えば、「腕に幼子を抱いている」その人は、決して他のことに気を散らしてはいけないということです。その幼子と一緒に成長していききたいなら、「腕に幼子を抱いている」そのことを片時も忘れてはいけないのです。中田神父はすべての人に同じことを求めるわけではありませんが、あなたが気にしていることや悩んでいることは「腕に幼子を抱いている」その幼子よりも大事なのですか？これをよく考えて日々を過ごしましょう。

新型コロナウイルスの影響をまともに受けた一年でした。家庭での時間が多くなりました。家庭で中心にあったものは何でしたか。あなたは何を腕に抱いて過ごしましたか。私は今年のコロナ禍で、覚悟を新たにしました。「腕に幼子を抱いている」これを忘れずに日々を過ごしたいと自分に言い聞かせました。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)